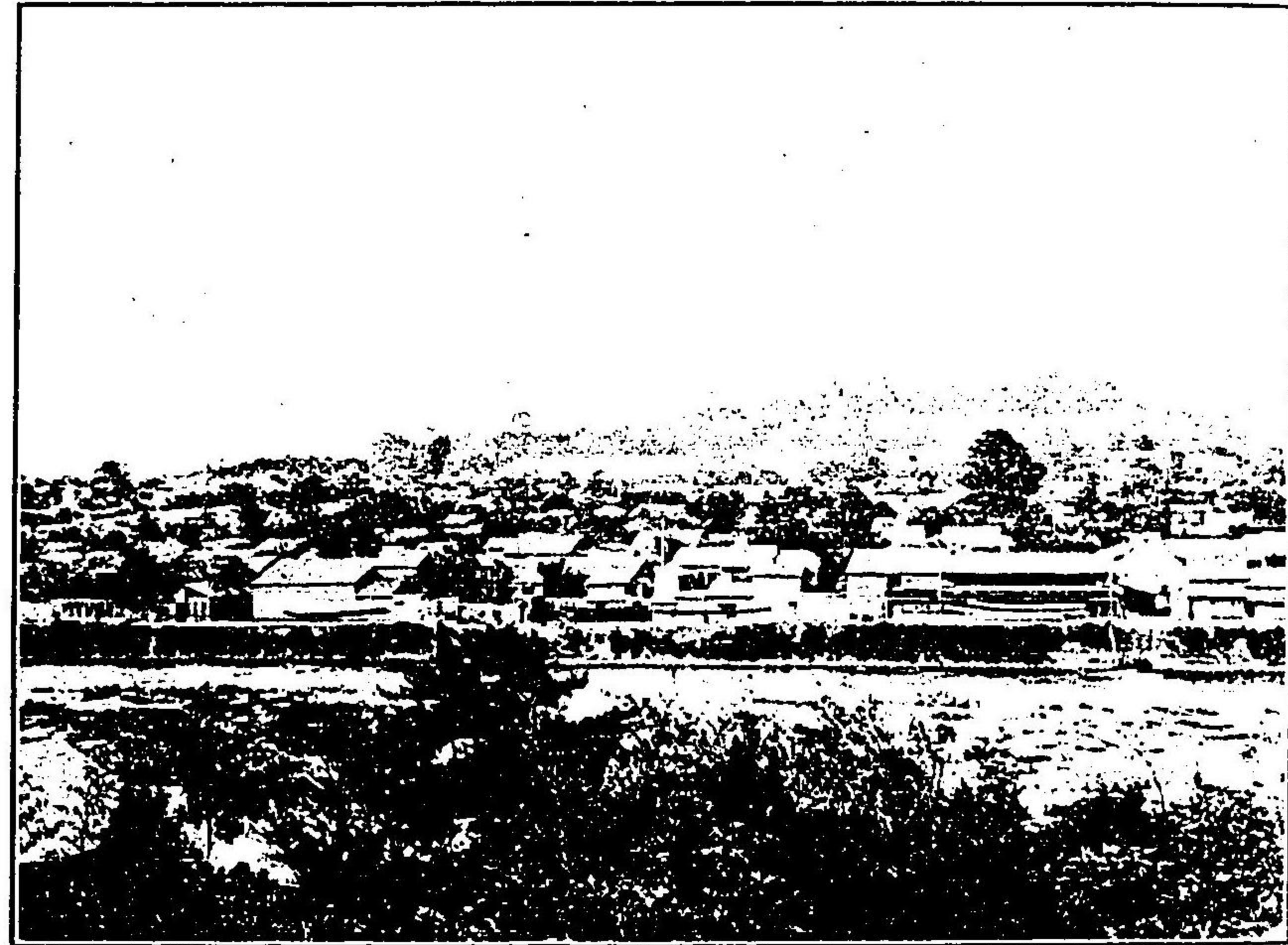


部一の市澤金(甲)

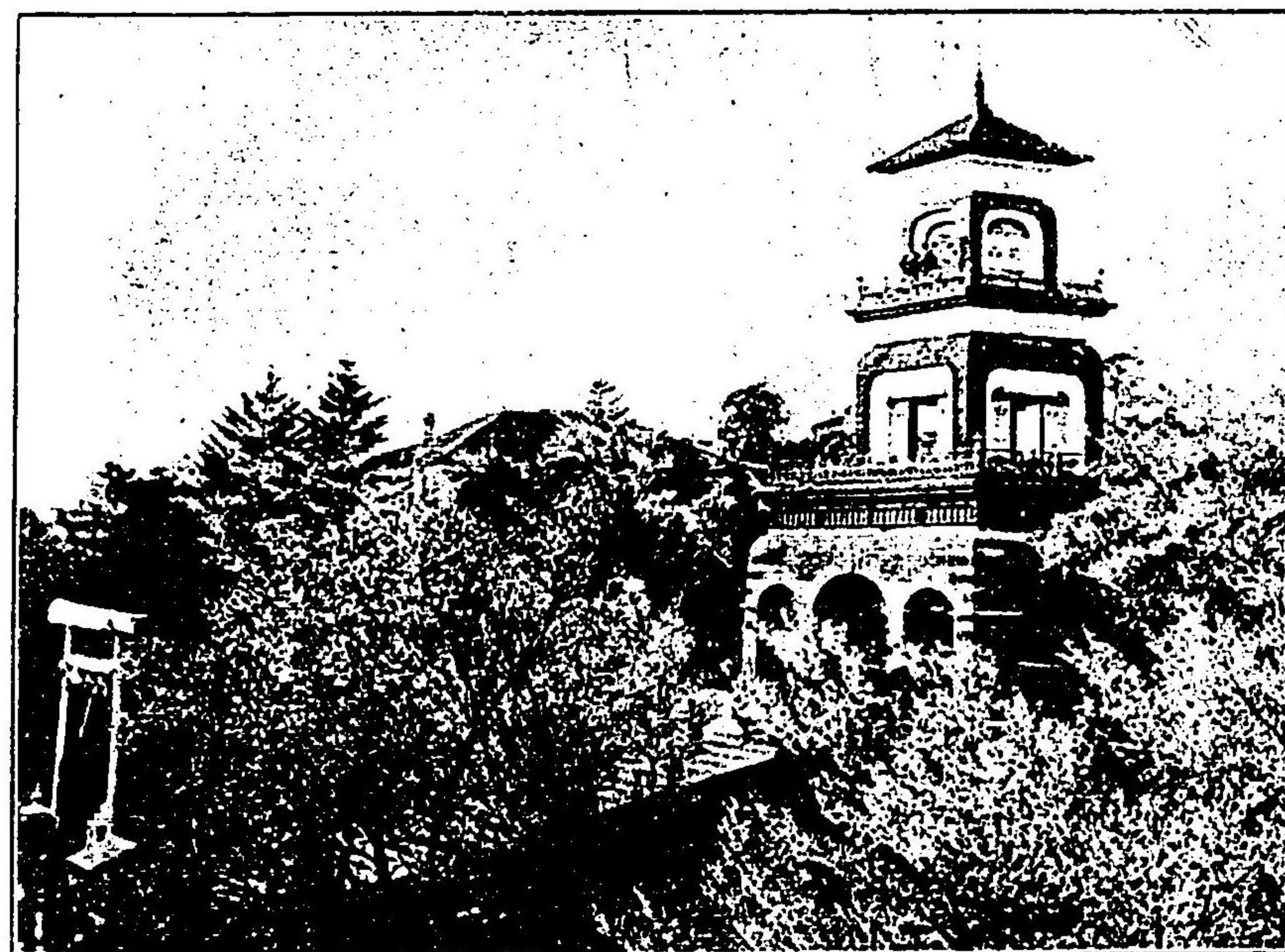


(第三十二圖)

園公六兼市澤金(乙)



郊 近 市 澤 金 (甲)



(第三十三圖)

社 神 山 尾 市 澤 金 (乙)

石油

尼瀨油田

石川縣能美郡宮内村字和佐谷、新潟縣中魚沼郡十日町字和佐谷、全縣西頸城郡小瀧村宇山の坊にも炭層の露出あれども、良品ならざれば多くは稼行せず。

**石油** 本邦に於ける石油の主産地は本地方の新潟縣を以て最とし、北海道遠江羽後羽前及び信濃等之れに亞ぐ。其の採油事業は工業の進歩及び各種の用途に伴ひ、近時漸く盛況に達せり。含油層は一般に第三紀層中に介在せられ、越後に於ける東山西山の如き丘陵地は實に其の寶庫たるものなり。今本地方に於ける有名なる油田に就て、順次其の梗概を述べべし。

**尼瀨油田** 本油田は新潟縣三島郡出雲崎町の南に隣接し、新潟街道の衝に當り、海運の便亦少からず。明治六年より之れが採油に従事し、同十六年に至り、海濱に掘井せしより稍、産額の増加を見しも、全二十三年更にアメリカ式の器械掘先進者は本油田なりとす。含油の地盤は砂岩及び泥板岩にして、其の砂岩は半は疎鬆なる砂に分解し、泥板岩は白色凝灰質にして、俗に白と稱す。此の泥板岩は往々石油及び瓦斯を混騰する油脈の母岩なれば之れに會



草生津油田

するときには坑業者も喜ぶ所なり。出油層は淺きは僅に五六間にして達すれども、出油量は概するに淺處に少く、深底に到るに従ひ、富饒となるが如き傾向あり。常に多少の瓦斯を伴ふが故、兩者の混合密閉せられたる地層を開掘するが如きことあらんか、強大なる瓦斯の壓力は油砂を共に上騰せしめ、一大噴油柱をなすことありと云ふ。原油は品質良好にして、赤褐色を帯び、燈油八割を製出するに適すべし。日本石油株式會社主として、其の坑業を營む。今は其の産油量往年の如く盛ならず。

草生津油田 本油田は尼瀨町の東南約二里を距る、萩の城山北西麓の高處にあり。其の石油を産することは遠く往昔より知られしが、始めて孔を穿ち、之れを採油したるは今より凡そ六七十年前なりとす。降て明治六七年の交に至り、稍、盛況を呈するに至れり。産油地は傾斜急峻なる背斜軸の直上にありて、層位錯雜し、龜裂斷層夥しければ、各井の地層の層位異なるを免れず。然れども傾斜の度は深底に降るに従て緩慢となるが如し。地質は主に泥板岩砂岩よりなり、石油を含蓄する母岩なるものは軟質粗粒の砂岩なり。會其の

妙法寺油田

含油層の地表に露出せるものありと雖も、出油の多きは十間以下の地中にあり。現時は事業大に衰微し、深さ五十間以内の井三個及び若干の横孔あるに止まり、出油量少し。然れども品質は寧ろ佳良にして、七割五分の燈油を製するを得べしといふ。

大坪油田

妙法寺油田 本油田は新潟縣刈羽郡柏崎町の北東約三里に位する妙法寺にあり。遠く上杉氏の時代に、既に含油層の露頭より採油せしと云ふ。地質は泥板岩及び砂岩にして、層位稍錯雜するも、概して層向は北々東を示し、西北西に急斜するもの、如し。出油層は地下七十間以下に在りて、最深の坑井は百三十間に達す。其の事業の盛なりし時は明治二十年頃にして、一日凡そ十石の産出ありたりと雖も、現今は大に衰微せり。原油は良好にして、燈油八割を製出し得べし。

大坪油田 本油田は妙法寺油田の南西約二十町を距る處にあり。舊時は稍、産出ありしも、現今は衰退して殆ど休坑の姿なり。含油層は砂岩及び泥板岩なれども、殊に粗粒狀砂岩に出油の最多しとす。油質は妙法寺の其れと同じ



東山油田

くして、地下八十間以下に於けるものより採油せり。  
東山油田 本油田は新潟縣古志郡山本村にある浦瀬油田及び荷頃村比禮油田等其の附近一帯則ち古志郡全體の油田に對する總稱語なり。就中浦瀬油田は東山油田中の先進にして、比禮油田と共に北越石油業者の寶庫とする處なり。東山現時の状況は一時其の出油量に於て、第二流の位置に立ちたることありと雖も、全體に於て未だ衰へたるにあらず。唯、西山油田發見の後又た昔日の觀なきものゝ如し。以下東山油田中主要なる浦瀬比禮嘉津保澤の各油田に就て、其の梗概を述べし。

浦瀬油田

浦瀬油田 本油田は古志郡山本村大字浦瀬にあり。近隣の比禮及び嘉津保澤と共に、本郡に於ける重要なる油田なり。明治四年に創業せしも、出油量僅少なるがため永く廢坑に歸したり。其の後明治二十三年に至り、再度之れが採油に従事せしが、多少の盛衰ありて、遂に今日に至り、主要なる油田の一となれり。其の盛況にあるや、一時産油量全國に冠たるものありしと云ふ。地質は泥板岩砂岩の重疊せるものにして、上部は火山岩層に類する第四紀古

比禮油田

層を以て被覆せらる。砂岩は石英の粒子を混ずるもの多く、含油の母岩は實に本岩なり。殊に小豆大の砂礫を混ずるものに於て、最も富饒なり。然れども方言石と稱せる硬質砂岩或は岩と稱せる泥板岩に含有する場合には油量少なしとす。含油層は數層ありと雖も、上部に位するものは常に出油貧弱なれば、概六十間以上の地底に布衍するものより採油す。其の最深の坑井は殆んど二百間に達す。油質は濃厚にして、黒褐色を帯び、約五割の燈油を製出す。其の品位は一般前記尼瀬地方の其れに比し、大に劣れりと云ふべし。去る明治三十七年の製出高は計九万四百五十四石なり。

嘉津保澤油田

比禮油田 本油田は古志郡荷頃村大字比禮にありて、東方浦瀬油田とは南北に走れる一小分水嶺に依りて隣接す。地質並に含油の母岩は浦瀬油田の其れに等しく、油質亦良好ならず。然れども坑井多く、現今尙多量の出油あり。浦瀬油田と共に、日本石油株式會社北越石油株式會社等數多の會社に據りて、採油經營せらる。去る明治三十七年の製出高は計六万一千七百一十一石なり。  
嘉津保澤油田 本油田は浦瀬比禮油田の正南に隣接し、山本村字加津保澤



と桂澤の中間に流下する溪流の源頭の一高地にあり。創業は明治二十五年の夏季にして、爾後穿掘せる油井の数は桂澤を通じて、出油井七十一坑、廢井百四十二坑の多きに達し、尙ほ其の他に掘井中のもの殆んど二十餘坑あり。明治二十八年の頃を以て、本油田の最も隆盛を致せる時期なりとす。此の時一ヶ月の産一萬石を超過し、前記浦瀬採油地と共に重要なる油田たりしなり。然れども其の後亂掘の結果大に衰退せり。地質は浦瀬比禮と同じく砂岩泥板岩にして、殊に泥板岩好く發達し、數層の集塊岩床を挿めり。其の含油層に會するは地質構造の如何に依れりと雖も、概して地下七十間乃至百二十間の深さにあるもの、如し。而して之れに會する時は、多量の石油を瓦斯と共に爆發噴騰することありと云ふ。

西山油田 本油田の稱は東山油田に對する稱呼にして、長岡市を中心とし、其の以西に於ける地方の油田を總稱し、主として長嶺宮川鎌田等の採油地を指す。今主要なる宮川長嶺兩油田に付て叙述すべし。

宮川油田

宮川油田 本油田は刈羽郡柏崎町の北北東約三里の海濱に瀕する宮川町の

西山油田

長嶺油田

東方凡そ十五町なる字岩野及び小猿田に跨る。此の地二十餘年前手掘鑿井を試みし舊蹟ありしが、去る明治廿七年此處に機械掘井を穿ち、以來十五坑を開鑿せしが、其の油質浦瀬に比し多少の遜色あり。地質は數種の泥板岩砂岩より成り、時々礫岩を交へ、出油層は泥板岩及び砂岩の間隙又は砂利中にありと云ふ。而して地下約二百間にして、始めて含油層に達するが如き不便あるは、本油田のため大なる不幸なりと云ふべし。日々三十餘石の産出あり。日本石油株式會社の經營に屬す。

長嶺油田 宮川油田の北東隣なる本油田は、去る明治三十年の末に創業せるものにして、近時漸く繁盛の域に趣き、深さ百三十間未滿の油井二十餘口、日々の産出五百石内外にして、重要な石油の主産地たり。地質は砂岩泥板岩の互層より成り、石油及び瓦斯は、多くは百間内外の深底にある細粒質土狀の砂岩中に含蓋せらる。此の含油層に開達する時は、瓦斯の壓力に因り高く石油を噴騰し、其の勢強烈にして、恰も間歇泉を見るが如く、最初の間は時を限りて噴出すと云ふ。然れども瓦斯の壓力衰ふる間は、敢て石油を吸上



くべき勞力を要せずして、能く百餘石を湧出するが如き良井少からず。本油田は日本石油株式會社古志石油株式會社資田石油株式會社等の營業なり。其の原油の品質は頗る濃厚にして、燈油分は漸く平均四割を得るに止り、宮川産に比して、遙に劣等なりと云ふべし。去る明治三十七年の産出高は計十一万七千六百五十一石なり。

新津油田

新津油田 本油田は新潟縣古志三島刈羽の三郡に亘て必要なる産油地にして、中蒲原郡旭鹽谷金津天ヶ澤鎌倉等を包括せる通稱なり。三百年來の歴史を有し、其の開發の由來は慶長の頃にありて、其の瓦斯の噴出し、臭水の湧する場所を靈地として、迷信者に靈異視せられ、古來越後七不思議の一として數へられたり。地質は泥板岩砂岩礫岩の互層より成り、概ね丘地に於て地下三十間、低地に於て二十間に於て出油層に達すべし。岩層の傾斜は主に北西なれども、勾配の緩急は勿論其の方位と共に、各坑井に因りて一定せざるの觀あり。蓋し時々斷層のために變轉せるものなるべし。産油は品質劣等にして、燈火用に適せざれども、工業用として需用多く、且つ出油量減退或

頸城油田

は涸渴するが如き地層ならざれば將來重要な坑業地たるべし。個人として經營せるものには、鷲田氏の村井商會と共同せるあり。其の他會社としては新潟鑛業新津石油日本鑛油新津鑛業等の諸株式會社ありて、舊時の手掘井と機械鑿井の簡單なる上總掘アメリカ式大機械掘等を採用して、大小の企業者之れが經營をなせり。

頸城油田 新潟縣東頸城中頸城兩郡内の各所に散在せるものを稱して頸城油田と云ふ。本地方の石油業は三百年の以前にありて、中途頽廢し、近年更に之れを再興せしなり。油質良好なるを以て、製油家の尊重する處となり。明治初年より手掘法にて採掘し來りしが、一時中止の姿となり、後明治二十九年長岡興業株式會社之れが再興に従事せり。其の附近なる玄藤寺達野澤田等の産油を合稱して、玄藤寺油と云ふ。頸城油田は一般に地層の傾斜甚だしく、斷層崩懷の爲め、挿入せる鐵管を切斷せらるゝ憂ありしも、再興の地域の地層傾斜は前に比して急ならず、且つ含油層も甚しく遠からずと云ふ。今本油田にて重要な玄藤寺及び大荒戸の油田に就て概説せん。



玄藤寺油田

玄藤寺油田 本油田は高田町の南東約三里を距て、其の坑業地は玄藤寺馬屋澤田等の地域に跨る。最も隆盛なりし時期は玄藤寺に於ては明治十七年頃一ヶ月凡そ千餘石を輸出し、馬屋に於ては明治二十七年頃一ヶ月百三十石乃至百五十石なりしも、爾後年を追て漸く減量せり。地質は泥板岩を主とし、含油層は白色細粒の凝灰質砂岩と青色の砂なり。地下八九十間の深處より往々石炭介殻木葉化石等を出すと云ふ。油井は深さ百七十六間のものを最深とし、皆手掘に屬せり。油質佳良にして、八割以上の燈油を製出するに足れり。

大荒戸油田

大荒戸油田 東頸城郡大荒戸にある本油田は最も隆盛の時期は明治九年にありて、當時最良の一井には噴出の石油坑底より十七八間の高さに登るに至りしと云ふ。地質は泥板岩粘土砂石より成り、普通上部の含油層に達するは地表より七八間の處にありて、岩層は概して上部は南西に傾き、下部油層に近づけば之れと反對の方向に變ずるものゝ如し。産油の質良好にして、八割五分の燈油及一割の揮發油を製出するを得べし。此他西頸城郡に飛山油田あり。近時其業漸く興るに至れり。

硫黄

硫黄 富山縣上新川郡山崎村硫黄澤及び立山温泉にては、温泉湧出口の四近に硫黄を堆積し、殊に硫黄澤に於て多量なれど降雪の期永く、道路峻峻なれば採掘に不便なるを免れず。亦他福井縣大野郡五箇村よりも少量を産す。亦越後妙高山燒山にある硫汽洞にも硫黄の産少なからざるも未だ之を採掘するに至らず。

石材

石材 本地方に於ける石材産出は多くは富士岩凝灰岩砂岩にして、世人の愛用する花崗岩の産は只一局部に限らるるが如し。即ち本地方に於て花崗岩の石材として採切せらるゝは、福井縣敦賀郡三方郡に在るもの等に過ぎざるなり。新潟縣古志郡村松及び鎌澤より産する淡灰色の角閃富士岩は俗に村松石と稱し、長岡三條新潟の各市街に販賣せらる。全縣下佐渡島の各地よりは角閃富士岩及び輝石富士岩を出し、之れを採切する所頗る多し。而して一般に其の海岸に近きが故に運搬に便なりと雖も、需用の途少なきを以て、採掘の業従て振はず。全縣下西蒲原郡間瀬村の海濱より採切する富士岩質凝灰岩は灰綠色多孔狀にして、其の孔隙は泡沸石を以て填充せらる。岩質粗軟に

村松石



カクマ石

笏谷石

銀星石

砥礪材

して、重量軽きが故に採切し易く、産出亦た較多し。福井縣大野郡勝山町の附近なる三谷の南東約二十町なるカクマ石の山中に板狀に剝げ易き、堅硬なる輝石富士岩を産す。里俗カクマ石と稱し、屋根の鎮石石塀等に用ふ。全縣足羽郡小和清水の足羽川には侏羅紀砂岩の泥板岩と互層して露出するあり。此の砂岩は石理細粒均一にして、白色又は灰綠色を帯び、多く石臼燈籠土臺石として需用あり。全縣福井市に近き笏谷よりは笏谷石と稱し、石理均一にして、緻密なる凝灰岩を産し、主として石塔佛像等の如き細工石に使用せらる。裝飾石材としては、全縣遠敷郡大熊志積の間及び海士坂に露出する大理石あり。化石を含有し、美濃國赤坂産のものに類似す。里俗之れを鮫石又は銀星石と稱す。その他蛇紋岩は新潟縣南魚沼郡西中島村より多少の産出あり。

**砥礪材** 砥礪材の産出は甚だ僅少にして、特に之れを説述すべきものなし。新潟縣佐渡島第三紀層の泥板岩凝灰岩は緻密細粒質のものは砥材として供用せられ得るも、産額多からず。富山縣下新川郡古鹿野に於ては角閃富士

硯材

石灰

岩の稍腐蝕したるものを採切し、中砥又は荒砥に供用す。其の外観砂岩の如し。全縣福平村に産する凝灰泥板岩は前者より品位劣等なれども、亦た中砥に用ひらる、兩所産額多からず。福井縣加佐郡の中生紀層中の砂岩及び全縣竹野郡磯村の石英粗面岩の如き又た砥材に用ふるを得べし。

**硯材** 新潟縣西頸城郡大平村湯の河内の東南溪谷の地に露出せる黒色の第三紀泥板岩は硯材に使用らるゝも質良好ならず、且つ道路嶮惡にして、運搬に不便なり。古來宮川石又は鳳足石と稱し、著名なる硯石は、福井縣遠敷郡新保村字撥谷に産出するラヂオラリア板岩にして、其の色紅紫或は青緑、其の質堅緻にして甚だ美なり。若狹風土記に由れば昔日後水尾帝の御愛用ありしものなりと。然れども往昔寶硯として、名聲ありしもの今や廢れて用ひられず、産出微々たり。全縣大野郡蒜島村の第三紀層中の泥板岩より製するものは、宮城縣産の玄昌石に類し、所謂日用硯に適す。

**石灰** 本地方に於て片麻岩及び秩父古生層中には、其の内に石灰岩を介在するもの多ければ所在之れを採掘して石灰の原料に供す。今其の主要なる



陶土

ものを擧ぐれば、富山縣大野郡中清水村にては秩父古生層の輝綠凝灰岩内に厚さ八十尺の石灰岩ありて、春期盛に石灰を製す。石川縣江沼郡生水に於ては九谷の溪流に片麻岩内に介在せる石灰岩ありて、五六基の爐を設け、一ヶ年一萬俵餘の石灰を製す。全縣石川郡二又にては農閑に石灰を燒製し、其の産額多からず。其の他福井縣三方郡新庄村、全縣遠敷郡西小川村、矢代村等諸所に於て多少の産出あり。

陶土

本地方に於て陶土の産出多きは石川縣を第一とし、皆有名なる九谷燒素地の製造に供用せらる。石川縣能美郡金野村、花坂、全村、五國寺、全村、正蓮寺等より産出するものは第三紀の角礫岩凝灰質砂岩等を排して貫通せる石英粗面岩の風化水蝕に遇ひしものにして、上部より深さ一丈五尺乃至二丈五尺の間は甚だしく霏爛して、白色の粘土となれり。而して五國寺産は花坂産に比して硅酸の量多し。又た全村、鍋谷産の陶土は全じく、石英粗面岩の霏爛せるものにして、白灰色を帯び、粘度一層強し。九谷燒の原料は前記數ヶ所産の陶土を適當に調合して製す。而して各製造所に由り其の配合に多少の相違

雜礦物

水晶

紫水晶

算盤玉石

蛋白石

玉滴石

あり。新潟縣佐渡島の第四紀層に産する脈岩の分解せる赤色の粘土は無名異燒の原料に供せらる。石川縣鹿島郡久江村、ハット山より亦較、良好なる陶土を産す。其の他本地方中に於て陶土を産するの地少なからざれども、産額少なく且つ其の質良好なるもの少なし。

雜礦物

雜礦物中水晶は、新潟縣佐渡郡相川より其の内部に正しき空晶ありて、多數の液體を包裹する所謂水入水晶なるものを産し、其の他乳色を帯び兩端を具備するものあり。紫水晶は全縣東蒲原郡綱木村より産するも、從來世に廣く知られず。外部濃紫色にして、内部は透明なる一美晶にして、恐らくは本邦産中の最たるものなるべしと云ふ。全縣中蒲原郡船目、全郡鷹の巣山、全縣北蒲原郡赤谷村等より算盤玉石と稱し、玉隨の恰も算盤玉の如き形狀をなせるものを産す。蛋白石は石川縣江沼郡菩提寺に産し、本邦の主産地として知らる。其の色は白又たは淡青にして、粗面岩及び凝灰岩中にあり、比較的多量に産するを以て裝飾用に供せらる。富山縣上新川郡立山に産する蛋白石の一種なる玉滴石は立山温泉の沈澱物として産し、米粒又たは粟粒大



碧玉  
佐渡瑪瑙  
金平糖石  
螢石  
柘榴石

の正しき球粒にして、無色透明なり。此の圓粒は數多相集合して塊をなすも、結合物少なき部分に於ては容易に之れを分離することを得べく、又た自然に分離することあり。其の球粒を破碎すれば中心に微少なる砂核あるを常とす。不純物を混ざるものを除く外は無色透明にして美麗なり。新潟縣佐渡赤玉村の附近よりは赤色又たは黄赤色の堅固なる碧玉を産出す。其の質美ならずして、裝飾品に適せざれども、方言赤玉石と稱して名あり。復た本村附近より産する玉髓は古來佐渡瑪瑙と稱し、名産の一に數へられたるも、其の産額赤玉石と共に僅少なりとす。自然砒は福井縣大野郡赤谷に産するもの最も有名にして、金米糖の如き形狀をなすを以て、俗に金米糖石と稱す。此の如き自然砒の結晶をなすものは實に世界の稀品と稱せらるゝも、近年其の産出なきは大に遺憾と云ふべし。螢石は石川縣羽咋郡寶達山並に福井縣大野郡面谷村より産す。前者は淡綠色にして、内部は殆んど透明なるも外面粗鬆なり、後者は脈石をなすものにして、稀に美なる結晶をなすとあり。富山縣上新川郡大山村有峯よりは磁鐵鑛及び石英と共に接觸鑛物として柘榴石を産す。沸石

曹達沸石  
方沸石  
魚眼石

類は新潟縣西蒲原郡間瀬村を以て本邦に於ける主産地となす。則ち曹達沸石は針狀又たは纖維狀をなし、方沸石は無色透明なる結晶をなし、魚眼石は無色透明のもの、青色なるものとありて、何れも玄武岩質凝灰岩中に晶脈をなして現出す。其の他本地方より産する鑛物産地を列記すれば左表の如し。

寶石裝飾石産地

石名	縣	郡	村	石名	縣	郡	村
水晶	富山	上新川	有峯	蛋白石	富山	上新川	立山
瑪瑙	新潟	東蒲原	神谷	全	石川	江沼	那谷
全	富山	西礪波	大美	柘榴石	新潟	東蒲原	鹿瀬
全	全	東礪波	南山田	全	全	全	栃堀
全	石川	鳳至	大屋	全	富山	下新川	舟見
綠瑪瑙	富山	上新川	大西	全	全	全	愛本



### 六 商業

概況

北陸の地たる東南に山を負ひて表日本と隔たり、西北は風浪強き日本海に面するを以て、古來人文の發達頗遅緩にして、其商業も亦東海近畿の地に比しして數歩を讓るを免れざりしと雖も、近時二條の鐵道は背後の山脈を破りて、表日本より來り、沿海の諸港には日本郵船會社大家汽船會社等の汽船の定期航海ある外、猶沿海航路の小汽船も往來次第に頻繁となり、交通の便愈開け、物貨の集散繁劇を加へ、各種の農産物及近時著しく發達せる工産物は、次第に其販路を擴張して遂に海外に及ぼし、本邦輸出品中に重要な位置を占むるものあるに至れり。又北陸地方に屬せざる飛驒信濃に出入する物貨も、本地方の交通開くるに従ひ、其一部は本區域の商業市及海港を經由するもの益多きを加へ、商業上の活動は日進の勢を示すに至れり。

北陸四縣中西方の二縣石川福井と東方の二縣富山新潟との商業を比較するに、前者は主として工産物殊に絹織物の取引盛にして、後者は主として農産

物殊に米穀の取引大なるを見る。故に前二縣に於ける主要輸出入品は機業の原料たる生糸及其製品なる絹織物にして、後二縣は米穀及肥料其主位を占む。然れども富山新潟の二縣は雷に農産物のみならず、工藝品及び礦産物の取引も亦頗盛にして、新潟縣に於ける石油の取引は、近年著るしく勃興して之が爲に同地に流入する資金は頗る大なるものあり。又富山縣の賣藥が古來行商によりて全國に霑がるゝことは世の洽く知る所なるべし。

北陸の諸港は日本海を隔て、シベリア及韓國の諸港に對し、殊に歐亞を縦貫するシベリア大鐵道の終點なるウラヂボストックと、七尾及敦賀との距離は、五百海里に充たずして、普通の汽船にてもよく四十時間にして、達し得べきを以て、海外貿易に於ては、甚だ有望なる地位に立つ者と云ふべきなり。されば現今北陸四縣に於ては明治三十二年始めて開港場と指定せられたる敦賀七尾伏木の三港に舊來の新潟を加へて、四貿易港を有せり。これ等の諸港とシベリア及韓國との間の航路も、亦開けたるにも拘らず、船舶の出入甚だ少く、殊に外國船の如きは、新潟港を除くの外入港あるもの、皆無に



して、輸出入額も新潟港を除きては、總額十萬圓以上に達するものなきは、甚だ慨歎に堪へざる處なりとす。

商業都會

(イ) 商業都會

福井市

福井市は北陸街道と大野勝山坂井の三街道との交叉點に位し、又官設鐵道北陸支線の之を貫くあり。加ふるに足羽川の水運は近時河川の改修により、一層交通の便を増すに至れり。本市は斯の如き縣下交通上の中心を占め、附近の町村より出づる絹織物殊に羽二重の集散地をなし、羽二重の市場としては全國第一に位せり。始め本市の機業家は市中の仲買商のみによらず、直接に横濱に荷物を送りて、便宜委託販賣をなし來りしが、明治二十五年頃在横濱ローゼンザー商會及メーソン商會は、本邦人の名義によりて、同市に支店を設け、其の他横濱京都の仲買商數名來り開店して、羽二重の賣買に従事せし以來本品一切當地にて取引するとなり、又日本絹糸株式會社を始め、十萬圓以上の資本を以て、絹織物及生糸の販賣に従事する會社興りしより、本

勝山町  
大野町

市に於ける、絹織物及生糸の取引益、隆盛を極め、現今は取引年額絹織物生糸共に各二千萬圓を出づるに至れり。金融機關には農工銀行第九十二銀行第九十一銀行あれども、何れも資本金五拾萬圓を出てず。外に大阪百二十銀行及富山十二銀行支店あり。

勝山町大野町は共に其附近に産する煙草の取引行はれ、又近來製糸の業進み勝山町の製糸場は縣下第一と稱せらるゝに至りしを以て、生糸織物の市場として其名を知らるゝに至れり。

敦賀町

敦賀町は敦賀灣に瀕し日本海岸有數の好錨地也。其灣口立石岬には不動白色の燈臺あり。港口防波堤上には燈竿の設備ありて出入の船舶を警め、底質泥にして錨爪の把握に適し、港内廣くして優に多數の大汽船を入るゝに足る。又陸運には官設鐵道北陸支線の近江より來り本地を過ぎりて更に北方に向ふあり。特に海岸に支線を出して貨物の運搬に便す。海運は日本郵船會社の西廻線大家汽船會社の日本海線ありて、本港と日本海岸諸港を連ね、後者は北海道樺太及ウラヂポストクとの間に直接航路を開けり。別に丹州汽船會社の



小汽船は若狹灣岸の諸港を往復す。本港は斯の如く海陸交通上の要衝に當るを以て、内國商業は隆盛を極め、重要輸出入品は本縣機業の原料なる生糸を第一として縮緬・練の類之に次ぎ、輸出總額は千二百九拾八萬圓餘輸入總額は千二百三拾萬圓餘に達す。本港の特別輸出港と指定せられたるは明治二十九年にして、其後三十二年に至り開港場と定めしむ。開港後日未だ淺きを以て、外國貿易は未だ不振の状態にありて、輸出は蜜柑・食鹽・果實・野菜の類約七萬三千圓にして、ウラヂポスト・樺太及韓國に向ふ。輸入はニコライエブスクより來る鹽鮭・鹽鱒・松島・礮陵島より來る木材ウラヂポストより來る米糠大豆を主とし其額一萬五千圓に過ぎず。

本町には敦賀貿易汽船會社・倉庫會社・船會社・船會社あれども市況に比すれば規模小にして言ふに足らず、金融機關には大和田銀行・敦賀銀行あり。

三國町は九頭龍川の門戸に位する河口港にして、米穀取引所の設あれども、港灣よろしからざるを以て商況振はず。小濱町は好良なる鰯地を有すれども、陸上の交通不便にして物貨の集散區域狭きを以て、物貨の取引盛ならず。

三國町  
小濱町

金澤市

金澤市は政治上の中心としては遙に福井市に勝り、人口亦同市の二倍以上を有すれども、商業上の活動は遠く之に及ばず。然れども縣下の機業近時著しく發達し陶磁器漆器の産亦少からざるを以て、漸次に此等の取引盛大となるに至るべし。商業會議所米穀取引所あり、又金融機關には、農工銀行加州銀行等あり。

小松町

小松町は紅梅甲斐絹羽二重の機業勃興し、其取引の盛なると縣下第一位に居る。

七尾町

七尾町は七尾南灣に臨み、其港は日本海沿岸諸港の患をなす西北風を防ぐに足れども、灣口小口峽に暗礁の伏在するものあるを以て浮標によりて出入の船舶を警戒せり。本港陸上の交通には七尾鐵道の津幡驛に於て官設鐵道北陸支線より岐れて來るあり。海運には日本郵船會社西廻線、大家汽船會社の日本海線ありて、日本海岸の諸港を連れ、後者はウラヂポストとの間に直接航路を開けり。又附近の小港の間を往復する越中汽船會社共同汽船會社の小蒸汽船あり。本港の輸出入品は米石油藥莖食鹽の類にして敦賀港と全く其



趣を異にし、其輸出額は三百十六萬圓餘輸入額は三百九十八萬餘に過ぎず。外國貿易は主としてウラヂホストックとの間に行はれ、米醬油堯莖木炭の類を輸出し、總額四萬圓を出づること少許なり。輸入は總額二百八十五圓に過ぎず。金融機關には能登銀行鹿島銀行等あり。

富山市

富山市は北陸鐵道飛驒街道八尾街道等の交叉點にありて、官設鐵道北陸線は、滋賀福井石川諸縣の主要ある都會を経て、本市に來り、又神通川の水運により岩瀬湊と連絡するを以て、縣下の物産を吞吐するに適するのみならず、飛驒北半部に出入する貨物も此地を経由するもの少からず。有名なる本市の賣藥は年額貳百萬圓以上に達し、全國に其行商を見ざるの地なく、近年に至りてはシベリア韓國ハワイにも其販路を開くに至れり。從來の名産なる麻布近來發達せる羽二重平絹絹綿交織等各種の織物も、亦た其産額を増加するに從て、此等商品の取引漸く活潑となり、明治三十三年には其の委託販賣を目的とせる富山絹糸會社富山絹糸同盟社相つぎて興るに至れり。物貨の出入斯の如く活潑なるを以て、商業會議所米穀肥料取引所の設あり。金融機關には

高岡市

資本金二百萬圓を有する第十二銀行を初とし第四十七銀行富山橋北銀行あり。高岡市は北陸街道の要路に當り、又官設鐵道北陸線と中越鐵道との交叉點にありて、水運は庄川により伏木港とを連絡す。故に庄川沿岸の産物殊に所謂越中米の集散地にして、又本市に於て製造する銅器木綿染地絹綿織物の取引市場たり。商業會議所米穀取引所の設ありて、本市の米穀取引所に於ける米價の高低はよく全國の米價を動かすに足ると稱せらる。是を以て其金融機關としては、資本金百五十萬圓の高岡銀行百萬圓の高岡共立銀行あり。庄川上流の城端町は近來發達せる生糸及羽二重業の中心なり。

伏木町

伏木町は中越鐵道の終點に位し、庄川の門戸を占め富山高岡の商業市を背後に控ふるを以て、市街は至て小なれども、越中平野に産する越中米の吐口として、縣下第一の商港をなす。港頭には白色不動の燈臺ありて、出入の船舶を警戒すれども、庄川の齎せる土沙の堆積により港灣よろしからず。故に近頃東北方に新河道を開きて庄川の水大部を他方に排水し、又港灣を浚渫せんとするの計畫あり。現今本港に寄泊する船舶は、日本郵船會社の西廻線大



家汽船會社の日本海線及越中商船會社の汽船にして、前二者は日本海沿岸の諸港を連れ、後者は越後越中能登の沿岸を航行す。庄川神通川の平野より出づる米は、多く此港を経由して輸出せらるゝものなるが故に、其輸出額は年々三十萬石以上に達し、これが爲に庄川の沿岸には幾多の倉庫相接せり。其輸出先は主として北海道なりとす。其他砂糖木綿糸蠶表翼産類は主要輸出品にして輸出総額は六百九十九萬圓餘に達す。又輸入品の主なるものは砂糖餅搾糟等の各種肥料及生糸繭にして、其中肥料類は北海道より來り縣下田圃の肥料に供するもの生糸繭は縣下絹織物の原料なり。外國貿易は未だ隆盛なりと云ふべからざるも、輸出総額は四萬八千餘圓輸入総額は七萬餘圓に達し、新潟を除けば山陰北陸の開港場中此地に及ぶものなし。其取引先きは敦賀と略ぼ同一なり。斯の如く米の輸出盛なるを以て、日本郵船會社は特に此地に支店を置く、其他越中商船會社伏木倉庫會社あり。金融機關には伏木銀行あり。

新潟市は信濃川阿賀川沃野の海に臨む所にありて、信濃川の門戸に位すれ

新潟市

ども、河口は河流の運び來れる土砂の沈積によりて砂洲を生じ、海底淺く水流急なるを以て近時河口に改修工事を施し船舶の出入稍便なるを得たるも、猶吃水の深き船舶は河口に入るを得ずして、港外の沖に繫泊するの不便あり。されば毎年十一月より翌年三月までは、風浪強きを以て寄泊する船舶少く、其他の時期に於ても天候憚悪なる日は、佐渡の夷港に避くるを常とす。現今信濃川の川汽船は本市と長岡町との間を往復し、外に其支流中ノ口河によりて燕町に至るものあり。又北越鐵道は西方直江津町より、柏崎町長岡町等を経て、信濃川の對岸沼垂町まで來る。海運は日本郵船會社の西廻線大家汽船會社の日本海線によりて日本海沿岸の諸港並に神戸大阪東京と相連絡し又越佐汽船會社の汽船は直江津酒田佐渡北海道の間を往復す。本市は斯の如き交通上の要衝に立つを以て、越後の平野に産する米穀は主として此地に集散すると、越中平野の伏木港に於けるが如しと雖も、日本第一の米産地を背後に控ふるを以て、其市況の般賑なるともより伏木町の比に非ず。故に商業會議所米穀取引所の設あり。然れども港灣頗る不良なるを以て、其輸出入額



は甚だ多からず、輸出品の主なるものは勿論米にして主として北海道及東京に向ひ年額三十萬石に近く、之に次ぐを石油とす。本港の輸出品總額五百八萬圓餘なり。輸入品は砂糖鹽鮭及外國米を主とし其輸入總額二百六十七萬圓餘に過ぎず。外國貿易は維新以來五港の一として、其名高きにも拘らず、殆ど見るべきものなく、明治三十六年間に出入したる外國船は僅に二隻に過ぎず。されば外商の居留するもの極めて尠なく其貿易額も門司函館に及ばざると遠く室蘭武豊にすら一籌を輸するの状況にあれども、北陸山陰の沿岸に於ては猶ほ主位を占む。輸出品の主なるものは米食鹽及醬油にして、ウラヂボストクニコライエブスクカムチアツカ及樺太本統計は割讓以前の材料によるに  
向ひ總額僅に九萬三千餘圓に過ぎず。輸入品はフランス領インドシナ及びピシ  
アムより來る米のみても、百萬圓以上に達し、之にカムチアツクニコライエ  
ブスクより來る鹽鮭鹽鱈等を加ふるときは、其總額實に百二十五萬圓を超ゆ。  
金融機關には資本金百五十萬圓を以て營業する新潟銀行及新潟商業銀行百萬  
圓あり。

## 長岡町

長岡町は古志三島兩郡に跨れる所謂東山西山油田地方の中心に位し、兩郡の道路此地に集中す。又信濃川汽船航路の終點を占め、北越鐵道の主要驛をなす。されば北越鐵道會社にては本社を此地に置き其工場亦此地にあり。殊に本邦産石油の取引は此地を以て全國第一とし二百三十五萬圓の資本金を有する帝國石油會社、百五十萬圓の資本金を以て起れる寶田石油會社を始め、大小十六個の會社は皆石油採掘販賣を目的とするものなり。其他信濃川中流沿岸の貨物は、多く此地に集まり、之を新潟市に輸送するを以て、新潟市商業の財源は一部を此地に仰ぐものといふべくして商業の活潑なると新潟市を凌駕せんとす。故に長岡米穀石油取引所あり。又第六十九銀行は資本金二百拾萬圓にして、北陸第一の金融機關たり。別に長岡銀行も亦百萬圓の資本金を有す。又以て本町の商業上に於ける活動を知るに足るべし。

## 直江津町

直江津町は表裏日本を連絡せる官設鐵道信越線の日本海岸に出て、北越鐵道と連絡せる重要驛をなせるのみならず、新潟と共に北越に於ける日本海の二要港をなせども港灣の設備毫も見らるべきものなく、又沿岸は全く西北風に



柏崎町

曝露するを以て風浪強き日は船舶の寄泊するものなし。然れども此地は一方に於て彼の海を有せざる信濃の咽喉とも稱すべき地點を占むるを以て、古來同地に入るべき米鹽魚介は多く此地を經由せるなり。現今日本郵船會社、越佐汽船會社の汽船の寄泊する處となり、北越屈指の商業市をなす。されば商業會議所米穀取引所の設あり。又町の東方大湊村にはインターナショナル石油會社の大油槽あり。

小千谷町  
十日村町  
五泉町

柏崎町は北越鐵道の要驛にして、又此地は長岡町と共に石油業の中心をなし、之に接せる大洲村に於ける日本石油會社は、資本金二百四十萬圓を有せる一大會社にして、本邦斯業者中其設立最も古く又其事業最も盛なるものなり。殊に其鑛場より送り來る原油は皆此地工場に於て精製せらる。其他石油業を目的とする會社は資本百萬圓の大成石油會社をはじめ、其數七ヶの多きに上れり。又毎年五月には馬匹市場を開き、東西より集まり來る馬匹は千頭に及ぶといふ。金融機關には柏崎銀行あり。

其他新津町は石油業の盛なる所、小千谷町十日村松町五泉町は何れも機

兩津町

業地にして、共に其產出物貨の取引市場をなす。

相川町  
小木町

佐渡の兩津町は其港灣を夷港と云ひ、北海稀に見るの良港にして、背後の山はよく北西風を遮り、海面亦廣くして、一千噸以上の船舶數十隻を入るゝに足る。故に冬季風浪の爲に新潟港に寄港し得ざる汽船は、本港に入りて同地に輸入すべき物貨を陸上げるなり。されば本港は新潟港の一部とも見做し得べきものにして、特に冬期に於ては船舶の出入物貨の集散多しとす。越佐汽船會社の汽船は日々新潟港との間を往復して、兩港の連絡を取る。其他相川町は産金地として、小木町は越後に對する商港として、共に佐渡の商業都會たり。

(ロ) 商業機關

商業會議所

商業會議所 北陸四縣に於ける商業會議所の總數は、六箇にして、西方の二縣福井石川に於ては各一個を有するのみなれども、東方の二縣富山新潟に於ては各二個を有せり。今其所在地及び會員數を示せば左の如し。



商業會議所 (明治三十六年)

(第二十三統計年階による)

地方	會議所所在地	設立地	定員	設立地所有株式	全縣所有株式
福井	福井市	福井市	三〇	七九	一〇六
富山	富山市	富山市	三〇	一五五	四〇五
高岡	高岡市	高岡市	三〇	三三三	一八三
石川	金澤市	金澤市	三〇	八八五	五八〇
新潟	新潟市	新潟市	三〇	四〇〇	三三四
直江津	直江津町	直江津町	三五	一六九	一五三

取引所 北陸四縣に於ける取引所の總數は十箇にして、之を他の地方に比すれば決して遜色なきのみならず、新潟縣のみても六箇の多きに上れり。これ主として米穀の産多きによるものにして、全國中其右に出づるものなく、東京府及大阪府と雖も、其總數より見れば、本縣に及ばざるなり。左に明治三十五年現在の者を掲ぐ。

(第二十三統計年階による)

名	稱	株式人員	仲買人員	資本金	拂込資本金
三國米鹽		八	九	101,250円	101,250円
金澤	米穀株式	三五	一八	100,000円	100,000円

會社事業

(ハ) 會社事業

高岡米穀	新潟米穀	直江津米穀	長岡米穀	富山米穀肥料	柏崎米穀	三條米穀	新發田米穀
株式	株式	株式	株式	株式	株式	株式	株式
一三三	七六	一六六	三五九	二八五	二九三	一七二	一四〇
一〇	二五	九	一三	四	六	八	二
100,000	100,000	103,000	100,000	111,200	100,000	110,250	100,000
100,000	100,000	100,000	100,000	111,200	100,000	110,250	100,000

北陸地方の會社數及其資本金額は、他の地方に比して甚しき遜色を見ず。殊に新潟縣は工業會社の資本金總額に於て、三府を除けば、愛知兵庫の二縣に次ぎて、全國中第三位に居る。これ近時石油業の勃興に連れ、此地の石油業に投入する資本金額の増加せしに起因するなり。故に新潟縣に於ては、柏崎町に於ける日本石油會社、長岡町に於ける帝國石油會社の如き、大會社を有し、前者は資本金二百四拾萬圓、後者は貳百參拾萬圓に及ぶ。又長岡町の北越鐵道會社は資本金參百七拾萬圓にして、本地方最大の會社なり。又本地方に於ては一時會社熱の爲に、薄弱なる小會社の興れるもの少から



ざりしが、輓近に至り、此等の小會社は次第に合同し、或は解散倒滅して、逐次基礎の強固なる大會社をなさんとするの傾向あるは頗る喜ぶべき現象なりとす。今左に明治三十五年末日の統計によりて、會社事業の梗概を示すべし。

(第二十三統計年鑑による)

地方	農 業		工 業		商 業		水 陸 運 輸		合 計	
	社數	拂込資本金	社數	拂込資本金	社數	拂込資本金	社數	拂込資本金	社數	拂込資本金
福 井	二	三三〇〇	二六	三六六,三〇〇	六五	三八六,四三五	九	一三,四五〇	一〇三	四三九,四五五
石 川	五	三三,三〇〇	五九	七九五,七七	一四三	三六四,七七	二四	一〇,〇三〇	二三二	五四五,七八八
富 山	三	六〇,七〇〇	四六	五六三,四九三	一四四	七九〇,三三七	一七	一六四,四九	一九〇	八五七,八六一
新 潟	七	二八五,〇〇	九	七〇五,〇四三	一九三	一三,九六,八三五	三二	四,二四,六六〇	三三九	二五三,五五〇,四七

金融機關

(二) 金融機關

商業銀行 北陸地方に於ては、商業の活潑となるに従ひ、金融機關も、次

第に完備するに至れり。されば各縣都邑の地には該業の設あらざるの地なく、殊に福井市の如きは絹織物の取引盛にして金錢の出入繁劇なるにも拘らず大銀行を有せざるを以て、大阪の百三十銀行富山の十二銀行は此地に支店を置きて、金融の均一を計るに至れり。本地方銀行の大なるものは多く、富山新潟の二縣にありて、資本金二百拾萬圓の第六十九銀行は、本地方銀行界の巨擘にして本店を長岡町に置く。今左に商業銀行數及資本高等を掲ぐべし。

(明治三十六年日)

(第二十三統計年鑑による)

地方	本店		支店		積立金	純益金	配當金	地方		積立金	純益金	配當金
	社數	資本金	社數	資本金				社數	資本金			
福井	三	三,〇〇〇,〇〇〇	一六	二,〇〇〇,〇〇〇	三,七〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	石川	四	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
富山	三	三,〇〇〇,〇〇〇	一六	二,〇〇〇,〇〇〇	三,七〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一〇〇,〇〇〇	新潟	三	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇

農工銀行 明治三十六年の調査によりて、北陸四縣の各農工銀行の成績を左に示す。

(第二十三統計年鑑による)



銀行名	資本金	積立金	配當金	銀行名	資本金	積立金	配當金
福井	500,000	42,000	3,273	石川	500,000	35,100	30,000
富山	200,000	26,000	3,140	新潟	1,000,000	42,500	61,500

農工銀行の貸付金は、農業に於ては、多く開墾排水殖林及肥料購入の爲に使用せられ、工業に於ては、主として原料の購入機械の新調及其改良の爲に用ゐらる。

貯蓄銀行 明治三十六年の統計により、北陸四縣内の貯蓄銀行の數及資本金を示せば左の如し。

(\*)は普通銀行の兼業)

(第二十三統計年鑑による)

地方本店	支店	拂込資本高	地方本店	支店	拂込資本高
福井 *	二二六	一五,000	石川 *	三	八五,000
富山 *	四二二	六七,500	新潟 *	一八	一五,100
		一五七,500			一四,000

### 第三編 地方誌

#### 福井縣

福井縣

面積人口

福井縣は北陸地方の西南部に位し、東南は岐阜縣に接し、東北は石川縣に境し、西南は京都府の一部及び滋賀縣に連り、西北の一面は日本海に臨めり。縣廳は福井市に置かれ、若狹越前の二國を管す。則ち越前に在つては福井市及び足羽吉田阪井大野今立丹生南條敦賀の一市八郡、若狹の國に在つては、三方遠敷大飯の三郡之なり。其の面積二百七十二方里(三九六四方料)、人口六十三萬二千二百七十一方里二四六〇一方料(一五九人)を有す。各郡中面積の最も大なるは大野郡にして、廣袤實に六十八方里に亘り、阪井遠敷兩郡を合するも、尙未だ遠く之れに及ばず、之に亞ぐは南條郡にして三十三方里を有し、最も小なるを吉田大飯の二郡とし、孰れも八方里に過ぎず。若し夫れ人口疎密の上より云はんか、其の最も密なる地方は足羽吉田阪井の諸郡にして、何



地勢

れも一方里大約四千乃至五千を有すれども、大野郡の如きは一方里大約僅かに一千五百を超えず。

地形は西南より東北方に向つて擴がり、其の最も廣き部分に在つては、東西凡そ十七里、南北また之れに伯仲せり。越前の東部より南部に亘りては山岳概ね峻秀なるも、國の中部より西南に亘りては平野の横はるあり。若狹國に至りては、山岳の近く海岸に向つて迫り來れるも、猶小濱港附近には小平野の横はるものあり。されば縣下を通じては、概して山岳重疊の地方多く、平地は割合に少しと雖も、地味は肥沃にして農業割合に發達し、海岸地方の漁業の如きも亦比較的振興せり。即ち北陸街道の通ずる一帯の地は、此の沃野に屬するものにして田園大に開け、就中九頭龍川流域の如きは、縣下に於る人文の最も發達せる所にして、福井市は實に是が中心たり。縣の東北部に位する大野郡は九頭龍川の流域に於て、多少の平野の開けるを見、其の中に大野・勝山の二小邑を有し、兩地共生系及び煙草の製出頗る多く、從て本郡の製糸事業は、縣下第一に位し、其の産額優に内國の需用を充たすのみならず、

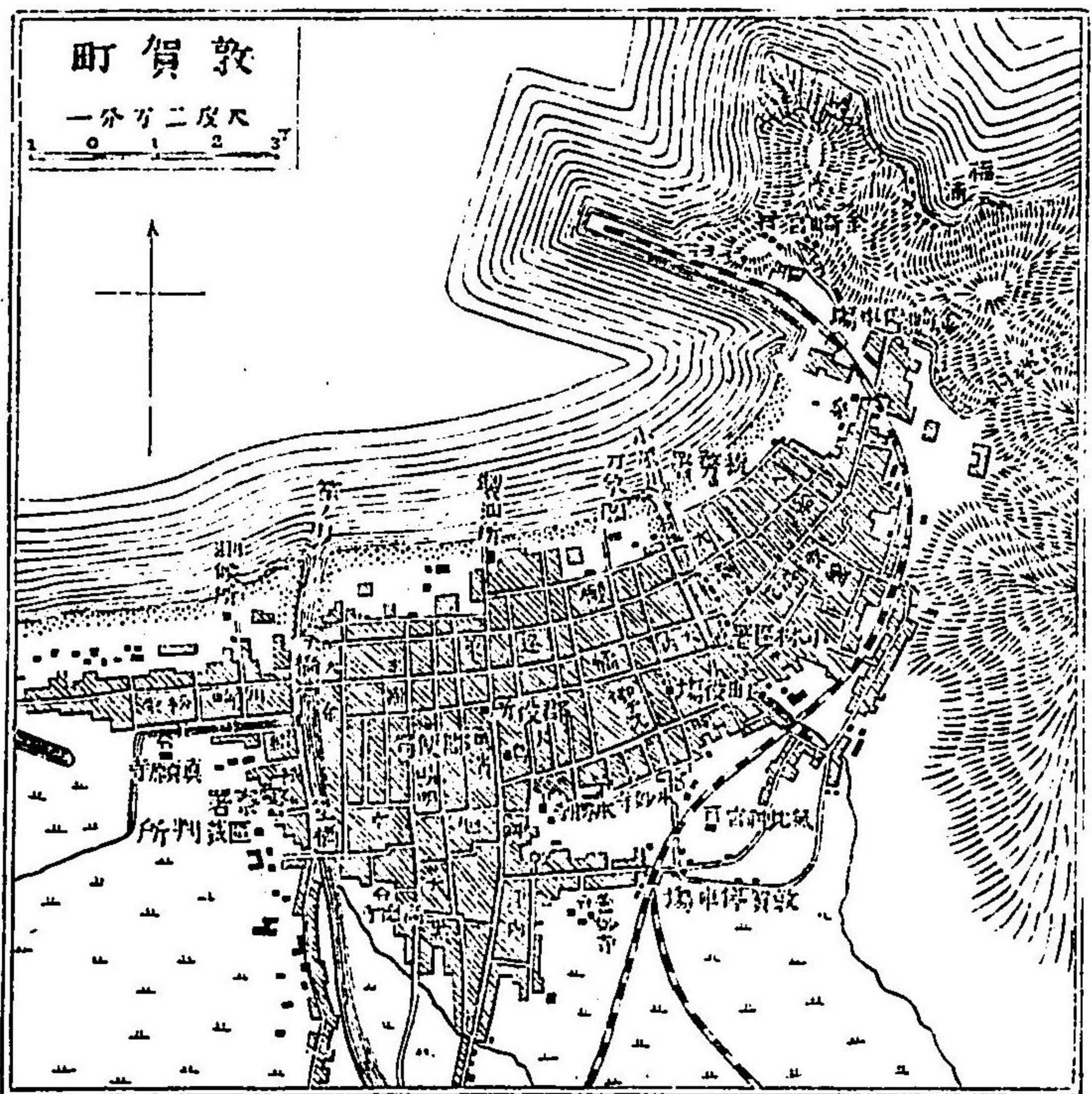
遠く之れを海外諸國に輸出しつゝあり。此の他縣下の鑛山よりは、多少の銀銅を産出す。

縣の海岸線は又其の西南部に於いて著しく屈曲し、敦賀小濱の如き良港あり。敦賀港より以北九頭龍川口附近に至る迄は、斷崖絶壁相連り、其の間亦大船巨舶を入るゝの港灣に乏しく、越前北部に於て僅かに阪井港を有するに過ぎず。而して陸路交通としては官設北陸鐵道の米原驛より來りて敦賀に入り、武生・福井を過ぎ、石川縣に入るものあり。此の一線は北陸街道と共に、縣の中央を縦貫せるものにして、縣下に於て最も主要なる交通路をなす。

今、縣の西南にありて海陸の咽喉をなせる一都會敦賀より筆を起して次第に本縣の各地方を觀察せん。

敦賀町は越前國敦賀郡の中央にありて、日本海の深く鑿入せる敦賀灣の南岸に位して、其畫圖に似たる市街を開けり。西には榮螺ヶ岳の山脈蜿蜒として連亘し、東には木ノ芽峠を其山中に有する野阪山脈の横はるあり、地形優勝、風景絶佳なり。この地は本邦歴史上、最も古き沿革を有し、崇神天皇の





世、任那國王子角鹿の遠く海洋を渡りて此地に來り歸化せしことあり、蓋し此地は日本海岸樞要の地區に衝り、任那・高麗・百濟等の諸外國へ對する交通に至便なりしに由れるなるべし。かくて其後天平時代に至るまで、外國交通の門戶として此地の繁榮せしことは、史の明記するところなり。鎌倉時代に至りては、

港運稍衰退せしも、北條氏執權の時、蝦夷を征する舟師は皆此港より往來せしを以て、再び其繁華を恢復せり。次て建武の擾亂となり、延元には恒良尊良兩皇子の悲劇ありて、金崎城陥落の記事は史を讀む者の皆な悲憤慷慨する所なり。其後港運日に衰微に赴き、徳川時代に及びても更に昔時の隆盛に恢復する能はざりき。而して寛永以後は酒井讃岐守世々此地の城主たりき。維新以後、明治四年敦賀縣を此地に置き、後これを廢して滋賀縣に屬せしが、十四年、福井縣の設けらるに及びこれに屬せり。(沿革参照)東西十六町、南北八町、街衢は長く海岸に沿うて發達し、戸數三千百、人口一万六千餘を有せり。北陸鐵道に乗じて此地に入れば、停車場は町の東南端にありて西すれば町の繁華區大島蓬萊に至るべし。停車場の東北、鐵道線路を隔て、官幣大社氣比神宮(第三十一圖甲)ありて其の大なる華表の巍然として聳ゆるを見るべく其建築の法奇古を以て重ぜらる。此神宮は北陸地方屈指の古祠にして、仲哀天皇の崇敬斜ならざりしは夙に史の傳ふる所にして降て明治二十八年官幣大社に列し、宮號を宣下せらる。大華表を入り小石橋を渡り、右折すれば繪馬殿遙拜

氣比神宮



所あり。左折すれば拜殿中門あり、其の左右と瑞籬を繞らせり。これを入れ  
ば本宮あり。結構壯嚴なり。停車場より西すれば神樂津内に至り、これより  
右折して、大島富貴に至る。敦賀郡役所は其附近にあり。今橋より東西に通  
ずる一路は最も繁華なる街衢にして、巨賈老舗摺をつらね、人烟頗る稠密な  
り。

敦賀港

港(第三十圖乙)は金崎古城址のある丘陵の絶角と、松原神社のある松原公園と  
を以て之を包み、二箇の埠頭は長く海中に突出し、北陸鐵道の貨物線此處に  
延長し來り、港面には、帆檣林立、汽船の碇泊せるもの亦少なからず。貨物  
集散旅客の往來頻繁を極む。此港よりする主なる航路は、日本郵船會社西廻  
航路大阪商船會社の日本海航路、及び丹州汽船會社の航路等にして後者は毎  
日二回此港を抜錨して、若狭の小濱を経て丹後の舞鶴宮津に至るものなり。  
猶其他此近海に航業を營むもの多く、海岸及び其附近には漕運會社漕運店等  
櫛比し、中越汽船會社尼ヶ崎汽船株式會社亦其中にあり。倉庫亦甚だ多く、  
敦賀倉庫株式會社共立倉庫株式會社は其の最も大なるものなり。

金崎の宮

町の東北端なる丘陵の上に、金崎宮(第十七圖甲)あり。此れ即ち當年悲劇の遺  
蹟なる金崎城址にして、山に倚り海に枕み、瀟洒なる神殿は波光美はしき敦  
賀灣に面して立てり。延元元年南朝の皇太子恒良親王皇子尊良親王の新田義  
顯と共に悲惨なる最後を遂げたるの地、賽客をして懐古の涙を禁ぜざらしむ  
るものあり。宮は兩親王を祀り今官幣中社に列せらる。本殿の傍に金崎古城  
址の石碑あり、備さに當年の事蹟を記せり。宮の背後に眺望所あり、眼下に  
敦賀灣の風光を望みて一幅の活畫圖を展ぶるが如し。此の附近に金前寺、永  
嚴寺の巨刹あり。又天筒山に古城址あり。町の繁華なる街路を東より西に横  
斷し、今橋を渡りて猶西すれば、人家の稍盡きたる處に、松林碧を拖き、海  
光日に映じ、中に松原神社の一祠あり。これ近世史上に著名なる水戸藩の名  
士武田耕雲齋藤田小四郎等が事就らずして、死を賜ひしところ、其の神社  
は實にそれ等諸名士の靈を祀れるなり。傍に一碑なり、詳しく當時のことを  
録せり。今、此松原を公園と爲せり。

松原神社

敦賀町より一葦海を航すれば、敦賀灣の西北端、立石岬の海岸に、常宮神



社(第十一圖甲)あり。大寶三年の創建にかゝり今は縣社に列す。此地山に凭り海に枕み、風景絶佳にして、舟を艤して來り遊ぶもの多し。境内には老樹鬱蒼として自から幽邃の致を極む。洞内は一古鐘を藏す、稱して豊太閤征韓役の分捕品と云ふ。

若狹街道

若狹地方に赴くには、敦賀市街より西南に向へる若狹街道に山らざるべからず。敦賀町を西南に距ること一里にして、金杉の一邑あり。地に歩兵第八旅團及び第十九聯隊兵營あり。それより一里半にして、越前若狹兩國の境なる榮螺岳山脈の間にある一小嶺の上に達す。路は漸次南より西に轉じ、佐田坂尻を経て、佐柿村に至る。蕭然たる一小邑たり。これより路は海岸丘陵の間を過ぎて、漸く南向し、遂に三方郡の名邑三方驛に到る。驛は遙か三方湖に臨み、茅茨瓦甍相交り、蕭然たる一驛次たるに過ぎず。地に、三方郡役所あり。此の附近にある三方水月久々子自向の四湖は、此の地方に於ける地形錯雜せる古生層の陥落或は削磨によりて成りたるもの、四湖巧に相連綴し、其肢節の複雑なる、本邦湖水中、稀に見るところなり。(地形海岸の部參照)殊に三

三方四湖

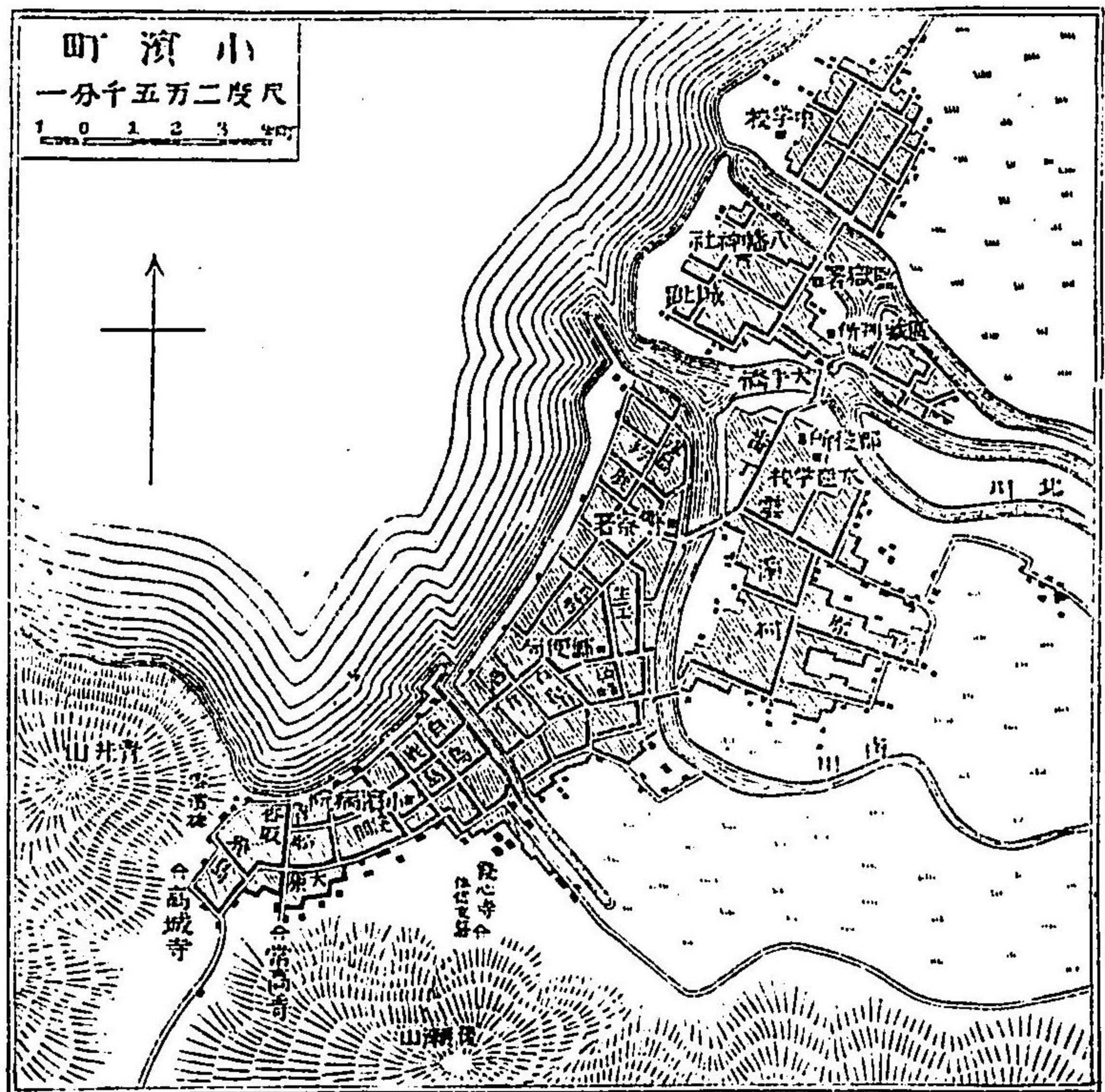
方水月の兩湖は其風景佳絶にして、來り遊ぶもの多し。又久々子湖北端の沙濱に早瀬の小邑あり。

三方より若狹の富を集めたる北川の河成平原に到る間は、多くは丘陵にして、東に三十三間山の山脈長く連り、其一支は遠敷三方兩郡の境を爲して、東南より西北に走り、若狹街道は其回處を横りて、北川の平地に出づ。此間に安賀里の一邑あり。

北川は源を近江より來り保阪峠附近を發し、西流すること六里餘にして小濱灣に注ぐ。近江國今津町より若狹國に入るの一路は此川の岸に沿ひて、人口二千を有せる熊川村を過ぎ、大徳寺神谷を經、日笠に到りて、東南より來れる敦賀街道と相合し、直ちに西を指しつゝ、此國の中心を成せる狹長なる平地を横斷して、小濱灣頭の一市邑小濱町に到る。此間、遠敷村に若狹彦若狹姫神社(第三十一圖乙)あり。この兩社は往昔に於ける若狹國の一の宮にして、一に遠敷上下宮と稱す。街道に面せるは下宮なる若狹姫神社にして豊玉姫を祀り、其華表、其祠宇、共に街道より髣髴することを得べし。上宮若狹彦神

若狹彦神社





社は其處より半里餘を南に距てたる龍前村にあり。彦久火出見尊を祭り、殿堂壯麗、境内瀟洒たり。今、共に國幣中社たり。又、其附近に新宮寺の巨刹あり。遠敷より一里、南より流る、南川を渡れば、小濱灣の時波眼前に開けて、其灣頭に小濱町の粉壁瓦甍を見る。

小濱町

小濱町(第三十圖乙)は若狭國中第一の都會にして、東北より西南に長く、南北に狭く、西南には後瀬山の翠微を帯び、東は雲濱西津の兩名邑を控へて、北に小濱灣を隔て、久須夜ヶ嶽の連峯を見る。戸數三千、人口八千九百余を有し、市街端正、人屋櫛比す。殊に小濱灣の風光頗る明媚に、山海の美容易に他に見るべからざるものあり。最も繁華なるところは、玉前生玉等の街衢にして、巨商老舗多し。町と其の附近に遠敷郡役所區裁判所小濱病院水産學校等あり。酒井氏の古城址は南北兩川の合湊する地點の北岸によりて、其處に八幡神社あり。殘濠の地既に空しと雖も、海に面して天主閣の残れるあり。登臨すれば小濱灣の時波と市街の瓦甍を一眸の中に收むべし。小濱灣は松ヶ崎裾岬の兩岬東西より突出して海門を作りたるを以て、風濤奔騰の日といへども、港内は平靜にして、よく北海航行の避難所たるを得。従つて船舶の來往頻繁なり。されど陸上の交通未だ完からず、當然敷設せらるべき鐵道未だ開通を見ざるが爲め、昔日の繁華は越前の敦賀港、丹後の舞鶴宮津港に奪はれて、多く發達を爲さざるは、この市邑の爲めに憾むべきこととすべし。後



小濱名産

潮山の北麓、發心寺に國學者伴信友の墓あり。又町の西端青井山の麓に維新の志士梅田雲濱の碑あり。青井山は高さ百二三十米、絶頂に眺望臺あり。風光頗る佳なり。此地の名産に若狹塗と稱する漆器あり。(工業の部參照)石材また著名なり。海産物には、鯛、鰈、烏賊等最も多く、又いさゞ(鮎)と稱する小魚あり。晩春の候北川南川の河口に多く群集す。

大門小門

小濱港の前面に、久須夜ヶ嶽あり。其外壁大洋に面するの地は、峻岩聳立、島嶼起伏、怒濤これに激し、頗る奇觀を呈す。里人これを外き面と稱す。この中に大門小門の勝あり。一岩海中に聳立し、其面に大門小門(第十圖甲)の二門を開き、小舟は帆を立て、これを過ぐるを得べし。門内には奇岩錯落、飛瀑これに濺ぎ、眞に多く見るべからざるの奇景なり。唯、此海岸陸より到るの路なく、海も亦外洋にして波濤險悪なるが爲め、晴日穩波の時にあらざれば難して以て此に到る能はず、これ世に其名の聞えざる所以なり。且此海岸には奇景多く、唐船島、白墨、雪吹瀑の勝あり。(第十圖乙)

小濱町より西すれば、道路は忽ちにして二に岐れ、一は南川の流域に添う

高濱村

て、丹波北桑田郡に至り、一は海岸を縫ひて丹後に入る。南川の流域には發達せる名邑も多く、記するに足るべき古蹟もなし。丹後路の海岸は概して小濱灣に臨み、或は陡崖或は沙濱の間を過ぎて本郷村に至り、大島の龍大なる姿を仰ぎつゝ湖水の如き入江に沿ひ、和田村を過ぎて、高濱村に至る。高濱村は人口四千餘を有する一邑にして、地に、大飯郡役所あり。

これより二里餘にして丹後の國境に到る。

かくて再び敦賀町に戻り、北陸鐵道線路に添ひて北に向はんに、汽車の線路は木ノ芽峠の山脈に、數箇の隧道を穿ちて、嶽々として次第に北に向ふ。此の隧道の絶間々々には、風光描くが如き敦賀灣を展開し、榮螺ヶ岳半島は近くして呼べば響へんと欲し、眼界の清新なるを覺えしむ。この隧道の中間にある一驛を杉津杉津といふ。停車場は絶壁の半腹にありて、眺望頗る佳なり。蓋し北陸鐵道沿線中、最も風景に富みたるの地なるべきか。

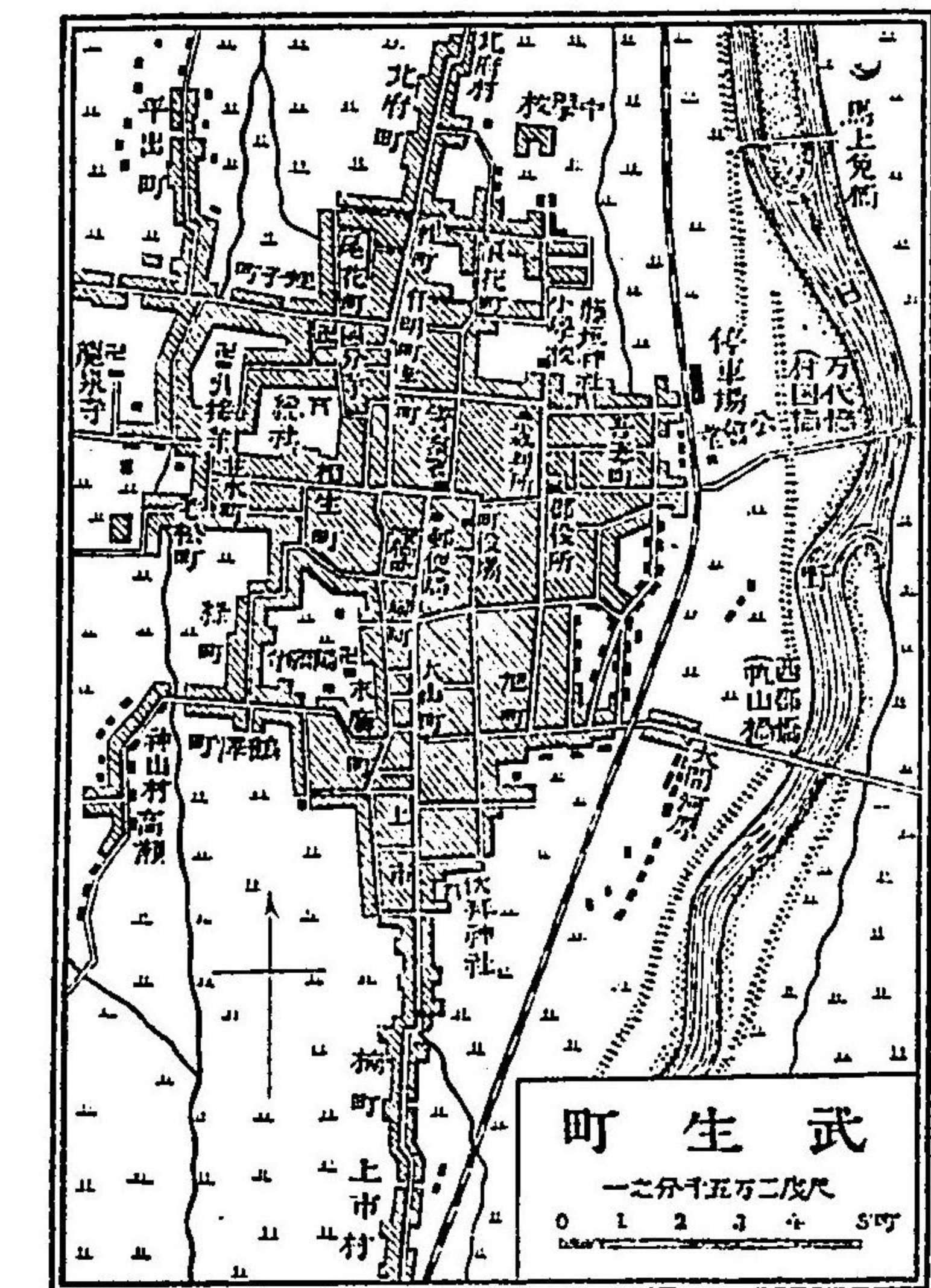
元比田の隧道を出づれば、鐵道は稍東に迂廻し、大桐新道の二小邑を過ぎ、今庄驛に入れり。此の驛は有名の古驛にして、北陸街道の衝に當り、東

杉津

今庄



方三町の山上に燧ヶ城址あり、木曾義仲が平氏の軍を拒ぎたる所なりと云ふ。日野川の急流山麓を繞り、夏時の鶉飼を以て著はる。土地の産物としては木



材葛粉葛素麵等にして、粕漬も亦名産として世に知らる。今庄の北、湯尾を過ぎて更に北すれば鱒波の小驛あり、東北一里餘にして日野山に到る。俗に越前富士と稱し、山上日野神社あり、春秋の祭典には登山者多しと云ふ。附近の杣山城址は、瓜生判官保が延元の亂に、其の弟等と、脇屋義治を擁して、此の城に據り、義貞の爲に聲援せる所と稱す。地に芋平妙泰寺等名勝古

武生町

刹あり、又此地方には瓦炭等の産あり。

武生町は昔の國府にして、越前國司が政を爲せるの地なり。故に舊府中と稱せり。豊臣氏の時前田利家此の地に居城し、徳川氏の時に至りては本多氏二萬石居城の地たり。維新後今の武生に改め町制を布く、人口一万六千四百を有し、鐵道は町の東端に沿へり。南條郡役所、武生區裁判所稅務署武生中學校、武生病院等の設けあり。町の最も殷賑なるは橋町櫻町にして、幸町・菜町・吾妻町旭町等これに亞ぐ。總社大神は宇幸町に在る縣社にして、大己貴命を祀り、天平十一年聖武天皇の勅祭し給へる古社なりと云ふ。曙町に於ける國分寺は、聖武天皇行基僧正に勅して、一國一宇の國分寺を建立せしめられし者の一にして、天平十一年の草創に係り、爾來世々の天皇及び國司城主の信仰厚かりしも、天正年間柴田氏の兵燹に罹り、嘉永年中再び焼失して、堂宇舊記の類盡く灰燼に歸し、今僅かに本堂庫裡の二字を存するに過ぎず。日野川の東岸に沿へる村國山は由來風光明媚の勝地として知らる。刈鎌蚊帳墨流染紙等は此の地の物産にして、製糸の産額も近來稍注目するに足るべきもの



鯖江町

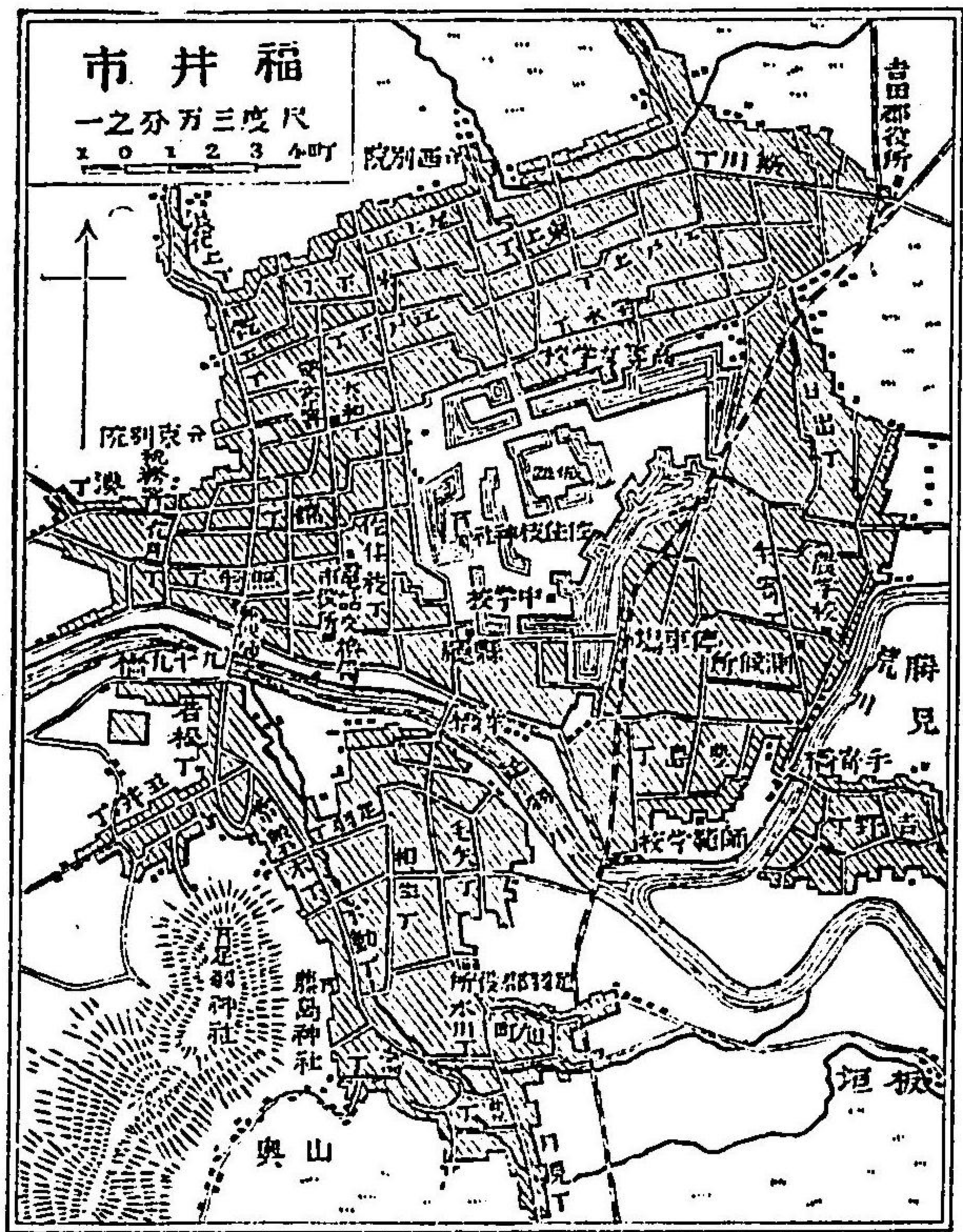
あり。

武生町の北に鯖江町あり、昔は間部氏の城下にして、北陸道の衝に當り、今立郡の西北隅にあり、東西四町、南北九町、人口四千二百餘を有し、今立郡役所歩兵第三十六聯隊兵營北陸絹糸株式會社等あり。武生町を距る事僅かに一里十七町、般賑の度未だ多く武生町に及ばず。町内舟津神社は、成務天皇の四年、越の國造市入命が詔命を奉じ、北陸道將軍大彥命を祀れる舊社なり、今は縣社に列す。長泉寺常照寺共に此の地の巨刹にして、賽者常に絶えず。町の東南一里餘の味真野村には、また味真野宮址あり、之れを男大迹皇子潜龍の舊址と爲す。此の他同村の毫攝寺大蟲村の大蟲神社、池田村の須波阿須疑神社等枚舉に遑あらず。蚊帳網代笠雲丹羽二重等皆此の地の名産なるが、殊に岡本村より産する五箇の紙の如きは、其の名世に高し。

福井市

これより以北大土呂の小驛を過ぎて、縣の首都福井市に入る。市は北陸道中金澤市に亞ぐの都會にして、縣の北部に位し、越前に於ける一大盆地の地方的中心を爲せるが故に、維新後屢、祝融の災に罹りたるも益々健全よる發達

をなすに至れり。東西二十四町南北二十二町、人口四萬九千八百餘を有す。



も比較的整然たり。足羽川に架せる九十九幸の二橋あるを以て、市内自か



ら橋南橋北の稱あり。九十九橋は日本三奇橋の一と稱せられ、市の西南端にあり、長さ八十七間幅三間二尺、半ば石造、半ば木造にして、頗る奇工を極む。城址は市の中央を占め、元と柴田勝家の據る所にして、後慶長六年結城秀康此城を領し、後松平氏を稱し世襲して王政維新に至りぬ。福井區裁判所福井縣廳(第十九號甲)縣會議事堂等は皆此外濠の東南に中學校高等女學校は城内にあり。市街の最も繁華なるは、大和上町大和下町照手上町九十九町南通りとし、百貨一として備はらざるはなく、佐久良下町佐久良中町佐佳枝上町佐佳枝中町日ノ出上町日ノ出中町等には諸種の株式會社多く存す。之等は福井物貨運送會社北陸運送保險株式會社此の他二三の銀行を除きては、概ね絹糸會社にして、今其主なるものを擧ぐれば、佐久良下町に於ける北國絹糸株式會社、同中町に於ける日本絹糸株式會社、佐佳枝中町に於ける南越生糸株式會社、同上町に於ける東洋絹糸株式會社等の如し、以て如何に本市に於ける織物業の盛なるかを知るに足るべし。以上の外公共建物には、佐佳枝中町に福井稅務署福井商業會議所あり、豊島中町に福井縣師範學校あり、寶永町

に監獄署あり、市としての施設一も間然する所を見ず。羽二重は實に此の地の特産にして、他に雲丹油團藥種蟹籠詰(産業の條參照)等あり。福井蕎麥新井羊羹また此の地の名物と稱せらる。今市内及び近郊の名勝を探らんか、九十九橋を渡りて南すれば足羽山あり今公園となる。橋南宇石場及び清水に登路あり、石場の本道より躋れば石階重疊其左右に酒樓軒を連ね、更に進めば尖塔あり、内に藥師如來を安置す。右折して登れば足羽神社に達す。縣社にして男大迹皇子を祀り、相殿に生井神福井神阿須波神波比岐神を配祀す。山の最も高き處に男大迹皇子(繼體天皇)の石像并びに碑文を建つ、石像彫刻の技は聊か本國の爲めに瑕瑾たるを免れず。稍南に下れば招魂社あり、山上展望に富み、晩春の櫻花亦見るに足るべきものあり。別格官幣社藤島神社(第十七圖内)は新田義貞を祀る所にして、明治九年創建せられ、爾來市外の西藤島村に鎮座せるを、近年此處に移したりと云ふ。山麓足羽上町の善慶寺には勤王家中の雄傑橋本左内の墓あり、東方長崎村にはまた義田義貞の墓あり。運正寺永平寺また此の地の巨刹なるが、運正寺は淨土宗の名刹にして、市内綠町にあり、



慶長十二年福井藩主松平秀康卒去せしかば其の父徳川家康が特に滿譽大僧正に命じて創建せしめたる香華院なりと云ひ、永平寺は市の西南四里許の志比谷村に在る釋宗曹洞派の越本山にして、規模の宏壯遙かに運正寺を凌げり。寛元六年道元和尚が此地の領主波多野出雲守の歸依によりて造營せるものなりと云ひ、寺域六千二百八十坪、永平寺山の麓に位し、幽邃の淨地にして參詣者陸續として絶えず。市内の要所に永平寺路を指示せる目標の多く建設せらるゝを見ても如何に本刹が渴仰の中心なるかを知るに足るべし。此の他勝區の見るべきものには一乗山の一乗瀧新田義貞の討死せる燈明寺堰等枚舉に遑あらず。

鐵道を利用して尙北に向へば、森田の小驛を過ぎて丸岡驛に出づべし。此の驛初めは新庄と稱し、丸岡町を距る事、道程一里半の西に在り。丸岡町は舊有馬氏の城邑にして、北陸道の衝に當り、東西六町餘南北十一町餘、人口三千八百餘を有し、今は次第に衰頹して往時の餘を存するに過ぎざるも、商賈なほ軒を連ね、市街の繁盛も金津に譲らず。舊城趾は町の東隅に在りて一に

## 丸岡町

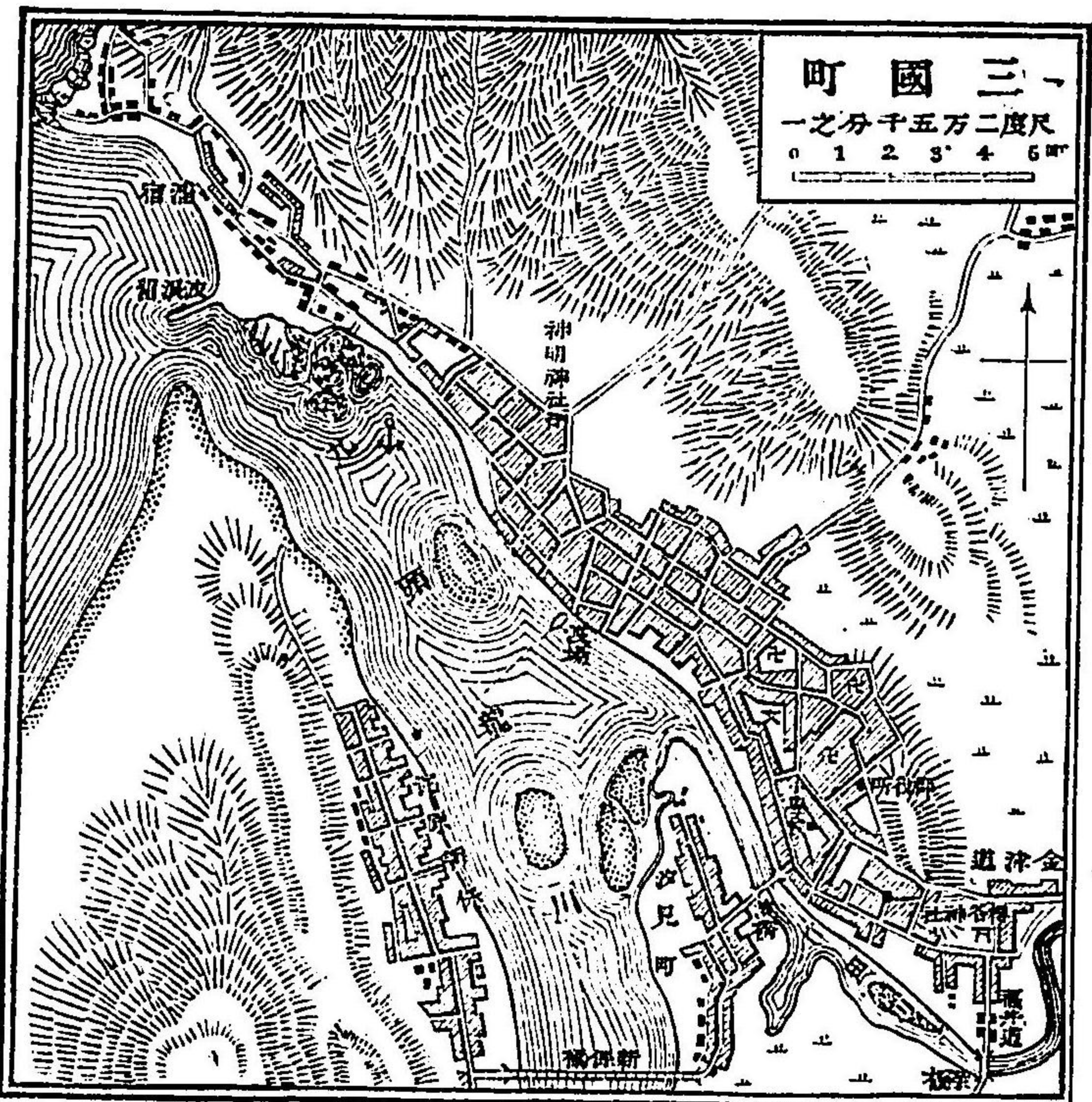
## 三國町

之を霞ヶ城と稱し、天主閣の如きものなほ儼然として屹立せり。縣社國神々社白道寺等此の地の名區として知られ、物産に竹田炭の名あり。

金津驛に於て鐵道と別れて西する事約一里餘、蘆原村に到れば蘆原温泉あり、鹽類泉にして、溫度は華氏の百四十二度を保ち、浴室は石を疊みて池底とし、四方は板壁を設け、泉質清澄皮膚病に効驗ありと云ふ。舟津鑛泉田中々鑛泉また此の附近にあり、これより更に西する事一里餘三國町に達す。

三國町は元阪井と稱し、九頭龍川河口の東岸に位し、東西七町南北十七町餘、人口一萬餘を有し、其の港を阪井港と稱す。地は北海より福井市に入るべき咽喉を扼し、同市まで優に水利の便あるが爲め、貨物の集散殊に忙はしく、市街も亦常に人馬の往來を絶たず。三國稅務所三國區裁判所等の設あり。大字瀧谷に瀧谷寺あり、新義眞言宗にして智積院に屬し、後圓融天皇永和三年の創建なりと云ふ。縣社三國神社は繼體天皇大山咋命を祭る所にして、一に之れを三國の宮と稱す。境内は一堆の小丘にして古木鬱茂し、西北に日本海を展望し、風景甚だ佳なり。河口を銚子口と云ふ。





銚子口を海岸に沿ひて北に繞れば安島崎あり。崎頭に雄島を控へ、一帯の斷崖海に臨む所、俗に東尋坊(第十二號甲)の稱あり。柱狀節理を呈せる輝石富士岩が海蝕作用を受けたる結果として高底參差神工鬼削の奇觀を呈す。これより以北の海岸は殆ど陡崖相連り北瀉に達す。

今再び福井市に歸り。勝山街道を勝山に向ひ大野郡を探らん、可ならんか。此の街道は福井市と大野郡勝山とに通ずる一大要路なるを以て、貨車の往復絶ゆる時なく、殊に煙草生糸を満載せる車の絡繹たる其産業の發達を卜するに足るべし。此間の道程約七里餘、道路極めて平坦、車馬の往來亦極めて自在なり。

勝山町

勝山町は九頭龍川の東岸に在る縣下東北部の小都會にして、東西九町南北十六町、人口七千三百餘を有し、初め堀尾直基の城下にして、後小笠原貞信の領地たり。今其の城趾を長山と云ひ、之れに登れば全市街を一眸の中に納め、且つ山上櫻楓の勝あり。此の地由來生糸及び煙草を産し、殊に其の製糸場の如きは、年々多額の生糸を海外に輸送しつゝあり、町内に葉煙草專賣所の設けあり。白山神社は町の東南一里、平泉寺村大字平泉寺村に在り、郷社にして伊弉册尊を祭る、境内櫻樹老杉枝を交へ、松尾芭蕉が「うらやまし浮世の北の山櫻」の碑あり。此の町より北方山道を辿りて、東三里谷峠を越ゆれば、石川縣能美郡に入るが故に、福井市より白山に登るもの、概ね此の地



大野町

を過ぐるを常とす。

勝山町を南に距る事約二里餘、大野町ありて。山間の一平野、大野盆地の中心をなす。大野郡役所區裁判所稅務署中學校等の設けあり。町は西に飯降山を負ひ、東方一里にして眞名川を擁し、三方は田圃遠く連りて、市街は平坦なり。東西六町餘、南北八町餘、人口九千三百餘を有し、元土井氏の領地にして、舊時は般賑勝山を凌ぎしが、明治二十一年火災の爲めに全町悉く灰燼となり、今大に舊觀を失ふにいたれり。附近の名勝に篠座神社辨ヶ瀧等あり町の東方七里五箇村にはまた打波鍬泉魚蹄鍬泉等あり、泉は經ヶ嶽の山腹より涌出し、火力を用ゐて澡浴に供す、土地僻遠にして、道路また峻嶮車馬を通ぜざれば來り浴するもの甚だ多からず。大野道は福井市より、安原市波大宮の小驛を過ぎて此の地に入り、更に東方下山上穴馬等の小邑を経て岐阜縣に入れり。

石川縣

### 石川縣

石川縣は本地方の中部に位し、東は富山に東南は岐阜縣に界し、西南は福井縣に隣り、其他は日本海に瀕す。殊に縣の北部能登國は其形狀宛然風折鳥帽子に髣髴たる半島を形成して全く日本海中に突出せり。従つて縣下の地形南北に長く、東西に狭く、東西は十里より十三里十町に至り、南北は延長四十餘里の遠きに及ぶ。面積は二百七十二方里を有し、人口七十六萬二千三百餘を收め、一方里の人口は二千七百九十餘に該當す。縣廳の所在地は、加賀國金澤市にして、行政區劃上、一市八郡を管す。一市は即ち金澤市にして、八郡は加賀國の江沼能美石川河北及び能登國の羽咋鹿島鳳至珠洲即ち是なり。郡中面積の最も大なるものは、能美郡にして五十九方里を有し、これに次くは鳳至郡の五十五方里、石川郡の三十六方里、最も小なるは河北珠洲の二郡にして、共に十八方里を占むるに過ぎず。人口の密度は河北郡最も大にして、一方里につき四千二百六十餘の多きを見る。これに次ぐは鹿島郡にして三千



地勢

二百六十餘、また、これに次ぐは石川郡にして三千二百三十餘の割合なり。其の他羽咋・江沼・珠洲等の諸郡は三千百餘人乃至二千四百餘人の割合にして、最も小なるは、能美・鳳至の千七百餘人なり。此に由りても、縣下の形勢の一般によく開けたるを見るべく、山村荒磯、王化に霑はざる地の少さを知るべし。

本縣下加賀國に屬する部分は、東南飛驒の境に當りて、白山の大嶽屹然として聳立し、連山之より北に延びて加賀と飛驒越中の境を縫ひて、妙法山・笈岳・奈良岳・大門山・大倉山等の諸高峯を起し、遂に礪波山に至つて、陵夷し、其の餘波は能登越中の國界を横走する寶達山脈に及べり。これを以て手取川・犀川等を始め河流は多くは西北流して、海岸一帯の平地に向つて走り、遂に日本海に注げり。海岸の平地は、其の幅二三里に過ぎず、其の間潟湖・沙丘等の横はれる所亦た少なきに係らず、縣下重要な區を占め、農業工業商業皆盛にして、北陸第一の都會なる金澤市と、大聖寺・小松・松任・津幡等の地方的中心をなせる小都會を始め大小の村落到る處に連り、北陸鐵道の幹線亦此の平野に

産業

交通

沿ふて走れり。又山間の間に入れば幾多の小鑛山は所々に散在し其の業の見るべきもの少なからず。能登國に至れば、全國の大部分は第三紀層の丘陵を以て蔽はれ、東部の海岸は曲折に富み、七尾の良灣を抱き、其の中に、能登島の大島あり。半島の西南を境せる寶達山脈の麓日本海岸の今濱羽咋の地方より七尾灣頭七尾町に至る一帯の地は、國中最も大なる沖積平野にして、従つて農産物甚だ多く、商業亦盛なり。殊に北陸鐵道より分岐し來れる七尾鐵道は此の平野を貫走して七尾灣に至り、同港よりは七尾灣沿岸地方は固より、近海遠洋に赴ける航路ありて、交通の便よく備はれり。

縣下の富源は農業を第一とし、工業これに次ぐ。而して工業の中、能美・江沼の製織業・九谷の陶器・鹿島郡の縮布・鳳至郡の輪島漆器・江沼郡の山中漆器・金澤市の金澤漆器等その重要なものなり。就中羽咋・二重・白絹の産は年々その額を加へ、海外に輸出するもの、亦尠少なからず。北陸地方に於ては、福井縣と並び稱せらるるに至れり。製糸工業は石川・能美・江沼の三郡を其の主産地と爲す。縣の地勢は前に述べたる如く、東部及び南部は山嶽連亘し、平地は海岸に



沿うて發達したるを以て、交通の主要路も悉く其の方面に集り、福井縣より來り、本縣下を横斷して、富山縣に入る北國街道は、絶えず日本海岸を距ること一里乃至二里の處を走り、而して北陸地方樞要なる交通を掌れる官設北陸鐵道は、常にこの街道と接觸を保ち、大聖寺・小松・松任等の小都會に、停車場を置けり。此の他の街道には所謂白山街道なるものありて、金澤附近の平野より鶴來町に會し、手取川に沿ひ、其上流に溯り、古來牛首の名を以て知られたる白山西麓の白峯村に出て、之より谷峠を越えて福井縣下勝山町に至るものを云ひ、白峯より更に東南に向へば、此國の白山に登るべく、之より東に下れば則ち飛驒の白川郷に出づる間道あり。又越前の坂井町を出て、加賀越前の國境なる吉崎を越え、鹽屋・安宅・湊・美川・金石・粟崎を経て加賀能登の國境高松に達するを、加賀沿海街道といふ。其の他、水島より美川港を経て小松町に達する湊廻街道、金澤市より金石町を経て、粟崎より内日角に達する宇野氣街道等あり。能登國に入れば、加賀の河北湖の東方津幡より岐れて、飯山高島を経て、七尾町に達する街道を主線とし、其の支線、即ち羽咋町より

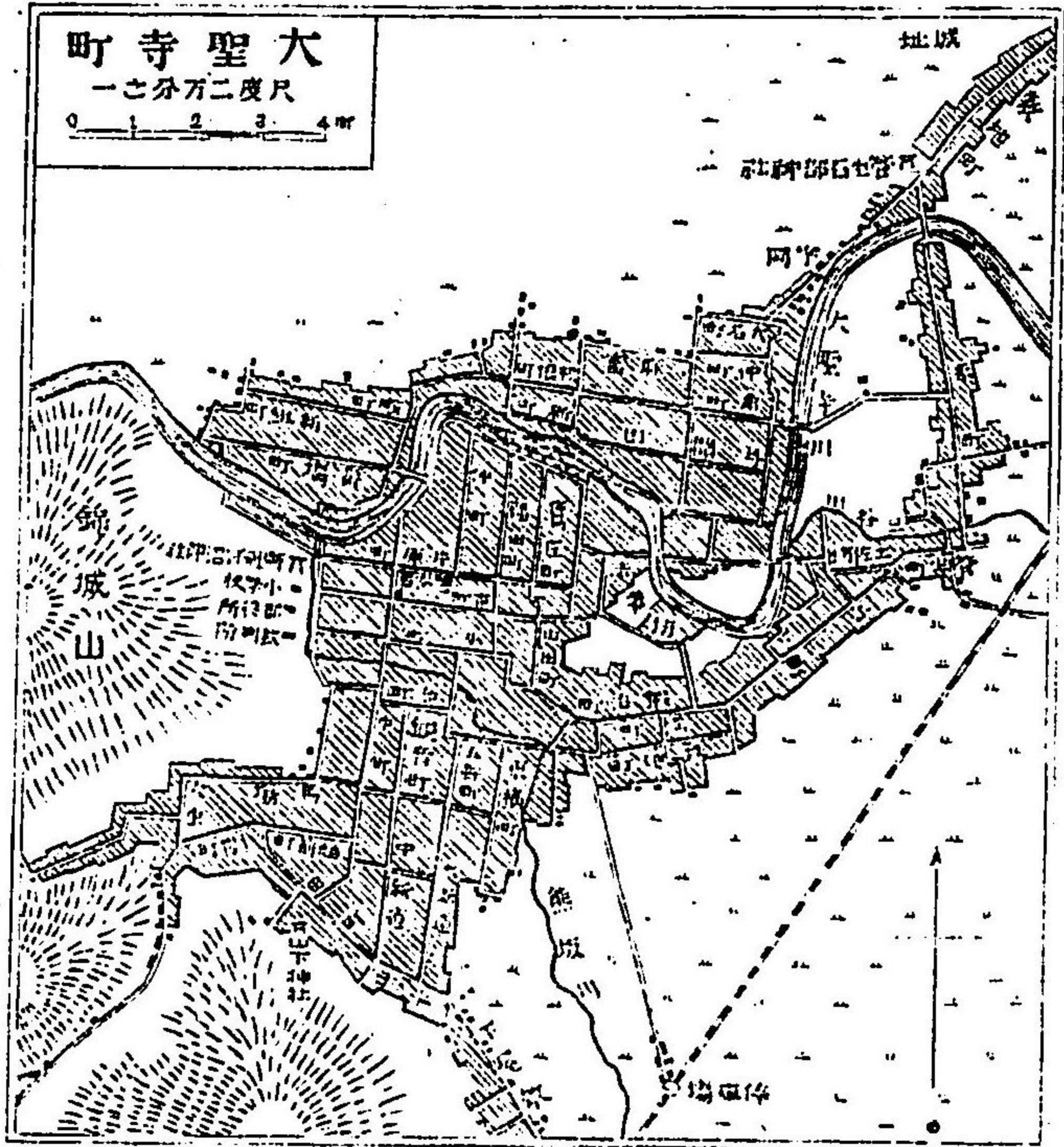
金丸、能登部を経て鹿島郡田鶴濱に至り、此の街道に添うては又七尾鐵道の走るありて、西南より東北に進み、良川に於て街道に分かれ、七尾に向へり。又内浦街道と稱するものは、七尾を發し七尾灣の岸に沿ひ、田鶴濱中島・穴水等を経て、更に進みて富山灣岸の鶴川・宇出津・飯田等の諸港を経て、珠洲岬の絶端寺家に達するの道路を言ひ、又外浦街道とは、前者に反して半島の西岸を辿るものを云ひ、即ち羽咋町より高濱・福浦門前を経て輪島町に達するものなり。また、七尾より穴水に至り、それより半島を横斷して輪島に達するものを、別に輪島街道と稱す。此の街道には、穴水・輪島間を往來する馬車あり。能登國の東海岸は小丘陵起伏し、道路多くは不良なるを以て、旅客は多く沿岸航行の小汽船に頼るを常とす。此航路は二つに岐れ、一は七尾より屏風崎瀬戸を経て和倉中島・穴水等所謂内浦の諸港に寄港し、宇出津港を以てその終點と爲し、一は七尾より能登島の東部小口海峽を出て、宇出津港に直航し、それより珠洲岬に至るの沿岸各港(小松・松波・飯田・正院)に寄港し、以て、蛸島をその終端港と爲し、而して、前者は七尾港より猶南に航し、富山縣伏木港岩



瀬港水橋港を経て、新潟縣の直江津に至る。されど、冬期は海上險惡にして、往々航行を中止することあり。また、加賀にありては日本海岸の犀川口に金澤の前港をなして、金石港あり。越前の三國港と共に、郵船の寄港地を爲すも、港灣不良にして風浪に耐へず、充分なる發達を爲す能はず。

吾人若し官設北陸鐵道の列車に搭し、福井石川兩縣の間に跨れる高洞山の隧道を過ぎ、石川縣に入らんか、幾くもなくして前に大聖寺町の瓦葺の開らくを見るべし。加賀國の南部、江沼郡中第一の都邑にして、市坊の數六十、東西十七町、南北七町餘、戸數三千餘、人口八千五百余を有し、地に江沼郡役所區裁判所中學校八十四銀行等あり。市街は廣濶ならずと雖も、市店櫛比して、商業常に繁盛を極めたり。往昔は拜郷山口兩氏互ひに之を領せしが、慶長年間前田利長加能越の三國を領するに及び、此の地を支封と爲し、利常の第三子利治を此の地に治し、以て明治維新に至る。其の城址は町の西端、錦城山にあり。其の麓に、江沼神社あり。郷社にして瀨祖前田利治を祀る。前に大聖寺川の清流を繞らし、樹木森々として境内清酒なり。町の南端に、前

大聖寺町



田利治の菩提所なる實相院あり。又、東端なる敷地村に、菅生石部神社あり。

古來敷地天神の名を以て有名なりしもの、今、國幣小社に列す。此の地の物産は絹織物陶器茶鉛筆等にして、織物は最も盛にして加賀絹の名世に高し。

此の江沼郡 温泉に富み、且名勝多し。山中温泉(第三十四圖甲)は、大聖寺川の上流、兩岸の山岳峭立して相迫る所にありて、大聖寺町より西南二里二

山中温泉



山代温泉

十町を隔つ。大聖寺停車場と相並ひて、山中馬車鐵道の起端驛あり。これに乗すれば、一時間餘にして達すべし。温泉は聖武天皇の朝、僧行基の發見せしところと稱せられ、鹽類泉に屬せり。旅館旗亭の相述るところ、中央に一大浴室を設け、浴客皆來り浴す。これより挽物細工、漆器等を鬻げる家の前を南に進めば、五町餘にして、蟋蟀橋の奇景を見る。岸高くして、斷崖これに連り、靜潭は紺碧の水を湛へ、岸上茶店の設あり。其の他、黒谷采石巖道明淵などの勝地あり。されど山水の規模甚だ小にして、未だ多く鑑賞に値ひせず。此の地より産する山中漆器は近來頗る其の産額を増加し、海外輸出を試むるものもまた尠なからず。木地堅牢、塗法精巧、優に縣下の一名産たるに足る。(工業叢書)山代温泉(第三十四圖)は大聖寺町の東方一里餘、山中温泉の西北一里十餘町の處にありて、後者よりすれば、其の馬車鐵道の河南驛より下車し半里にして達す。官線の動橋驛イナヅメよりするも、一里に過ぎず。丘陵平野の相交る處に湧出し、風光他の奇なしと雖も、旅亭の大なるもの多く、温泉場としての設備は能登の和倉温泉と共に北陸地方多く其の比を見ず。山中温泉

片山津温泉

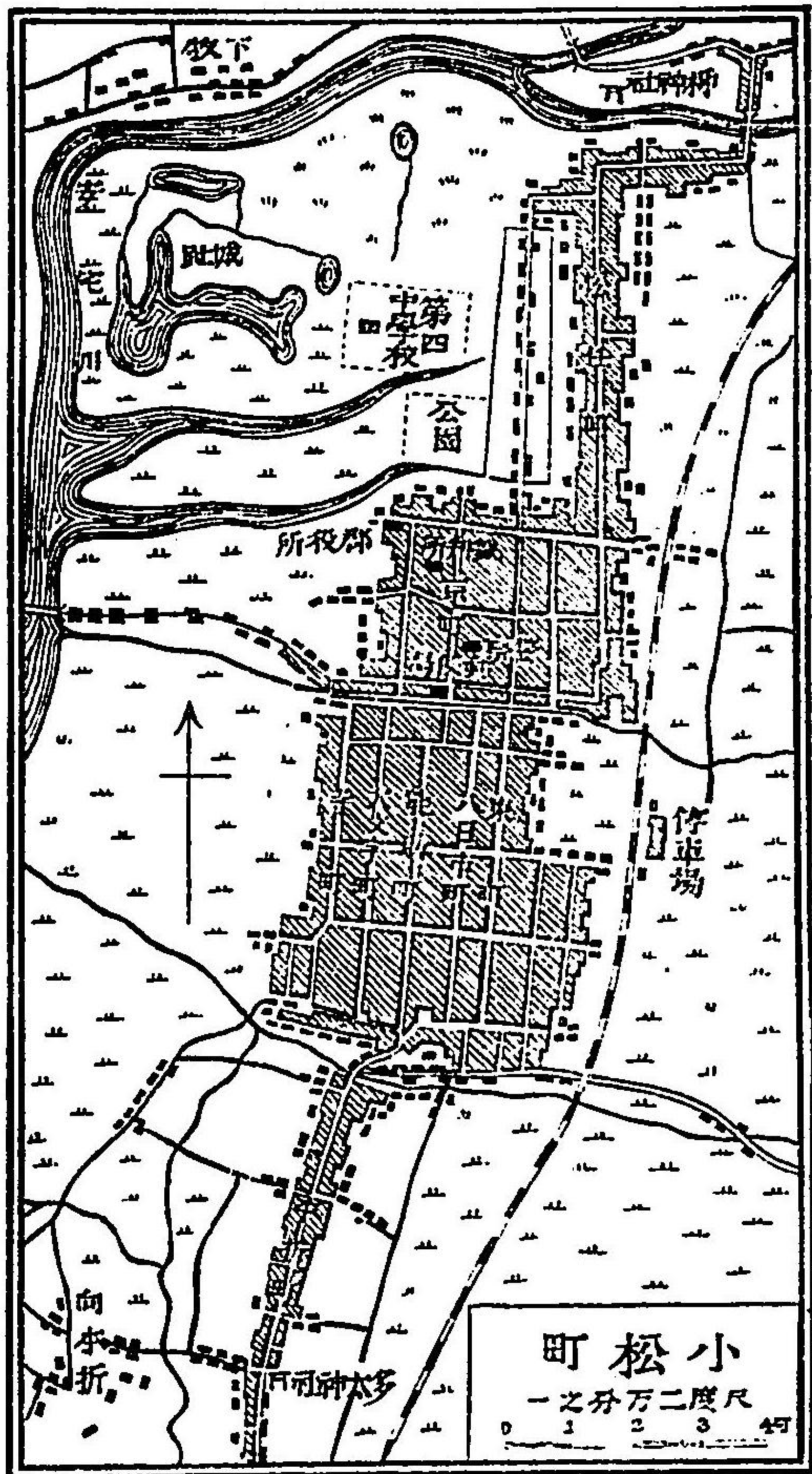
と同じく神龜年間僧行基の發見にかゝると稱し、泉質は鹽類泉なり。今は別に電氣浴槽の設あり。地に、藥王寺服部神社等あり。北陸地方有名なる陶器九谷焼は、今、此の地を主産地と爲し、山代陶器株式會社あり。(工業叢書)片山津温泉は北國街道の西岸、柴山潟の南端にありて、北陸線の動橋驛より一里餘を隔つるに過ぎず。文政三年の開場にして、鹽類泉に屬せり。浴室の規模、旅亭の構造、山中山代に比して、一籌を輸すと雖ども、地に山水の勝あり。以て優遊するに足る。柴山潟の西北、日本海に瀕するの邊は、松林一帯の青を拖き、橋立より安宅に達する海岸の通路は、この松籟颯々の中を過ぐ。この中に、篠原の一村あり。往昔平氏の軍俱利迦羅に破るゝや、源氏軍の追撃の急なるを拒かんとして、此處に一戦を試み、かの東國の武士齋藤實盛は其の鬚に涅して、潔き戦死を遂げたり。今、其墓は松原の中にあり。小かなる墓石は巨幹地を這ひたる老松と相對して、人をして當年憑弔の情に堪へざらしむ。傳へ言ふ、當時にありては北國街道は此の附近を走りて、今日の海は當時猶陸地たりし所なりしと云ふ。此の地より三里に過ぎたる安宅の古關址



那谷寺

の今全く海中に没したりと言ふより推せば、あながち臆測の説のみにもあらざるべし。柴山瀉の西岸を西より北にめぐりて北國街道に出づれば、今江村あり。小松町より粟津温泉の通路に當り、馬車の喇叭の音田舎離落の間に高く聞ゆ。村の南に三湖臺あり。往昔花山法皇も其の勝を愛てさせ給ひし處にして、北に今江瀉東に木場瀉西南に柴山瀉を望み、眺望頗る開豁なるに加へて、西南一帯日本海の怒濤の音の地を撼して來れる、座ろに去るに忍びざるものあり。那谷寺(第三十五圖甲)は北國中有名なる眞言の古刹にして、江沼郡にあり。此の地に至るには、動橋驛或は山代温泉よりするをよしとす。凝灰岩嵯峨たる山の半腹を穿ちて、中に觀音堂を安置し、其の形勝宛然奥羽平泉附近の達谷窟に髣髴たり。養老年間僧泰澄の開始せるところ、初め巖谷寺と號せしを、花山法皇其の勝を愛し給ひ、西國卅三番の札所中、第一番の紀州那智と第三十三番の美濃の谷汲寺との一字を取りて、今の名に改めさせしなりといふ。殿堂塔榭皆々名匠の手に成り、浸蝕風化の自然作用を受け、更に多少の人工を加へたる奇岩怪石錯落して、自づから一區の靈境を成せり。春花

小松町



秋錦の勝また此の地方に冠たりといふ。粟津温泉は地既に能美郡に屬し、那谷寺と一小丘陵を隔つるに過ぎざれども、小松町より前に記したる今江村を經て至るを順路とす。硫黄泉にして、浴舎の設備また完し。山代山中二温泉と匹すべし。小松町は加賀國中第二の都會にして、大聖寺町と金澤市との中間、國道の衝に當り、交通商業此の地方の一中心を成すのみならず、生糸織物等の工業また甚だ盛なり。前記



今江村より一里餘を隔つるに過ぎず。市街は南北二十六町、東西八町、戸數三千七百、人口一万三千餘を有し、梯川は其の北部を貫流し、安宅川に合して安宅港に注ぐ。花山法皇此の地に行幸あらせれしが、其の後戰國時代に至りて、村上氏丹羽氏相踵ぎて此の地を領し、豊臣氏に及びて前田氏の封土となり、尋て前田利常此の地の城に遷りて老を養ひしより、市街漸く繁盛なるに至れり。維新の後、城を毀ち、監獄署及び其の他の諸官衙を置き、第四中學校を建てたるを以て、其の遺址多くは荒廢したれど、天守臺は今日猶存せり。町の最も繁華なる處は京町通にして、北陸線の停車場はその東數町の處にあり。官衙は能美郡役所稅務署區裁判所中學校等あり。町の有名なる神社多太神社は本折町にありて、一名を多太八幡といひ、繼體天皇未だ皇子にて越前國に御在せし時の勸請なり。藏する所の齋藤實盛が着せし錦の直垂は、壽永二年源義仲の參籠せし時寄進せしものにして、今、國寶たり。名刹には本光寺本蓮寺等あり。町は此の附近の工業地にして著るしく、産する所、絹、紬、奉書羽二重九谷陶器、茶、生糸、其座、葎等あり。就中羽二重九谷陶器は其座と

## 安宅町

共に海外に輸出す。此の附近二三里を隔て、小鑛山多く、阿手尾小屋金平遊泉寺波佐羅等の目あり。皆多少の金銅を産せり。安宅町は小松町の西一里にありて、梯川の海に入らんとする處にあり。此の地は古の驛址にして、兵部式に安宅驛馬五匹とあるは是なり。往昔は北陸官道は越前國細呂木より海濱に出て、加賀國に入りては橋立安宅本吉今美川木津高松を経て能登國に入りしかど、地勢變遷の爲め、陸地漸く降下し、街道の址は今海中に没せり。源義經勸進帳の古事は俗傳にして信ずるに足らざれども、其の關址の海中に没したるは蓋し眞なり。人口二千餘を有する一邑にして、今は漁商相雜居す。梯川口に安宅港あれど、日本海の風波險惡にして、多く船舶の碇繋するを見ず。小松町より東に向ひ、能美郡の中部を横斷し、手取川の岸に出て、更に川に添ひて峡谷の風景變化極りなき間を南方に溯ること五六里、白峰村に至るべし。之れより東南に向へば、白山温泉場を経て白山に向ふべく、西南に向はゞ、谷峠を経て越前勝山に出づべし。此の手取川の谷は白山街道と稱し夏時登山の行者陸續として跡を絶たず。今此の線路につきて觀察せんか、先づ



鑛山寺遊泉

小松町より東すること里許、漸く山間に入り、附近に遊泉寺鑛山ありて、銅を産す。又中海村原に平清盛の嬖妾佛妓の墓あり、祠に其の木像を藏す。これより觀音山の一山脈を中峠に於て横斷し、大日川を渡りて別宮村にいたれば、地に、白山別宮神社あり。永延二年の創建にして、白山七社の一に屬す。境内に三度櫻の奇あり。釜清水より手取川に沿ひ、三里にして尾添川の會湊點に至る。これより東して尾添に至れば、白山東路の基點あり。手取川に沿ひて猶上ること四里、白峰村市の瀬に至れば、其の南路の發足點あり。白峰村の主邑は有名なる牛首の地なり。

白山

白山は本地方の名山、本邦屈指の峻嶺、古來越の大山、越の白根芙蓉峯天山長白山等の稱あり。山は五峯を爲し、北の三峯を御前大汝劍峯と稱し、南の二峯を別山三の峯といふ。最高二千六百八十一米、脈は御前より起り、南は別山三峯を擁して越前國の境に亘りて丸山大日山に連り、北は劍峯を挟みて、石川郡の日見脊妙法山より御腰掛笈千丈平奈良嶽の諸嶺となり、其の山姿の雄大宏偉なる、宛然絶世英雄の資ある帝王の群臣を帥ひて朝に立てるがごと

し。其の輻射谷は四方に下り、北方の溪澗最も深く、其東にあるを中の谷といひ、次を雄谷といひ、次を雌谷といひ、次を荒谷といふ。西を牛首谷と稱し、即ち手取川流域の注く所、中に十一ヶ村をふくむ。又西に大日山溪澗あり、これを西谷といふ。(詳細は地形參照)登路五條、其の三條は加賀國に屬す、即ち尾添より廣野追分長峯美女坂瓶割坂を経て御前に上るもの、これを白山東路といふ、嶮にして遠し。白峯村市の瀬より檜坂一の宮指尾豐阪女郎阪別當阪黒節彌陀原室平を経て上るもの、これを白山南路といふ、東路に比すれば稍易にして近し。又、市の瀬より尾太郎橋三石檜木阪檜阪畜生谷椋木阪梅阪を経て別山に登るものあり。甚だ險なり。此の他、飛驒國平瀬村より御前に上るものと、越前國石徹白村より別山を経て御前に至る者とあり。要するに白峯村は白山登攀の要路に位し、越前勝山町より至るもの、小松金澤等より來るもの皆こゝを過ぐ。白峯村は一邑を爲し、人烟稍盛なり。これより登ること十町許にして、市瀬温泉あり。炭酸泉にして、溫度攝氏四十三度を保つとも、溪水と共に混出するか爲めに甚だ熱からず。浴舎十數軒あり、夏時は登山者



## 白山絶頂

の麿至するを以て頗る難選を極む。又炭酸水を製し、白嶺水と稱して販賣す。これより猶登攀すること三里、室堂と稱する休泊所に達す。室堂の上は、山に草木なく、唯、焦石の磊塊たるを見るのみ。是より猶登ること八町にして、大御前の絶頂に達す。白山連峯中の最高所として、加賀越前美濃飛騨越中能登の諸國を一望の下に集め、ことに雄偉壯大なる飛騨も山脈を展望し、晴天には遙かに東海の富士を髣髴し得べし。其の眺矚の雄大なる、宇宙の壯觀と稱するも、決して溢美にあらざるを覺ゆ。頂上は稍平夷にして、峯頭に一箇の神祠を鎮し、周圍を匝するに石垣を以てせり。白山比咩奥宮即ち是なり。社殿の傍に、一等三角測點の檣あり。別山に至るには、此の大御前より下り、一度室堂に戻り、それより新に登躋せざる可らず、此の間三里程にして、中途に六兵衛室と稱する休泊所あり。別山は御前の南にあり、古名を小白山と號し、上層は赤黒眞土を帯び、疎らに五鍼松を生ず、一小祠あり、大山祇命を祀れり。別山より市瀬温泉に下るには、絶頂より下方十町許の平地に、室の平の休泊所あり。これ即ち別山の室堂とも稱すべきものなり。これより左

## 鶴來町

に向へば越前の石徹白に出で、右方に三の峯を左にして下れば、二里餘にして市の瀬に達す。其の他大汝劔の峯あり。共に險峻を極む。山中瀑布多く、雄谷の千仞瀧、雌谷の二重瀧最も著はる。前者は九石川の水源を爲し、高さ十五丈幅一丈八尺を有し、後者は目附谷川の水源を爲し、高さ十五丈餘を有せり。共に落ちて手取川に注ぐ。其の他別山に龜瀧あり。赤谷川に、布引瀑あり。いづれも壯觀を極めざるものなし。

手取川は源は白山大汝山下に發し、能美石川二郡の界を爲して北に流れ、其の峽谷の濶大なる、其の水流の急峻なる、北陸七太川の一と稱せらるゝもまだ宜なり。先づ流ること二里にして、御瀧川河内川尾谷川を併せ、中宮に至りて南より流るゝ、獨目谷川を入れ、西流二里餘、白山川を合せ、水流漸く大なり。猶流ること三里、左に大日川を入れてより益、大河の趣を呈し、鶴來町に至りて、西に折れ、始めて白山街道と相離る。白山街道は鶴來町より猶眞直に北を指し、三里半にして、金澤市に達す。鶴來町は加賀平野と丘陵との間に位せる一名驛にして、其の市場には山野の産物を交換して、商況



常に盛なり。人口四千四百餘を有せり。此地は鶴來烟草の主産地にして、町に、一等葉烟草專賣所あり。町の東半里餘河内村、字三の宮に白山比咩神社あり。白山の開祖僧泰澄が白山登躋の祈願を凝らせし處、今、國幣小社たり。往昔にありては越の國の一の宮と稱せられしもの、歷朝の尊崇淺からざりしといふ。此の附近に、吉野の九十九谷あり、絶景を以て著はる。

更に小松町に歸り、北國街道を進まんに、國道は此處より少時、北陸鐵路と相離れ、寺井粟生の諸邑を經、手取川を渡り、猶北行する二里餘にして松任町に至る。鐵道線路は美川に達する別路を繞ひて、次第に海岸に近く、白沙青松の邊、遙かに日本海の怒濤を見るに及んで、路傍に風情ある一停車場を置く。小舞子驛即ち是にして、夏期に限り、避暑客の爲めにこれを設く。松影白沙に印するの邊、二三の旗亭あり、風光の明媚、宛として舞子に類し、其の名稱の誣ならざるを覺ゆ。これより一道の長橋、手取川を渡れば、美川町あり。人口五千余を有する一邑にして、其港には船舶の出入多し。町に稅務署あり、また、藤家神社世尊院あり。美川驛の次驛を松任驛と爲す。松任

小舞子

美川町

松任町

金澤市

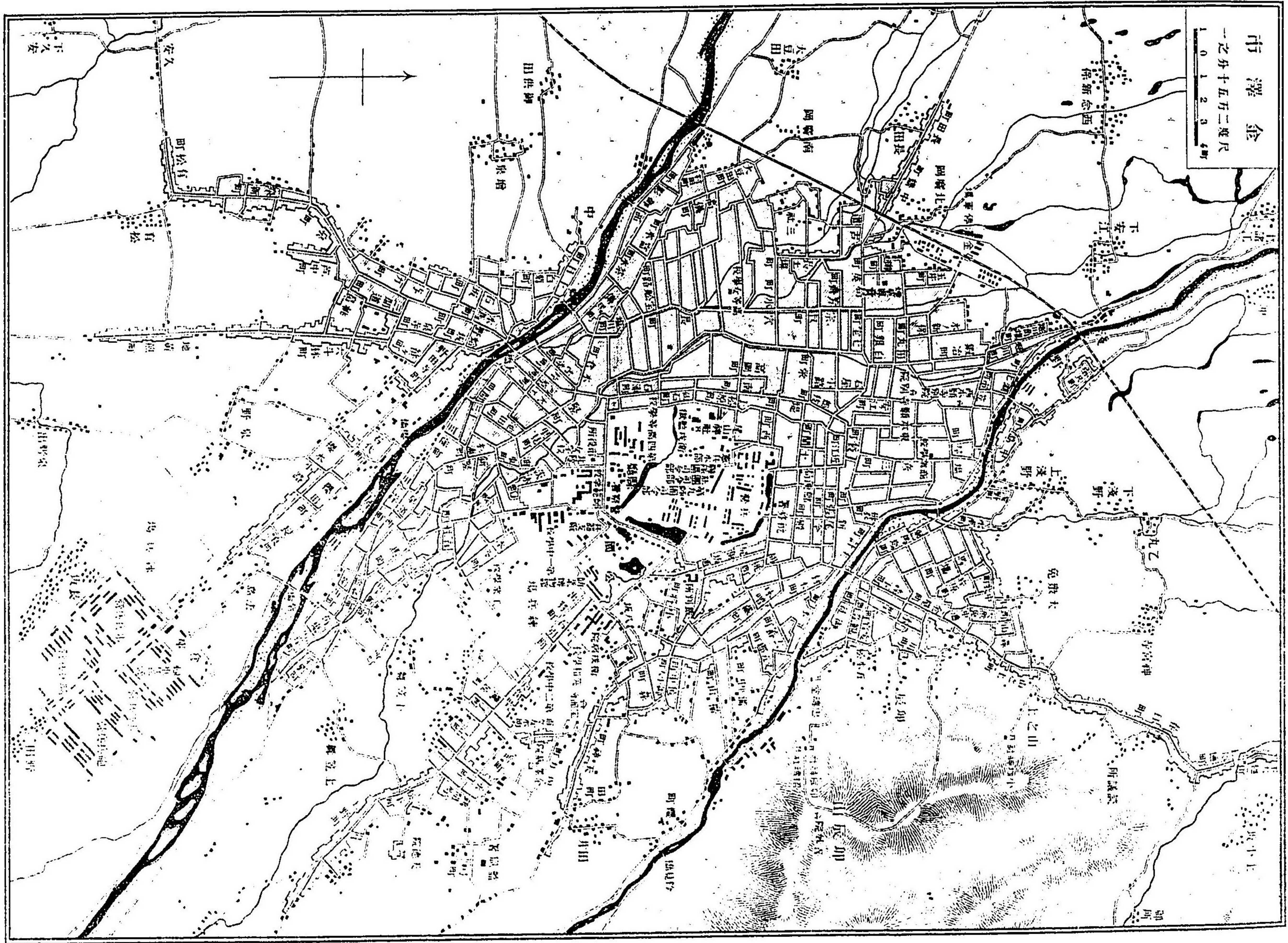
町は石川郡中金澤市に次げる都會にして、此地方の一中心を爲し、人口六千三百餘を有せり。地に、石川郡役所稅務署及び石川縣農學校あり。又農事試験場北陸支場あり。市况常に繁盛なり。停車場の前面に位せる城址は、松任範光の初めてこれを築きしもの、天正年間上杉謙信の來攻に逢ひて陥落せしが、後、徳川則秀前田利長舟羽長重などに居れり。町に若宮八幡神社松任金劍神社あり。町を出て、國道を進めば、一里餘にして、野々市の一邑あり。往昔加賀の守護富樫氏が二百年の久しき間、據りて以て覇を北國に唱へしところ、今その居館の址を留めずと雖も、憑弔懷古の情自から禁ずべからざるものあり。かくて金澤市の瓦甃は忽ちして眼前にあり。

金澤市は加賀國の北部に位し、舊時は前田氏百万石の城下として、今は縣行政首腦の所在地として、北國屈指の都會たり。市街は東西約一里餘、南北一里十三町、戸數約一万八千六百、人口約九萬七千餘を有し、家屋櫛比市街整齊、商業また甚だ繁盛なり。地形を略説すれば、加賀海岸平野の北部にありて、淺野川は市の東北部を貫流し河北瀉に注ぎ、犀川は市の西部を流れ



金澤城址

て金石港に至りて海に注ぎ、中央一丘陵の連亘するところ、即ち古城址にして、また有名なる兼六公園のある所なり。繁華なる大通は野々市より來りて市の南部に入り、行くこと數町にして、南より來れる鶴來街道を合せつ、愈々進みて、金石町に達する馬車鐵道の線を有せる一路を西北に分ち、繁盛なる片町を経て、舊城址の丘陵の西方に添ひつゝ、市中を南より北に進み、忽ち東方に屈折して、十間町尾張町橋場町を經、里程起算の標木を有するところより、正北を指さし、淺野川大橋を渡りて、大樋町に至るまで、其の延長實に一里二十餘町に及べり。最も繁華なるところは片町及び十間町等にして、家屋整正、巨大なる商買皆な棟を連ね、頗る繁華雑沓を極む。北陸鐵道の停車場は市の北端にありて、繁華なる市の中心を距ること半里餘に及べり。先づ、市の中心なる金澤城址よりこれを記せんに、城(第十八圖甲)は當初尾山城と稱し、藩祖前田利家が天正十一年、豊臣秀吉より付與せられ、舊居城能登の七尾より移り住み、其の子利長に命じて、大に城濠を擴張せしめたるもの、其の頃より金澤城とは改稱したりしなり。慶長三年より明治二年これを朝廷





兼六公園

に奉還するに至るまで、壘壁塹濠頗る堅牢に久しく北國の雄鎮たりし所なりしを、惜しいかな明治十四年火を失し、舊城は全く灰燼に歸し、舊觀を存するものは、僅かに石川門のみとなりぬ。今、其の城内には、第九師團司令部あり、歩兵第七聯隊の兵營ありて、依然北陸の鎮臺たり。この城址と東南百間濠を隔て、相對し、老樹蒼鬱、自然の風景をなすもの、即ち是れ高松の栗林園岡山の後樂園と共に、本邦の三大公園と稱せられたる兼六公園(第三十二圖)なり。園、東西四町四十間、南北四町十八間、面積二万三千五百餘坪を有し、茂林修竹、泉石亭榭の美、容易に狀すべからざるものあり。園の起源を尋ねれば、寛永年間當時の藩主前田齊廣の改築したる庭園の跡にして、兼六の名は洛陽名園記に謂はゆる宏大幽邃人力蒼古水泉眺望の六勝を兼ねたりとて、白河樂翁公の命名したるもの、先づ、園内に入れば、青草甍を布くかごとく、人をして一種名狀すべからざる快感を覺えしむ。山を紅葉山福壽山榮螺山と稱し、水を霞ヶ池瓢ヶ池と言ふ。瓢ヶ池の畔、ことに幽邃を極め、瀑あり鎗然と落つ。之を翠瀑と稱し、これに對する一小亭を夕顔亭といふ。小堀遠州



の作にして結構頗る古雅なり。これより北に進めば樹木愈々蒼鬱、殆ど人をし  
て身の公園の中にあるを忘れしむ。霞ヶ池は園の東北下阪口を昇りて南に進  
みたるところにありて、其の池塘の上は頗る眺矚の美を極め、市街十數万莖  
を隔て、卯辰山の蜿蜒起伏せるを見、更に北方日本の烟波と河北潟の藍  
碧と掩映する天末に、能登の寶達山の青螺を指點し得べし。池畔、春花秋錦  
の美に富み、池心に龜甲山あり。又其の附近に江州唐崎松の種子を植ゑたり  
と稱する老松と有名なる徴軫燈籠とあり。これより園の東に至れば、日本武  
尊の一大銅像屹として聳え、高さ一丈八尺、岩面刻するに、明治紀念之標の  
六字を以てす。これ明治十年西南の役以來戦死せし勇士の忠魂を祀れるもの  
なり。之より南すれば、一洋館あり、これ縣立勸業博物館(第二十三圖甲)にして、  
明治九年の創立にかゝり、館内に古今内外の器什産物標本等を陳列す。又館  
の一部に圖書室、物産陳列場あり、共に公衆の縦覽を許す。これに隣りて一  
樓閣あり、曾て藩主前田齊廣夫人の隱栖に宛てたるもの、今縣有に歸し、成  
巽閣といふ。其の結構甚だ華麗なり。西隣に金澤神社あり。傍に湧出せる小

## 石川縣誌

池は清冽にして早魃にも涸るゝことなし。傳へ言ふ往昔里人芋堀藤五郎なる  
もの、沙金を此の池に洗ひしを以て市名これより起ると。池畔の洞窟に金澤  
靈澤の碑ありて、以てその由來を記せり。その他曲水の幽趣掬すべき、鶴鶴  
島の躑躅及び萩に宜しき、龜甲橋附近の杜若に宜しき、一としてこの名園た  
るに適せざるなし。且つ園中櫻樹多く、旭櫻鹽竈櫻楊貴妃櫻等の名あり。公  
園を南に出づれば、中本多町に工業學校あり、石川縣廳は廣阪通にありて、  
純日本風の建築なり。それと相對して金澤市役所あり。第四高等學校(第二十圖  
甲)は縣廳と相接し、其の建物は宏壯なる洋館にして、其の設備また甚だ完し。  
この附近に石川縣師範學校あり。石浦神社は郷社にして、廣阪通本多町等四  
千餘戸の鎮守神社なり。石浦町の南端香林坊に太神宮あり。神宮教金澤本部  
のある所にして、社殿宏壯、境内廣く、劇場あり、興業物あり、市場ありて、  
四時雜選を極む。香林坊より西町の大路を北に進めば、右方の高地に尾山神  
社(第三十三圖乙)あり。別格官幣社にして、藩祖前田利家の靈を祀り、相殿に利長  
利常を合祀す。石燈を登ること數十級にして、三層の神門突如として顯る。

## 尾山神社



其の構造は宏壯なれども、洋風を模擬して、俗氣を帯ぶるの譏を免かれず。これに登れば市の大半を展望して、快言ふべからざるものありといふ。其の奥には、本殿拜殿神輿庫等あり。境内には梅樹多く、門前の堤塘には櫻樹林を爲し、花時は共に美觀を呈す。

南、犀川大橋より、東北淺野川大橋に到る街道は、本市に於ける主要路を爲し、先づ片町の繁華を得、それより尾張町十間町に至れば、巨館大屋櫛比し、電信電話電燈の柱線は兩傍に連り、人群車馬相雜選し、頗る繁華の區を成せり。就中尾張町附近は金融の中心を爲し、各銀行の宏屋相連り、商業殷盛なり。地に、金澤米穀取引所あり。仲買商店軒をならべ、立會時間には、甚だ喧騒を極む。十間町上堤町等には大なる旅館多く軒をつらねたり。また、馬籠町附近に、繁盛なる青物市場あり。而して此の大路は馬籠町に到りて右に折れ、博勞町の一角に、宏壯なる金澤郵便局あり、その附近に博勞町電話所ありて、市に於ける通信の中心を爲せり。これより淺野川大橋に到る途中に、里程起算の元標あり。淺野川大橋に接するの街路は、商賈軒をつらね、

里程元標

卯辰山

雑沓を極め、殊に夏の夜などは納涼の客陸續として集り、燈光燦として橋の東西を照し、また一奇觀なり。淺野川大橋を渡り、森下町を経て、東南に進めば、一帶の翠微高く鬚眉を壓して、到らずして境の奇なるを想像せしむ。これ、即ち卯辰山なり。天正五年上杉謙信壘を此の地を築き、名けて臥龍山と呼べり。又た、金澤城と相對せるを以て俗に向山と稱せり。山上に登れば市下の風景歴々として指點すべく、近嶮遠岳の勝は勿論、日本海の烟波と河北瀉の藍碧とを望み、人をして自から胸襟を爽かならしむ。况んや凭るに茶樓あるをや。飲むに旗亭あるをや、山巔を景雲臺といひ、卯辰神社あり。高く石礎に登りて達すべし。社に隣りて招魂社あり、報國盡忠の士の靈を合祀す。山の南に隣りて、鈴見山あり、春は早蕨を折るべく、秋は蕈を狩るに適せり。

淺野川大橋より金澤城址の東面を過ぐれば、金澤測候所、金澤地方裁判所あり。兼六公園の東南より起れる街路を進めば、數町ならずして、左に出羽町の練兵場を見る。此の地は往昔は加賀藩士族の住居たりし地、明治十九年



天徳院

家屋を取り拂ひて練兵場となせり。土地高燥にして眺望廣濶に、毎年招魂祭の際には、此處に競馬の催あるを例とす。其の附近に、金澤陸軍兵器支廠あり。街路はこれより一直線に東南を指し、十町餘にして、市下の名刹天徳院に達す。院は曹洞宗の巨刹にして、小立野上鶴間町に位し、翠松蒼々として山門に至るの大路を挟み、頗る俗塵を絶したるの思ひあり。元和九年藩主前田利常が其の室天徳院殿の菩提を弔ふ爲めに建設せられたるもの、其の後寛文十二年に至り、藩主綱紀更に其の規模を擴張し、輪奐の美殆ど人目を驚かしむるばかりなりしも、明和五年祝融の襲ふ所となり、僅に山門を殘せしが、後再建して以て今に及べり。背後に舊藩主の墳墓多し。また境内は梅花の勝あり。又其の附近百々女木町に、寶圓寺あり、金澤病院は石引町にありて、最近の新築にかゝり、石川縣立の病院なり。規模宏大にして構造美を盡し、本邦屈指の病院の一と稱するも、決して溢美にあらず。城内に官立金澤醫學専門學校あり。又、下石引町に、陸軍所轄の金澤衛戍病院あり。犀川の西南一帯の地を野村と稱し、野田寺町の南端に、野田山の丘陵起伏

野田山

産業

す。兵營は其の麓にありて、歩兵第三十五聯隊騎兵第九聯隊工兵第九大隊輜重兵第九大隊野戰砲兵第九聯隊の諸建物は野田山路を挟みて相對し、其の附近に廣濶なる練兵場あり。野田山は松樹鬱蒼として、山上に藩祖利家以下前田氏歴代の墳墓あり。野田寺町南端の地を俗に汎稱して十一屋と言ひ、附近數軒の茶亭あり。此の附近一帯竹藪に富むるを以て、筍飯を調達し以て客に勸む。風味美なり。又、野田寺町四町目に、松月寺なり。境内の老櫻は頗る著名にして、巨幹密枝垣を越えて路を掩ひ、花時は來り觀る者多し。停車場附近五寶町に、本派本願寺別院あり、横安江町に大谷派本願寺別院あり。前者は規模壯大なれど、後者は假堂にして甚だ美ならず。其の他市内の神社佛閣を擧れば、椿原神社天神町安江神社鍛冶町泉野神社野町豊國神社(殿町)小阪神社(山の上)町天乘寺野田寺町(祇陀寺)全上専光寺田丸町等あり。本市産業は羽二重最も名高く、加賀羽二重の名は貿易市場に喧し。之に次ぐは九谷陶器にして、良好なる美術品を産す。漆器また甚だ著名にして、其の蒔繪は、殊に本邦工業史上忘るべからざる沿革と技巧とを有せり。其の他



市の沿革

清酒・燐寸・銅器刺繍等あり。(工業参照)

此處に市の沿革を釋ぬれば、山崎村の名最も古く、其の一集落は今の兼六公園及び出羽町練兵場附近にありたるが如し。延元興國の頃に及びて、人民地形の利と交通の便とによりて、漸次此の附近に集り、遂に千餘戸の大邑となり、山崎町と稱したりき。兼六公園中に残れる小丘を山崎山と呼ぶは、蓋し其の名殘と言ふを得べし。延元四年に至り、眞宗の第三世、覺如此の地に一小刹を建つ。爾來國內に於ける門徒の跋扈甚しく、野々市に歴世の居館を占めたる國守富樫氏の勢力の漸く衰運に向へるに乘し、遂にこれを壓迫して、文明年中全くこれを滅しぬ。門徒はかくて陰然として此の園の守護となりしが、第八世蓮如に至り、河北郡若松の道場を此の地に移し、堡塞を築きて防禦の術を講じ、本山なる近江國山科より家老下間筑前等を召して、これが守將たらしめたり。時に長享二年なり。其の城は今の城址と大差なきがごとく、當時これを尾山城と稱したりき。而して土民は一方其の政治的勢力と共に宗教的迷信に歸依し、之を御山と尊稱し、朝貢を廢してこれを一向宗本山に納

金石港

ひるに至りぬ。天正に至り、織田信長兵を此の地に出し、佐久間盛政をして御山城を攻めてこれを陥らしめ、同八年地を盛政に與へぬ。此の頃より地は漸く今の市街を成し、南町堤町・金谷町・松原町・西町・安江町の名ありき。盛政城に治むること三年、十一年に至りて、柴田勝家に與へて亡び、其の後を豊臣秀吉前田利家に與ふ。利家始め能登七尾城に治せしが、此の時を以て來りて尾山城に徙り、始めて金澤城と稱せり。これより戸數人口大に増加し、尾張町・新町・橋場町等の名新に置かる。文祿元年、金澤城を修むるや、城中の臣邸を城外に移し、南町堤町等を今の地に設けたり。爾來愈々繁盛に赴き、慶長の初に至りては、人口既に三萬五千の多きに達せり。同十九年利長越中高岡に歿してより、扈從の諸士皆此地に移り、高岡町を新設す。其の後元和、寛政の大火災あり。其の度毎に市區の改正を爲し、以て今日に及べり。金澤市の中央より西に岐れたる金石街道を進めば、一里半にして、日本海の怒濤來りて眼界を洗ひ、犀川の溶々海に注ぐ處、瓦葺粉壁の美しく海波に映ずるを見る。これ、金石港にして、今、金澤市より鐵道馬車の設けあり。



町は市坊三十、人口七千七百を有し、日本海岸の一要港たり。此の地舊時宮の腰又は大野港と稱し、往昔外國の交通ありし時、船、此港を以て出入の門戸となせりといふ。國禁を犯して外國貿易に従來せし北國の快男子錢屋五兵衛は實に此の地の産なり。町に、大野湊神社と稱する式内社あり。夏時は海岸に海水浴場を設け、遊客多し。町の北東には河北瀉の末流溢れて此處に注ぎ、これを渡れば、一帶の青松白沙、直ちに粟ヶ崎に到る。此の地の宮下と稱する處に御田山一名桃山亭の址あり。寛文間前田綱紀の水亭をつくりしところ、丘に桃樹を植ゑ、風光頗る明媚なり。

金澤市より東北に輻射する街道は官線鐵路に添へる北國街道を始とし、市の北方一里餘、百飯より北國街道を西に岐れて、富山縣福光町に達する福光街道、市の東部牛阪より出て、二俣より同じく福光町に到る二俣街道、下田上より岐れて南東を指し、淺野川の溪谷湯涌谷を経て越中小院瀨見に至る越中街道等あり。最初の福光街道を除くの外は、多くは山間の細路にして、記すべきこと少し。只、淺野川上流に、湯涌温泉ありて多少の浴客を集むるの

津幡町

み。此の温泉は鹽類泉にして、浴場は石を以てこれを圍み、數戸の浴舎其の周圍に立つ。蓋し山間の一温泉たるに過ぎず。二俣街道と此の街道との間、石川河北兩郡の境界に醫王山あり。山中蕪草多きを以て知らる。又その峰下に大池あり、絶壁千仞、一大岩石の狀宛然魚を窺ふに似たるが故に、これを鳶ヶ峰といふ。其の前峯なる戸室山より角閃富士岩を切り、石材として盛に縣下に出し戸室石の名高し。傳へ言ふ、金澤城の石壁は皆此山より切り出して築きたるなりと。附近小金村字小阪に野間神社あり、式内社の一にして河北郡の總鎮守なり。又、同村傳燈寺に、傳燈寺あり、臨濟の巨刹なり。同村談義所に鳴和瀑あり。共に金澤市を距る一二里に過ぎず。又、福光街道の北藥師谷村に深谷鑛泉あり。

北國街道は金澤市を出て、北に向ひ、河北瀉畔の第四紀新層の平野を走ること二里半、忽ちにして津幡町に達す。此の地は北國街道と能登街道との岐るゝ處にして、前者は官線鐵路と共に東行して、石動山脈の俱利伽羅峠に達し、直ちに越中國に入り、後者は新たに能登の第四紀新層地を北東に横斷し



河北潟

て、能登國の中心七尾町に達する七尾鐵道の線路と共に北に向ひて走れり。この交通の要衝に當れるを以て、町は頗る繁華を呈し、人烟稠密なり。且つ津幡の一水は町の中央を貫流し、西三十町餘にして河北潟に注ぐを以て、加能兩州の荷物を運輸する荷船の航行頗る盛なり。而して官線、七尾の兩鐵道は町の附近中條村にて連絡し、其處に津幡の一驛を置き、町にある官線の一驛を本津幡驛と稱す。町は人口三千二百を有し、河北郡役所稅務署等あり。町に、廣塚あり、冷泉爲廣卿の墳墓なり。河北潟は町の西南に横れる潟湖にして、一條の狭小なる沙丘を以て日本海と相隔て、湖脚は西南に決し、金石町に到りて海に入る。金澤以北の諸小流は皆一たびは此の一大水溜に集り、舟楫の便甚だ盛に、白帆の搖曳、頗る湖の風光を添ゆ。湖中魚族に富み、鰯、鯉、鮒を産し、殊に麩條魚は、その味の美なるを以て世に著はる。内灘と稱する地は河北潟と日本海とに挟まれたる狭長なる沙濱の總稱にして、向粟ヶ崎、大根布宮坂荒屋室等の諸村落點々として相連る。大根布に、縣社小濱神社あり。松影白沙相連り、風光また捨つべからざるものあり。又、此の附近の沙

俱利伽羅

古戰場

丘には、石器時代の遺址ありて、石鏃石斧等の遺物を出だすことあり。津幡町より東折せし北國街道は、竹橋を經、九折に到りて、加越の境界を爲せる石動山脈の低所を過ぐ。鐵路は此處に二箇の隧道を穿つ。此の時は即ち有名なる俱利伽羅の險にして、源義仲が平氏の大軍を塵殺せし舊蹟は竹橋の東一里津幡驛より二里にありて、其の舊道に今猶ほ俱利伽羅の字を存せり。俱利伽羅に手向神社あり。社の右方百八坂と稱する百餘級の石登を登れば、頂上に石造の小祠あり、其の傍に三角測點あり。四方の展望頗る美に、加能越三州の山河悉く双眸の中に集まる。また一勝地と稱するに足る。此の舊道は推古天皇の十三年大仁鳥臣の始めて開設したる栗栖路にして、有名なる源平の古戰場なり。今、左に、源平盛衰記の一節を引かんに、「五月十一日平家の先陣俱利伽羅の堂、國見、猿馬場の塔橋に控へて、赤旗所々に立並て、源平陣を合せて二町に過ぎず。木曾は礪波山黒阪の北の麓壇生社八幡林より松永柳原を後にして黒阪口を南に向ひて陣を取り、兩陣相隔つこと五六段に過ぎず。互に楯を突向へり。五月十一日の夜半となりければ、五月の空の癖な



れば臚に照らす月影、夏山の木下暗き細道に源平互に見え分ず。中略牛五六百匹取集めて、角に炬松結附けて夜の更るをぞ相待ちける。去程に樋口次郎林富樫を打具して中山を打上り、葎原に押寄せたり。根井小彌太二千餘騎今井四郎二千餘騎小室太郎三千餘騎巴女一千餘騎五手を一手に合せ、一萬餘騎北黒阪南黒阪引廻し、鬨を作り、太鼓を打ち法螺を吹き、木本萱本を打はためき、墓目鎗を射上てとゞめ懸りたれば山彦答へて幾千萬とも覺えざりける。木曾すはや搦手は廻りける、鬨を合せよとて四五百頭の牛の角に松明を燃して平家の陣に追入。胡類子原柳原上野邊に控へたる軍兵三萬餘騎鬨を合せ喚叫黒阪表に押寄る下略かくて匿殺されし平家の軍兵、十餘丈の俱利伽羅谷は殆どこの死屍の爲めに埋められ、今日猶錆び朽ちたる刀劔を幽谷の中に發見することありと言ふ。遊子一たび此處に來り、地形によりて當時の事を追想すれば、徘徊脚躡去るに忍びざるものあらん。

北陸鐵道と七尾鐵道との分岐點なる中條を過ぎ、宇野氣横山の諸驛を経て高松驛に至る。此の間地として松影ならざるなく、處として白沙ならざるな

寶達山

く、荒涼たる中自ら一種の風光を具へて、人をして地の漸く僻陬に入りたるを思はしむ。高松驛また此の松影白沙の中にあり。地は加賀能登兩國の境を成し、附近木津に有名なる桃林あり。其の長さ一里餘に及び、花時は頗る奇觀なり。且、此の地は索麵の名産地を以て著はれ、盛に諸國に輸出す。高松停車場の北十町餘の街道に、加賀能登兩國の界標あり。これより二里餘にして寶達驛に近づけば、右に能登の峻嶺の一たる寶達山の聳立せるを見るべし。此の山は寶達停車場を東に距ること一里半餘、中央の最高を寶達御前と稱す。傳へ言ふ天正年間盛に黄金を採掘せしも、寛永五年鑛坑崩陥し、爾後廢絶に歸せりと。今、石灰螢石滿俺等を産す。寶達驛の西北半里を距てたる麥生と稱する地は、天元中國の守護源順の居館を置きたる地なりといふ。海岸に今濱村あり漁戸多し。これより一里、敷浪に至れば、停車場あり。越中の守護佐々成政が前田利家の驍將與村永福を圍みたりといふ末森城址は、其の東數町にありて、今猶ほ城跡を髣髴すべし。南志雄村字新宮に一溫泉あり、新宮溫泉又は藥師野溫泉と稱し、鹽類泉にして、常に浴客多し。此の附近は壽永



羽咋町

氣多神社

年間平通盛の源行家の軍を破りし古戰場として有名なり。加賀より能登に至る本街道は敷浪より岐れて、羽咋盆地の東部寶達石動等の山麓に沿ひて七尾に向へり。其の最初の集落を子浦といふ。此處は二千年前にありては海岸に瀕したる地にして、萬葉集に「之乎路からたゞ越え來れば波久比の海あさなきしたり舟かぢもかな」と咏ぜられたるは、即ち此子浦なりといふ。而して之乎路越とは北志雄より、東寶達山脈を越えて、越中氷見郡に通ずる山路なりしならんとぞ。此本街道には、飯山村の一村落あり。それより猶進みて鹿島郡に入れば高島二宮等の諸名邑あり。敷浪より外浦街道とたどれば、鐵路道路互に交叉し、一里にして羽咋町に達す。羽咋町は羽咋郡の中央、羽咋川の南岸にありて、海岸平原の一中心を爲し、能登半島の兩海岸を縫へる道路は、實にこの町より岐れて北に向へり。羽咋郡役所の所在地にして、人口三千六百を有し、町に延喜式内の神社羽咋神社あり。町を出て、北に進むこと一里、一の宮村字一の宮に氣多神社あり。國幣中社にして、大己貴命を祀り、崇神天皇の朝の御建にかゝる。古より此地に於ける顯著なる大社として崇敬せら

高濱町

る。祭祀の神事また甚だ古風を存せり。境内古木森々として枝を交へ、甚だ幽邃を極む。此西方、瀧と稱する地は、眉丈山の餘脈の海中に盡る處にして、越前三國港安島岬より、此處に到るまで十數里の間は、全く平滑なる沙濱を成し、松影は松影と相連るの光景を呈したりしが、此の岬端より以北は、小絶壁小陡崖頻々として出て、汀灣また甚だ屈曲出入に富めり。此の地は往古繁盛なる港津にして、大伴家持曾て勅使として氣多の神宮に下向せられし時「越知野をさし出て見れば邑知瀉氣たかく見ゆる瀧津瀨の里」と咏ぜり。

これより能登街道を離れて、北、海岸路を傳へば、上甘田村字瀧谷に日蓮宗妙成寺派本山たる妙成寺あり。國中著名なる巨刹なり。高濱町は此より猶海岸を北に距ると一里半、羽咋町より四里を隔てたり。人口二千四百を有し、地に區裁判所あり。高濱の西北に連接せる海岸を志加浦村といひ、宇安部屋百浦等あり。安部屋は能登縮の産地の一なり。高濱より東北に岐る、一路は、半島の最狭處を横斷して、輪島街道に合す。此の間の里程六里二十五町にして、途中火打谷に鑛山あり、滿淹を産す。海岸路は半ば沙濱、半は陡崖を爲



せる間を越えて福浦に到る。此の附近、奇岩怪石怒濤と相戦ひ、風景の勝を以て著るゝもの少しとせず。殊に、これより富來に到る二里餘の海岸は悉く是れ奇を極めたる懸崖絶壁にして、道路僅かに其の上に通じ、歩々海上を下瞰すれば、大小幾多の岩礁點々起伏し、怒濤これに當りて碎け、頗る奇觀なり。殊に機具岩と岩門岩とは嶄然として峙ち、最も旅客の思を惹くに足れり。好事者往々舟を福浦に艤し、海路富來に至りて、以てこの奇を探る者あり。福浦の東二里の山中に、米町瀧あり。富來は福浦を距る北二里、領家町地頭町の二つに分れ、富來川の海に入るを挟みて茅茨白堊相望めり。富來より酒見に至る海岸を増穂浦と稱し、天空海濶、最も風景に富めり。これより海岸路は少時海に離れ、松風の聲淋しき丘陵の間を過ぎ、大福寺を經、羽咋鳳至兩郡の境を越えて下れば、黒崎の怒濤再び眼中に落ち來りて、奇景言ふべからず。初地は海岸の一集落なり。

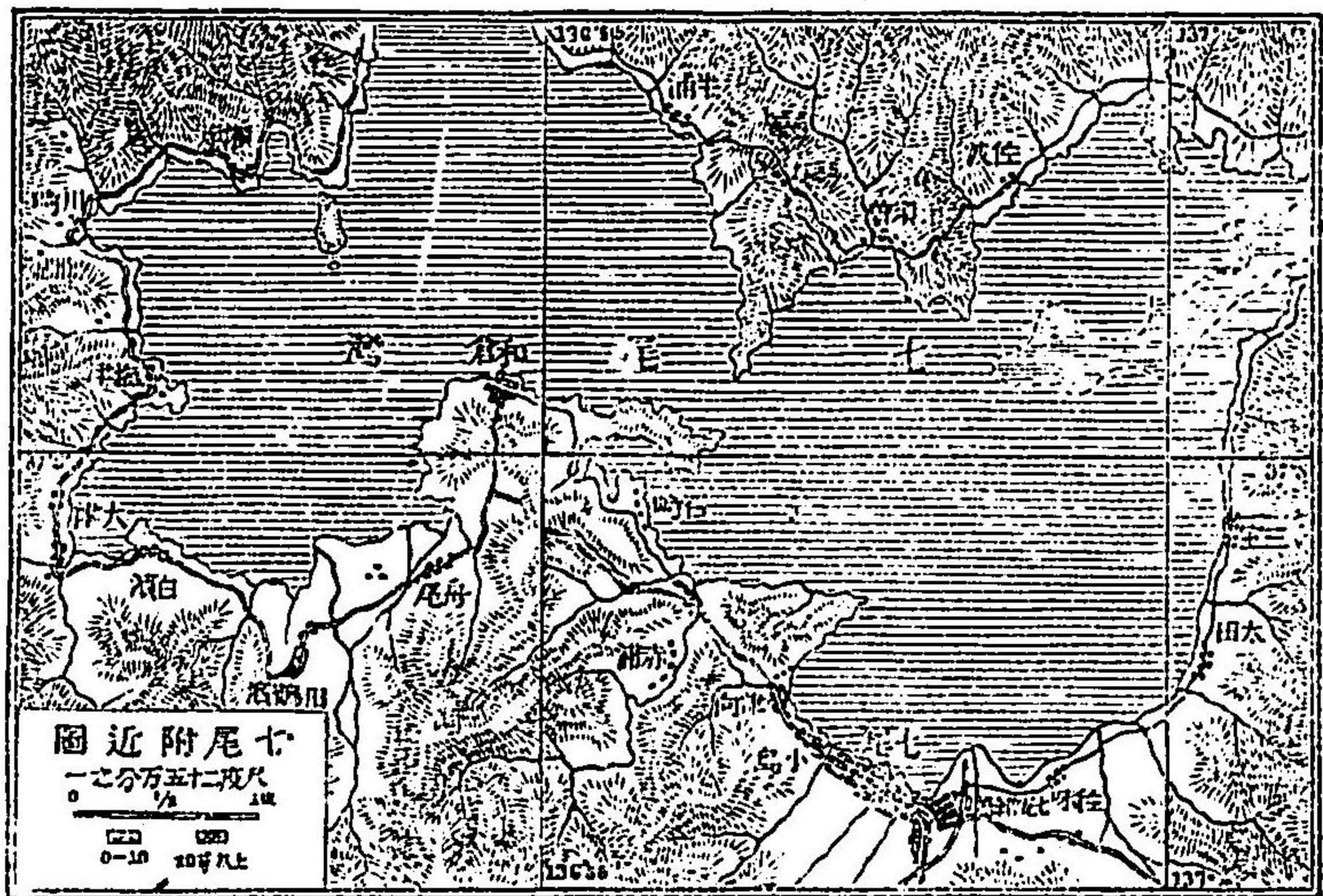
更に始に戻り、羽咋町より鐵道線路に添ひて進めば、能登半島沖積地の一隅にある邑知瀉は鏡のごとき激瀼たる風景を眼前に開き、前面に眉丈山の低

邑知瀉

石動山

き翠微の蜿蜒として連れるを見るべし。羽咋以南に於いて見たる沙濱と松林とは今は全く跡を絶ち、瀉の四周穰々たる稻田の美しく、榮ゆるを認む。鐵路は瀉の西端、低濕なる沼地を渡りて、時には、全く湖上を駛るがごとき思を爲すところもあり。この低濕地を過ぎ終りて、千路の小一驛あり。邑知瀉は一に千路瀉と稱し、又菱浦とも言ふ。周圍三里餘にして、四近の水みなこれに注ぎ、長澤川飯山川等の名あり。其の流末は二十餘町にして、羽咋川と合して海に注ぐ。湖光山影頗る遊客の思を惹く。湖中魚に富み、鱒鮒鰻絹糸鰻等を産す、白小魚は殊に美なるを以て著る。金丸に永光寺の巨刹を訪ひ、能登縮布の主産地なる能登部を過ぎ、良川に到れば、路は鐵路と別れて、内浦街道を爲し、直ちに能登内灣の西灣の頭、田鶴濱に至り、鐵道線路は徐々に七尾街道に接近して、七尾町へと向ふ。石動山は越中と能登との境に跨れる峻嶺にして、南は越中國氷見郡より寶達山脈の北に連接し、東は漸々として海岸に盡く。七尾街道の二宮より登路一里許、山嶺に伊須流岐比古神社あり。式内社の一に屬し、今、郷社たり。崇神天皇六年の勅建にして、養老五





年僧泰澄此の山に登り、勅を奉して石動寺を建て、僧坊の數三百六十、頗る壯嚴を極めたりしも、建武年間兵燹にかゝりて一山全く焦土となり、今、其の址を留めず。また、二宮の南小田中村に大入杵命墓あり。命は崇神天皇の皇子にして、能登臣の祖なり。今、此の附近小田中小金森會根藤井等の部落を種して御祖村と呼べるは、蓋しこれが爲めなり。

これより徳田驛を過ぐれば、地勢漸く廣潤、北方能登丘陵の低く蟠居せるさまを指點し得べし。一里にして、能登内灣の蒼波と灣中の大島能登島の翠螺

七尾町

とは忽ち車窓に迫り来る。而して風情ある七尾港の瓦葺粉壁は宛然唇氣樓のごとく眼下に見ゆ。見よ、七尾港の彼方、ウスキ崎を隔て、石崎須會崎の相對せる屏風崎瀬戸のさながら門扉の如くなるを始めとして、東は小口瀬戸に集りて出て行く白帆の無數、港内には伏木直江津航行の汽船及び無數の和船碇泊し、その眺望のすぐれたる、誰か快哉を叫ばざる者あらんや。七尾鐵道は七尾町の南部、府中と稱する處に七尾驛を置き、更に延長して海岸の東部矢田に、矢田新驛を置けり。これ、海運との連絡を便にせるなり。七尾町は本邦に於ける開港場の一にして、日本海岸屈指の良港なり。地は鹿島郡の東北、七尾灣頭に位し、市坊の數二十三、人口一万一千余を有し、鹿島郡役所税關支署區裁判所縣立第三中學校等あり。市街は商戸櫛比、人烟稠密にして、其繁華能登第一の都市の稱に負かざるを見る。殊に港市の特色を呈して、運漕問屋海産物問屋旅館等相櫛比し市況甚だ盛なり。七尾南灣の中にありて、小口瀬戸と屏風崎瀬戸とを以てこれを包み、東西三里半餘、南北二里餘、港内水深く波靜かにして、よく大艦巨舶を容るゝに足れり。且、ウラデポスト



ク、並に韓國諸港との間に定期航海の汽船あるを以て、將來に於ても露韓貿易上最も有望なる港津たるを得べし。内國航路は能登の東岸宇出津港を基點として、東南越後直江津に達する汽船と、飯田七尾間を航する汽船との二ありて、前者は宇出津以南の諸港に寄港し、大口瀬戸を入りて北灣より三口瀬戸を経て西灣に入り以て七尾に達し、後者は宇出津以北の諸港小木正院飯田等を其寄港地と爲し、宇出津よりは直ちに能登島の外洋を掠め、小口瀬戸より七尾に航入するを例とす。而して兩者共に正午前後を以て七尾港に着するを例とせり。能登半島東海岸の交通は其の大半を此の航路に由ると稱するを得べく、これが爲め内浦街道は比較的甚だ良好ならずといふ。斯の如く海陸の交通の便利を占むるを以て、七尾町は事實上能登半島の人文の中心を爲し、旅客及び貨物の他地方に赴くもの、皆な此町を経ざるはなく、繁華從つて皆此地に集るの趣あり。往昔は此町所口町と稱し、應永五年畠山滿則此地に築きて以て州事を司り、爾來歷世相承け、八世義春に至りて上杉謙信の爲に滅さる。かの『越山併得能州景、遮莫家郷憶遠征』の吟は實に此七尾城を陥れたる

## 能登島

時、後望十三夜に遭ひて、感興に觸れ作れるものなりといふ。後、織田氏に歸し、前田利家これが主たりき。今、其の城址七尾町の東南約一里の山に存し、俗に城山と稱し、地に古城の字を留めたり。此の地は酒及び醬油の醸造を以て聞え、海參其他の海産物の製造また甚だ盛なり。

能登島は七尾灣の中心に横はれる一大島にして、東西三里餘、南北二里周圍十八里を有し、全島低樹叢生せる丘陵を爲し、海岸の彎曲せる處々に、佐波須會半浦曲向田等の漁村を粧點す。市町村制改革の後は東島村中の島村西島村の三に分ち、居民五千有餘あり。東島村の東南端は松ヶ鼻と稱し、崎山村の一端と相對して小口瀬戸を爲し、西島村の南角須會岬は、石崎村の北端と相擁して屏風崎瀬戸を爲し、同村の西端は西岸村に對して、三ヶ口瀬戸を爲し、以て七尾灣を西灣南灣に區劃し、更に北の方東島村の多浦鼻は、瓜至郡兜村の風戸崎と相對して大口瀬戸を爲し、以て北灣を包めり。島の中央中の島村字向田に、式内伊夜比咩神社あり。又、島の一部に近年滿庵を産す。島中、他の奇なしと雖も、四面島嶼に富むを以て、風光甚だ美に、優遊半日



屏風岬

を過すに足るの地勢しとせず。屏風崎、最も名あり。能登島の一岬を須會屏風といひ、石崎村の一岬を石崎屏風と稱し、高さ各二丈許、相對して海峡を爲し、峽口凡そ七町、斷崖絶壁屏立し、青松これに生じ、風光甚だ美なり。

(第三十六圖甲)

七尾町より東北、能登島と小口瀬戸を以て相對する地は、崎山村と稱し、上湯川岡三室鶴浦等の小字あり。此の地は往昔長濱郷と稱せし地にして、萬葉集に「珠洲の海に朝開きして漕ぎ來れば、奈我波麻の宇良に月照りにけり」と言へるもの即ち是の濱なり。

和倉温泉

七尾より出て、西北に向へる街道は、田鶴濱に到りて内浦街道に合す。和倉温泉(第三十六圖乙)は其の街道を北に十町ほど隔てたる處にあり。七尾町を距る二里十五町に過ぎず。泉質は鹽類泉にして、無色透明、味少しく苦鹹なり。往昔海中より温泉涌出せしを以て涌浦と呼びしを、後、今の名に改めたるなりといふ。而して此の温泉の今日の隆盛を來したるは、明治十二年、地の有志者相謀りて大に土工を起し、山を拓き海を填めたるが爲にして、今は此の

穴水

一帯風光明媚なる地に、宏壯なる浴舎軒をつらね、頗る繁華を呈せり。殊に、海光水色の美に富めるは、此の温泉の特色にして、西灣波靜かなる處、近く能登島の翠嶼を浮べ、屏風崎の峻岩は波上に迂曲し、長者崎は長浦と相抱きて、北の方三ヶ口峽を爲し、机島種島唐島等歷々指顧の中にありて、其の風光の明媚、容易に狀すべからず。海岸に近く浮島あり、島上一祠を建て、辨天を祀る、故に一に辨天島といふ。島に、龍珠松、嘯虎岩等の奇あり。一棹これを訪はば、興味更に盡くる所なかるべし。更に街道に戻れば、田鶴濱は人口千二百を有する一邑なり。猶北すること三里、中島村あり。七尾灣航行汽船の寄港地なり。これより小牧に至れば、七尾北灣は眼前に迫り、穴水に至る二里餘の間、風光甚だ佳なり。此の途中、横見は鹿島風至兩郡の境界なり。穴水は地の豪族長谷部信連の鹿島郡熊木より移りて城を構へしところ、其の城址は字七海にありて、城ヶ鼻又は芝ヶ鼻と呼び、頗る要害の地として名高く、長谷氏二十世の居城たりき。今、輪島街道總持寺街道内浦街道の分岐せる焦點に位し、且、海路の交通も甚だ盛なるを以て、僻陬に稀なる繁華を保



總持寺

ち、人口三千餘を有せり。

穴水より岐れたる三路、その西せるものを總持寺街道と言ひ、丘陵の相起伏せる間を過ぐること、四里二十六町にして、櫛比村字門前に達すべし。これ、北陸の名刹總持寺のある處なり。總持寺(第二十三圖乙)は越前の永平寺と共に曹洞宗の二大本山にして、元享元年僧紹瑾の開創するところにかゝる。先づ總門を入りて寶珠橋を渡れば、正面に勅使門あり。更に進めば一大樓門あり、中に佛殿巍然として立つ。右に法堂、紫雲閣、接賓館、大庫裡、左に乘寮、車司、西堂寮等あり。佛殿の背後に祠堂あり。堂宇壯麗にして、國內これに比すべきものなかりしが、近年祝融に逢ひ、堂塔樓閣殆ど全く灰燼となりて、今は其の跡を留めず、惜むべし。

輪島町

輪島街道を北に進めば、穴水より五里三十四町にして、能登半島の最北端なる輪島町に達す。此の間馬車の便あり。道路は丘陵の中にあるを以て、阪路多し。町に近く、日本海の怒濤の渺茫として開けたるを見るや、旅客は少なからざる一種荒涼たる感に撲たれざる能はざるべし。輪島町は海岸丘陵の

内浦街道の諸邑

海に盡きんとする麓にありて、北に輪島岬の海中に突出したるを控へたり。日本海岸の一市邑にして、市坊の數四、人口一万七百を有し、風至郡役所あり。市街の中央を貫きて海に入れる河田川の河口は、即ち輪島港を形成し、船舶常に碇泊すれど、港外日本海の風波荒く、永く船舶を碇繫せしむるに足らず。此の地は有名なる輪島漆器の主産地なるを以て、居民多くは工を業とせり。輪島塗は器質の堅緻なると、沈金彫の精巧なるを以て其の名高く、産額年を逐うて増加す。(工業參照)又名産として索麵及抽餅子あり。町に郷社重藏神社あり。風來山は寺山又は觀音山と稱し、輪島町の西北に位する一高丘にして、登臨の美甚だ著はる。山上に、戦死者招魂碑を建つ。海中に七ッ島あり。舊、邊津島と稱し、延喜式風至郡邊津比咩神社はこの島上にありたりと稱す。

内浦街道は風至郡の東部と、珠洲郡の東海岸とを走れる道路にして、丘陵至る處に起伏し、怒濤海岸に荒れて、能登半島中最も僻陬に屬せり。この海岸に連れる汽船寄港地は、鶴川宇出津、小木松波春日野飯田正院嶋島等にして、



長手岬以北は風濤險惡して航すべからず。且つ珠洲岬の一角遺崎は、風位の相互に遭ふを以てしかく名づけたりといふ。只、此等沿海諸小港の特色とすべきは、西風及び北風を支ゆることを得るを以て、山陰道各地、北國各地より北海道に航せる和船は、佐渡國の一港に達する以前に於て、必ず此等沿岸の諸小港に寄港し、以て風を待つが故に、其等の諸港には、和船は帆を張りて碇泊し、其の奇觀、他地方に多く見るべからざるものあり。輪島街道外浦街道の分岐點なる穴水より東に向へば、一里二十町にして、中居村あり。此の地は古來有名なる能登釜の主産地にして、村内に鑄工多し。これより能登富士の稱ある二子山の丘陵を横り、鶴川より海岸に出て、北東に向へば、二里二十七町にして宇出津港に達す。人口五千九百餘を有する大邑にして、港口は南に面し、東面に夷鼻と稱する一岬あり。南風の外能く諸風を保障するに足るを以て、船舶廢至す。地に、縣立水産講習所あり。小木港は内浦街道を東に外れたる一小港なれど、地に九十九灣の名勝あるを以て著はる。灣は小木村宇小木より、同村宇越阪に至る複雑せる灣曲を稱し、凹凸すると犬牙

の如し。灣中に鶴落島あり。されど其景平凡にして、甚だ意を惹くに堪へざるは、惜むべし。小木港は東に向ひ、東風の外能く諸風を保障し、和船の出入盛なり。地に、眞宗の巨刹法融寺あり。瓦葺海光に映して壯麗なり。松波より飯田に至る、其の間二里、歩々丘陵に凭り海澨に接して、其の風光の美、却つて前の九十九灣に優るものあるを覺ゆ。飯田町は此の地方唯一の都邑にして、人口二千餘を有し、地に珠洲郡役所あり。これより正院を経て、寺家に至れば、地は既に能登半島の東北端にして、遺崎金剛岬、祿剛岬等の諸岬犬牙出入して珠洲岬の絶端を爲し、見渡せば雲烟渺茫、人をして轉た荒涼の感の身に迫るを覺えしむ。地に、式内の縣社須々神社あり。崇神天皇御宇の創建にして、往昔は本郡の總社たりしものなり。祿剛岬に燈臺の設けあり。

### 富山縣

富山縣は北陸地方の殆ど中央に位し、東は新潟縣と長野縣とに接し、西は石川縣に隣り、南は岐阜縣に連り、北の一方は浩蕩たる日本海と其一大灣な

富山縣



地勢

面積人口

る富山灣とに面し、遙かに能登國に對す。縣廳を富山市に置き、越中國の全部、即ち富山市高岡市上新川郡中新川郡下新川郡婦負郡射水郡東礪波郡西礪波郡氷見郡の二市八郡を管す。東西二十三里餘、南北二十一里餘、面積二百五十九餘方里三九九七方軒戸數十四万五千餘、人口七十七万六千五百餘一里平均二九九六八人に當るを包容す。各郡の中、面積の最も大なる者は、國の東部に位する下新川・中新川の兩郡にして、前者は其の廣さ七十里を有し、後者は六十里を占む。而して此の二郡は飛驒山脈の連嶺なる高山峻嶺の盤踞する所なれば人口の密度も此地方にありて最も小にして、下新川郡の如きは一方里六百人を有するに過ぎず。上新川東西礪波の三郡面積亦大にして、三十方里乃至二十五方里を有せり。最も小なるは國の北部富山灣に瀕せる射水郡にして、方十五里を有するに過ぎず。されど人口の密度は反比例を爲し、射水郡の一方里の五千五百人婦負郡の一方里四千二百人を最も多しと爲す。蓋し本縣の文明は此等の諸郡に亘れる富山平野に最も發展せるか爲めなり。地勢は山嶽東西南の三面を圍み、殊に東部の一面は彼の飛驒山脈蜿蜒とし

て連亘し、立山山脈の一帶峻高にして殆んど三千米に出入し夙に本縣の名山として世に喧傳せらる。南は又飛驒の國境に接して、群山重疊し、唯神通川射水川の水路の其間に通ずるのみ。南西及び西部に至りては、加賀の白山より連れる山脈蜿蜒として南より北に國境を劃り、大門山・大倉山・太美山等を経て礪波山に至り、これより能登越中の境を成せる賚達山脈に接して海に盡く。而してこの三面の山嶽に圍まれて、中に豊饒十里米穀の富を以て名高き所謂越中五十万石の良好なる富山平野を開き、富山市高岡市の如き北陸屈指の都會亦皆な此の中にあるにありて、交通の主要路もまた此の平野の中央を西より東に横斷す。國の西部、東西礪波の地方は、富山平野其生業の發達稍趣を異にし此處には製糸製織の業大に振興せり。其の名邑には石動町・津澤町・福光町・井波町・城端町等あり。而して高岡市を起點としたる中越鐵道は此の間を通過して城端町に至れり。井波町城端町の東南にある一小山脈を越れば、庄川の沿岸に、平村上平村等あり。又利賀谷川に沿ひて利賀村あり、この三箇村を稱して越中の五箇山中と稱し、深山幽谷人跡容易に到らざるの地なり。



婦負郡と上新川郡とは神通川の長流を以て其の境と爲し、飛驒街道は概してこの岸に沿うて通し、其の間多少人文の發達を爲し稍繁華なる名邑の存在するを見れど、未だ海岸平野に於けるが如き著大なる都會の發達あるを見ず。楡原町八尾町等は其の重なるものなり。中新川下新川の二郡に至りては其背後の地は山嶽重疊して人烟甚だ稀に、唯海岸に沿ひ若干の小平野を剩すのみにして、主要なる市邑は幾かに此海岸近くを走れる北陸街道に沿ひて發達し、泊町三日市町魚津町等其の著名なるものなり。

氷見郡は郡の西北部に位し、寶達山脈の東麓富山灣頭に横はり、其の人文の多く發達せるは海岸地方にして、殊に魚業の利を多しとし、其中心として氷見の一市街あり。縣下の海岸線はこれより彎形を畫きて、先づ射水川の河口に、北陸有數の良港たる伏木港あり。新湊附近は卑濕地多く、放生津潟と稱する潟湖あり。これより以東富山平野の北縁をなせる地は平滑なる沙濱にして、岩瀬水橋等の港あれども全く大灣に暴露し、西北風を保障するに足らず。これを以て、此の間を航行する汽船は冬期は全く其の跡を絶つに至る。

この海岸は概して漁業發達し、其の産額また甚だ多し。而して魚津町滑川町等其の名邑たり。泊町以東、越後國との境界に至れば、飛驒山脈の末端、海に至つて、嶮崖絶壁を爲し、道路幾かに其の上に通じ、以て越後の親不知の險に至る。

縣下の交通を記すれば、西方加賀國より來れる北陸鐵道の鐵路は、有名な俱利伽羅峠を過ぎて、石動町に達し、これより稍北に向ひて、福岡に出て、遂に富山平野に出て高岡市を過ぎ、縣下最も豊饒にして且繁華なる地方を過ぎ、富山市に至りて終る。此の北陸線は越後國直江津の官線に早晚相連絡すべきものなれど、越中越後兩國境の山脈險峻にして、未だこれを完成するに至らず、従つて東方の交通は甚だ不便を極むるの憾あり。この交通線完成せば、縣下は更に一層の繁華を加ふるならんか。この主線を高岡市に於て交叉し南北に走れる一鐵道線路あり。即ち中越鐵道にして、起點を伏木町に置き能町高岡市を過ぎて、南は戸出油田出町高儀福野福光の諸驛を経て、縣下機業の盛地なる城端町に達す。又縣下主要なる街道は加賀國より來り、高岡富

交通

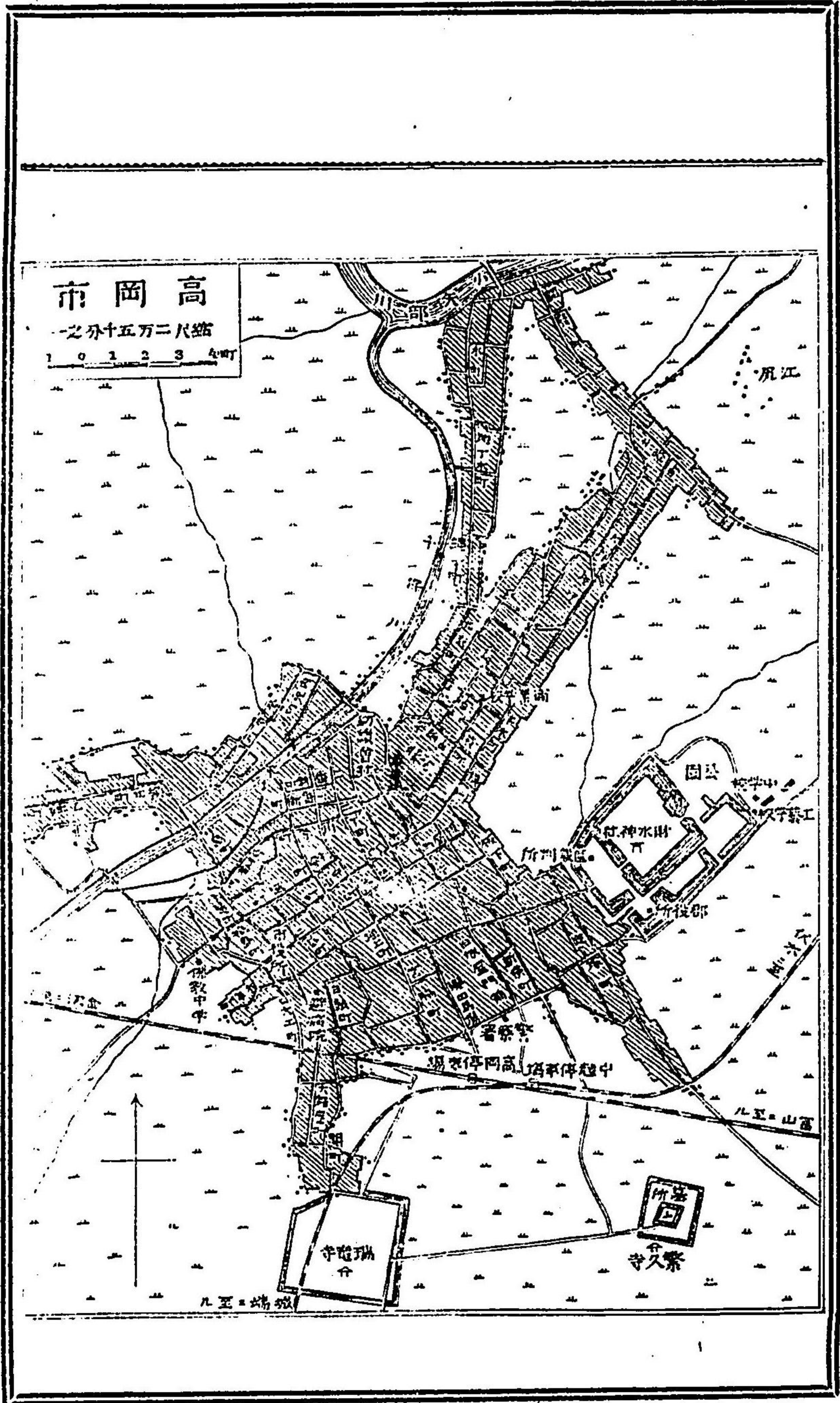
主要なる街道



石動町

山の二市を横貫し、水橋町より海岸に出て、魚津町より再び内地に入り、三日市町泊町に至りて越後に通ずる北陸街道を最主要路を爲し、其の他の道路は多くこの線より分かれて南方に通ぜるを見る。此等道路を西より數ふれば、先づ高岡市より戸出町、福野、福光、諸小市街を経て加賀國金澤に入る金澤街道、富山市より出て、神通川の流に沿ひ、萩島、八ツ尾、片掛等を経て、飛騨國茂住に至る飛騨街道、同じく富山市より太田、月岡、上瀧を過ぎて立山に至る立山登拜街道、富山市の東新庄より岐れて上市町に至る上市街道等その重なるものなり。海岸に瀕せる道路は伏木、新湊、岩瀬、水橋等を経て北陸街道に合す。又之より分れて北西能登に入る街道は伏木町より氷見町に出て、これより山地に入りて八代を過ぎ、遂に寶達山脈の一鞍部を横りて、能登國二の宮に至り、遂に七尾町に達す。

今之より更に詳細に本縣下を周りに観察せんが爲に、先づ北陸鐵道に由りて、源平の古戰場なる礪波山を越えんか。幾くもなくして石動町の小市街に達せん。石動町は西礪波郡第一の名邑にして、郡役所此處にあり。市街整正、



第三編 地方誌 富山縣



人煙稠密、戸數千八百人口八千四百を有せり。小矢部川は郡の山中より來りて、此の地に至りて漸く其の水量を増し、町の東部を掠めて、富山平野に落つ。これを以て此の地より高岡伏木に至る舟運の便大に發達し、白帆の影、柔櫓の音、其の附近に絶えず。又、此の地より北に指せば、天田越を越えて加賀國竹松に達することを得べし。石動町を距ること二里、福岡町あり。其の繁華石動町に及ばざれども、又、西礪波郡中の名邑たるを失はず、小矢部川の舟楫の便また前者に同じ。此の地は菅笠の産地として甚だ有名なり。石動福岡兩町の西北方、撫川の山中に瀑布多く、箒を此の地に曳くの客尠ならず。其の最も著はれたるものを別所瀧二の瀧岩尾瀧等とす。

かくて次第に東に至れば、平野漸く開けて、遂に高岡市の瓦葺を眼前に認むるに至る。高岡市は射水郡の西部にありて、小矢部川市の西より北を回り、東西十五町、南北二十二町、市坊の數二十五人口三万萬一千餘を有し、北陸屈指の都會たり。殊に、其の北方三里に、北陸道著名の要港伏木港を控ゆるを以て、商業殊に活潑を極め、米穀の取引盛にして且銅器の産を以て有名な

## 高岡市

り。其商業の盛なる、富山市の如き却て脚下に瞠若たるものあり。高岡停車場は市の南端にありて、其の傍に中越鐵道の停車場あり。前なる道路を一直線に北に向へば、二町餘にして北陸鐵道に出づ。停車場の附近に、馬場と稱する地あり。櫻樹を並植し、花時は美觀なり。市の最も繁華なるは小舟町通にして、この附近には大夏高樓櫓を並へ、老舗少からず。銀行會社等の大なるものも皆な此の附近にあり。官衙には高岡市役所射水郡役所地方裁判所支部區裁判所稅務署等あり。學校には富山工業學校中學校商業學校等あり。高岡公園は市の東隅にありて、舊城址を開きたるもの、一帯の高丘、松杉蒼然として繁茂し、周圍に昔のまゝなる殘濠を存す。此の城は慶長年中、前田利家の築きしところにして、かれは時運にして非ならば、この城に立籠り、礪波山の險を固め、以て徳川氏に抗せん覺悟なりしといふ。址に國幣中社射水神社あり。境内廣くして四季の觀に富む。此の他、高岡市の名勝には瑞龍寺あり。寺は市の南八町、射水郡下關村にありて、高岡停車場よりその森とそ

の堂宇の屋とを髣髴することを得べし。曹洞宗の巨刹にして、加賀の大守前



田利常が其の先世利長の菩提を修めんが爲めに建勸せしもの、寺域廣潤にして、殆ど四萬歩を占めたりと稱せらる。ことに、此寺の特色は其の建築の制を支那の臨安府なる萬壽寺に模したることにて、七堂伽藍頗る宏壯なり。維新前は毎歲前田家より吏を派して修繕せしめたりといふ。什寶には前田利常の寄附せる十三像の木像あり。前田利長の墓は、この寺を東に距る十町、田膳の中にあり。

市の物産

市の物産は銅器を第一とし主として日常實用の器具を造り其産額甚だ多し。又漆器は艶消の黒地に種々の色彩を以て花鳥を畫き雅趣に富み名聲嘖々たり。高岡市より中越鐵道によりて礪波郡に入れば、先づ戸出町あり。礪波地方に通ずる要衝に當れるを以て、商業活潑なり。人口四千餘を有す。戸出町の南二里餘に出町あり。人口四千五百を有し、其の繁華戸出町に越えたり、梅檀野は壽永二年平氏の先鋒平盛俊が木曾義仲の將今井兼平と合戦せる處にして、町の東方一里にあり。又その野の一部に長尾爲景の墓あり。臨濟の名刹藥勝寺は町の東南一里を隔てたる安川村にあり。

福野町

出町の次驛は福野町なり。此地は製織の業盛にして、福野木綿の名は縣下に著名なり。人口三千餘、附近に萬福寺と稱する眞宗の巨刹あり。福野町の東一里餘を隔て、井波町あり。城端町と共に縣下有名なる製織地にして、精好なる羽二重及び絹織物を産す。人口五千四百、商業頗る活潑なり。町に、縣下に著名なる瑞泉寺あり。眞宗大谷派の別院にして、明徳元年後小松天皇の勅を奉して綽如上人の建勸せるもの、常宇宏壯にして、輪奐の美縣下に冠たり。

井波町

鐵道線路は福野より稍西に向ひ、西礪波郡に入りて、福光町にその一驛を置けり。町は人口四千九百を有し、西礪波郡南部に於ける唯一の名邑なり。此地は製糸の業最も盛に行はれ、製糸場の大なるもの少なからず。蓋し此の町と城端町と井波町とは、縣下に於ける重要な製織工業地にして、之あるが爲めに、富山縣の製糸製織は敢て石川縣に譲らざるを得るなり。この町は北陸街道の石動町に三里を隔つるに過ぎず。

福光町

鐵道線路再び東南に向ひて、東礪波郡に入れる所に城端町あり。中越線の

城端町

シヤムナ



五箇山中

終端驛は此處にあり。町は人口四千三百を有し、東礪波郡役所あり。此の地の機業又盛大にして、製造家多く、羽二重平絹のごときは其の質最も良好にして産額亦少からず。此の地に、真宗の巨刹善徳寺あり。堂宇宏壯なり。

東礪波郡の南方、庄川の上流は、山嶺重疊して、往々人跡の至らざる所あり。而して井波町より此山谷の間に入れば、村落は庄川の流域に沿うて點々發達し、平村上平村の名あり。又、利賀谷川に添ひて利賀村あり。此三箇村を總稱して、五箇山中と稱し、平家の遺族此處に隱栖せりとの俚傳あり。鱒生糸石灰紙等を出せども、瘠地にして米を産すること少し。この山谷には、鐵鎖を以て釣橋を造り、交通の便を計るもの六ヶ所の多きに及べり。以ていかに其の地の深山幽谷の間に介在せるかを知るに足るべし。天柱石は平村字松尾にありて、庄川の岸に聳え、其高さ二十丈、幅二十五間あり。溪流激怒して此の間を遶り、松樹亂立、宛然一幅畫中の景なり。字下梨にある釣橋も亦奇觀なり。

新湊町

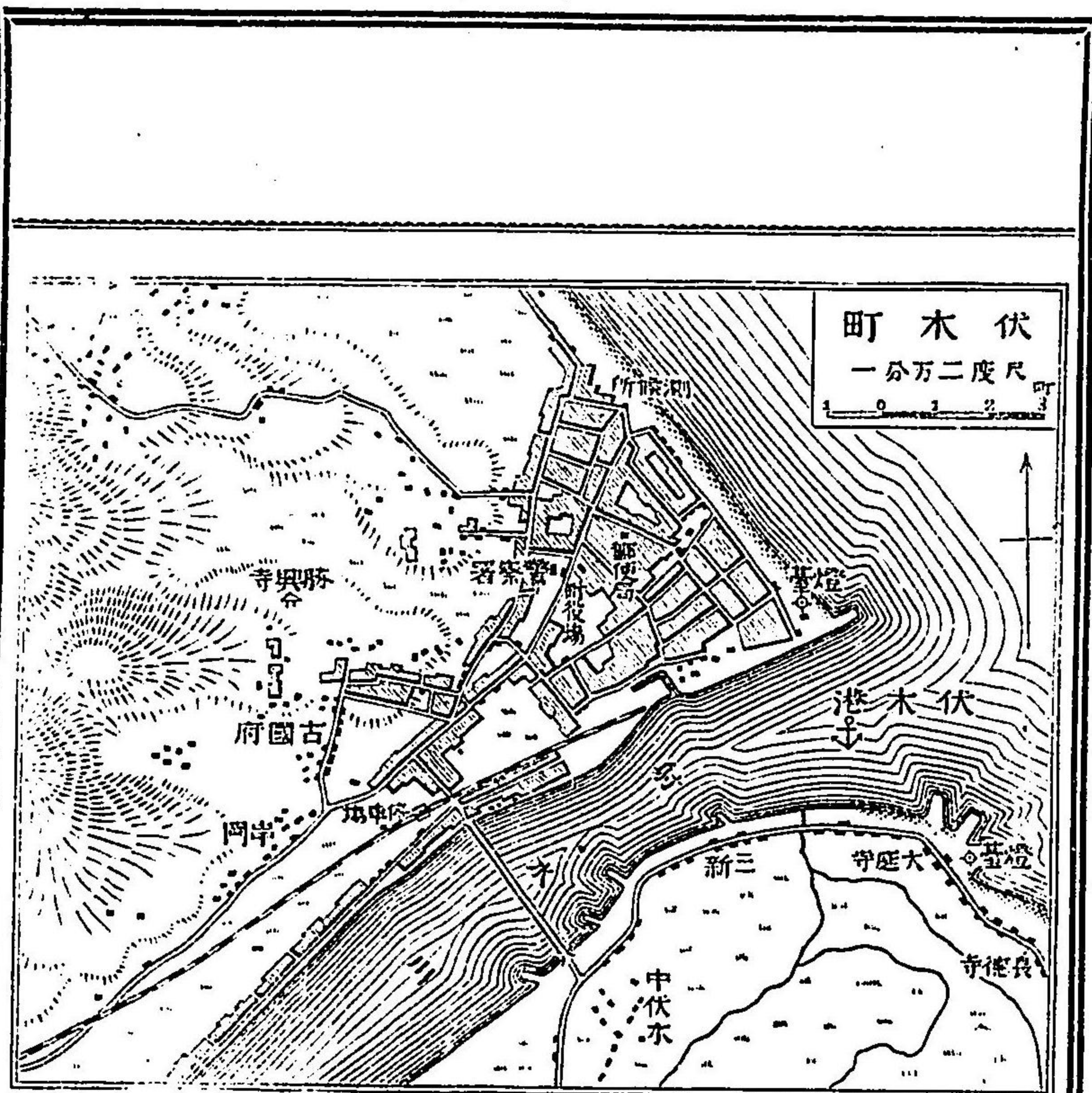
更に高岡市に戻れば、その東北二里餘の海濱に新湊町あり。戸數二千餘人

伏木町

口一萬八千餘を有し、漁業の盛なる地として有名なり。鹽鮒と干鰯とはその特産なり。新湊町と堀岡村との間に放生津潟あり。周圍一里二十町、純然たる潟湖にして、海と相隔てたること、幾かに數町、其間には青松亂立して、風光の美狀すべからざるものあり。

新湊町の西、射水川を隔て、伏木町あり。戸數千二百、人口八千七百餘あり。港は富山海内の西端に位し、港灣自然の形勢は佳良ならざるも縣下第一の港として知られ、中越鐵道は其の終點を此の町に置きたるを以て、高岡市富山市等縣下の重要なる市邑との交通頗る便に、従つて百貨常に埠頭に堆積し、船舶の帆檣港内に林立す。旅客は此の港に入りて、その河岸に倉庫の多く連れるを見るなるべし。これ、實に越中の産米を各地に輸出する時の用に供するものにして、其の五十万石の米穀は往時は一にこの港の水運に由らざるを得ざりしなり。今日は其の一部は陸運に由りて各地に輸送せらるゝに至りたれど、猶其の大部分はこの港より運輸せらるゝを常とす。定期汽船航路は沿海の航路に従事する者にありては、能登の海岸宇出津港より七尾港を経て、





本港に至り、これより越中の海岸の各所に寄港し、越後直江津港に至るものあり。富山直江津間の鐵路開通せざる中は、越後地方に赴く唯一の交通路なるを以て、風濤險悪なるに拘らず、百貨行客常に輻湊す。又、日本郵船會社にも此の地に支店を置き、西廻りの汽船をして、往復ともに寄港せしむるあり。此他此地方の水夫の和船を載して北陸沿岸より北海道に至るもの少なからず。これ本港の七尾港と共に北陸道屈指の繁華を占むる所以なり。中越鐵道の停車場は

有磯海

町の東南にありて、街路は之より西北を指し、頗る繁華般賑なり。町の北端に測候所あり。勝興寺は町を西に距る十町餘の處にありて、嘉祿年間順徳天皇第三皇子彦成王が始めて佐渡國に創建せられしを、天正九年、此處に再興せる者、維新前は寺領八万石を有して、本山に同じき寺格を有せる巨刹なり。地、高丘を占むるを以て、海山の眺矚實に附近に冠たりといふ。縣社氣多神社は、此町を距る西方一里餘なる一の宮にありて、養老元年創建の古社なり。伏木町の西北一里の海岸を總稱して、有磯海と稱し、海岸一帯の地奇岩怪石に富み、怒濤掀翻、風景頗る眺望に富む。地を岩崎と稱し、昔大伴家持の遊覽せし所として有名なり。二上山は射水氷見郡の間を劃れる丘陵なり。氷見郡は縣の西北に位し、全く縣下の各郡と獨立せる區域を占む。郡の西南部は寶達山脈重疊し、北部は石動山脈これと相接して連亘す。此兩山脈次第に東南に低夷して、海岸に近く一平地を作る。即ち氷見町のある處なり。道路は主要なるもの二、一は西走して寶達石動山の低所を越えて能登の羽咋町に達し、一は西北走して荒川越を越え、七尾港に至る。



氷見町

氷見街道は伏木より二上山の東端海岸を過ぎ、有磯海の風光の美なるを賞して北に進むこと二里半、氷見町あり。町は海に瀕し、半漁半商の都邑にして、人口一万三千餘を有せり。漁業盛にして、鯨鰯等の收穫最も多し。町の西南に十二町潟と稱する潟湖あり。周圍一里三町餘にして、布施川尻川の二水を容れ、湖脚は氷見の市街を貫きて海に入れり。氷見の海岸近く唐島あり。風光佳絶なり。これより海岸を北にたどれば三里にして能登の國境に達す。阿尾村の近海を英遠浦といひ、それより以北を灘浦といふ。此浦には陀ヶ島佛島等の島嶼相連りて、風光の明媚なるところ尠ならず。(第三十七圖乙)

更に高岡市に戻り、北陸街道を進めば、一里にして大門新町あり。人口二千を有する一名邑たるに過ぎず。縣下の大河庄川は其の中央を流れ、大門橋と稱する一大橋を架せり。大門より小杉町に至る間の南方に横れる平野は往昔三島野と稱せられたる歌の名所の一にして、爲家卿は「みしま野やたる」は結ふやかたをの鷹は眞白に雪になりつ」と詠ぜり。即ち鷹野鶉野として有名なりし地なり。野の西南一里櫛田村に櫛田神社あり。往古よりの名社にして、

小杉町

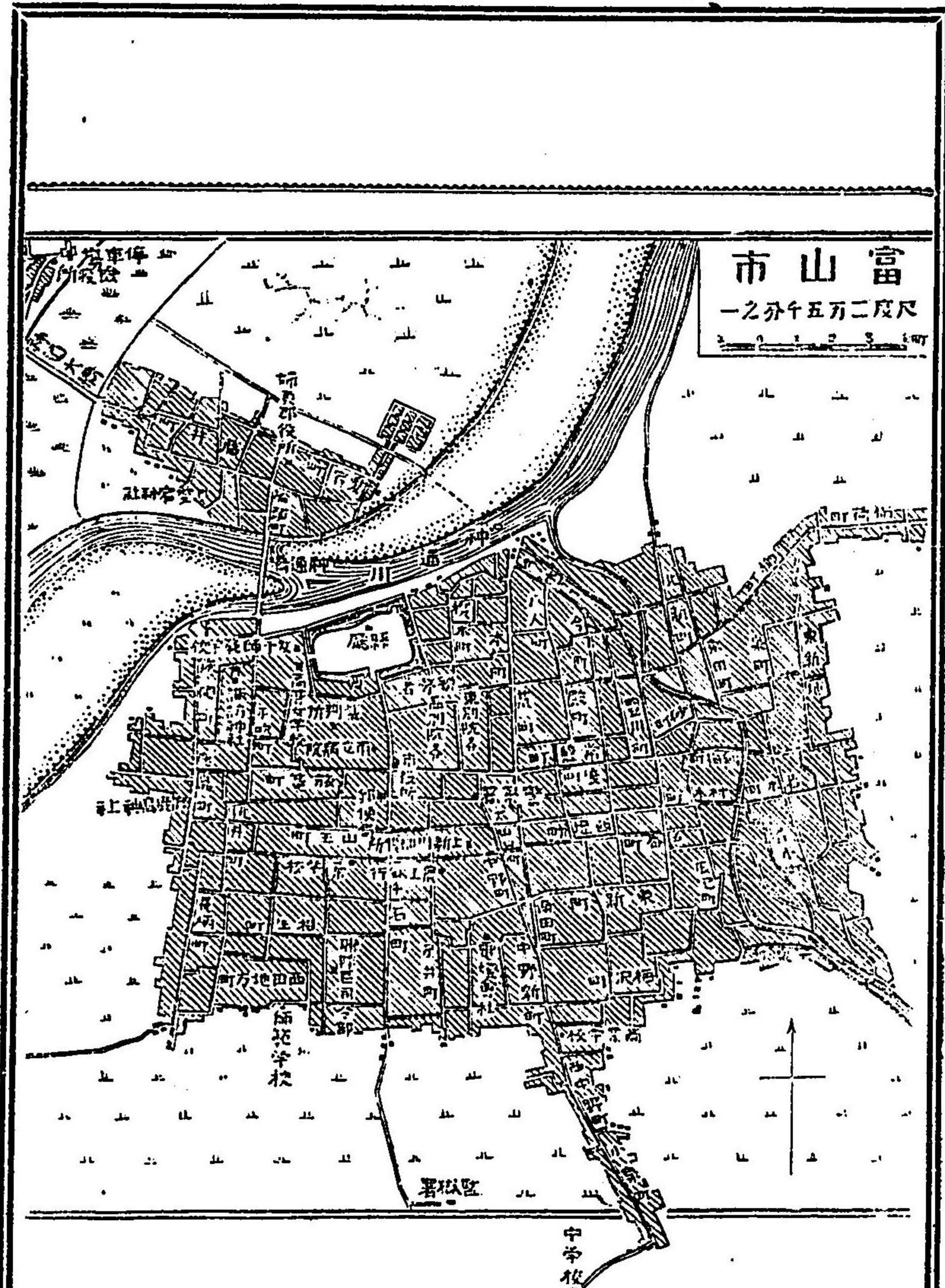
大伴家持が古能久禮乃尾山と詠ぜしは此の山なりといふ。地幽靜にして、避暑に適す。小杉町は富山高岡間の要驛にして、人口五千餘を有し、繁華なる都會なり。此の地に小杉焼と稱する陶器あり。天保年間に於ては盛に製造せしが、今は衰頽せり。

旅客は高岡より此の平野を進むに當りて、田野の處々に、檜榛等の雑木の林の幾箇となく散在して、この渺茫たる廣野の眺望を碍ぐるを見るならん。これ富山平野の特色にして、傳ふる所によれば、前田利長が幕府に對する政略上この林を造らしめたるなりといふ。この間を汽車は蕪々として東を指し、進むこと三里餘にして、遂に縣下の主腦たる富山市の瓦葺を眼前に見るに至る。

富山市

富山市は東西二十五町、南北二十町、市坊の數六十餘戸數一万二千餘、人口五万六千餘を有し、北陸道中、金澤市新潟市に次ぐの都會たり。神通川は遙かに飛驒の山中より來りて市の北端を流れ、東岩瀬に至りて海に注ぐ。此の地は天正年間、神保某始めて城を築き、後、佐々成政の越中を領するや、





更に之れを増築し、以て其の居城と爲せり。後、成政豊臣氏に抗して克たず、終に前田氏の領に歸す。利家其の孫利次をしてこれに居らしめ、爾來二百三十年、前田氏世々これに居る。官

線北陸線の終端驛富山停車場は市の西北端、神通川の彼岸にありて、市の里程元標まで二十七町を隔つ。停車場を出れば、治水の必要上開鑿したる神通川の一支流馳越川に一大橋を架す。この川は平時は水無きも、秋季に至れば濁流岸を嚙んで光景凄慘を極むと聞く。馳越川より神通川に至る間は、富山市の出町とも稱すべく、藤井町愛宕町船頭町の目あり。愛宕町に、婦負郡役所あり、藤井町に愛宕神社あり。船頭町を過れば、神通の大河碧を湛えて西より北に流る。其處に架せられたる神通橋は宛として虹霓を架したるか如く、人をして一種壯快の感に撲たれしむ。此の橋は舊時は六十四隻の舟を連ねたる舟橋なりしを、明治十五年始めて今の木造橋に改築したるなり。橋を渡れば、廣潤なる街道北より南に通じ、旅籠町に至りて東に折れ、以て市の幹線路たる繁華の區をつくれり。舊富山城址(第十八圖乙)は神通橋の東三四町の處にありて、神通川の清流に枕めり。四面に殘濼をとどめたれど、地形平夷にして、城址の觀を呈せず。今、この中に、富山縣廳あり。此外部に、高等女學校女子師範學校あり。地方裁判所の宏厦また其の附近にあり。千石町通



には市立病院富山市役所等の宏厦相接し、町の一角には建築壯大なる郵便局あり。税務署は縣廳の南にあり。千石町附近に上新川郡役所農工銀行藥學校等あり。此の地に有名なる賣藥行商の大問屋は所々に散在し中には大なる工場を有するものあり。其の他相生町に、聯隊區司令部あり。西田地方町に、富山縣師範學校あり。山王町通より太田口町を南に折れたる街路は中野町にして、飛驒街道を爲し、また頗ぶる繁華の趣を呈せり。この街路の東、西中野町に商業學校あり。又その街路の盡頭に、富山縣第一中學校あり。幹線路なる北陸街道は旅籠町通より東を指し、常盤町を経て、右折し、豊川町北新町柳町等を経由して新庄驛に向へり。柳町に、於保多神社あり。縣社にして菅原道真を祭る。建長の頃、畠山忠顯なるもの比叡山座主より菅公の尊影を得、歸國の後、新川郡の淨禪寺に安置せしを、後年前田利次祠を寺中に建て、慇懃にこれを祀り、遂に此處に移せしものなり。日枝神社は舊城内にあり。市の總鎮守にして、俗に山王權現と稱し、祭日には神輿渡御の儀式も備りて、市中般賑を極むるを例とす。寺院には、五番町に光嚴寺あり。寺は長祿二年

承陽大師の建立にして、初めは増山城下にあり、七堂伽藍悉く備はり、結構の莊嚴國中第一と稱へられしも、一たび兵火に逢ひて全く衰頹せり。されど慶長十年此の地に移されて、藩主前田氏の歴代の菩提所となりしより、再び舊觀を恢復し、今、曹洞宗の巨刹として有名なり。其の他梅津町に日蓮宗の巨刹大法寺あり。東西本願寺の別院は相並びて常盤町通にあり。櫻木町は舊藩主の別莊千歳御殿のありし地、今は毀たれて其の影を見ず。

富山市は明治三十二年八月の大火に由り、全市殆ど灰燼に歸し、數年を経るも未だ舊觀に復する能はず。金澤新潟等の市街に比して、多少の遜色あるは蓋しこれが爲めなり。市の物産は古來賣藥を以て著はれ、越中富山反魂丹の名夙に世に高く其の行商の足跡は海内に遍ねく、如何なる僻販と雖も、富山賣藥商の名を知らざるものなきに至る。其の他漆器生糸もまた多少の名聲あり。神通川には鮭鱒鮎を産す。

市の近郊の勝地に就きて見んか。停車場の西一里に、吳服山あり。山の北には北代の梅林ありて暗香疎影の趣を盡し、東には五福の桃園ありて、紅霞



八尾町

駿騷の致を極め、眺望極めて佳、悠遊一日の閑を銷するに足るべし。傳へ言ふ、此の地は天正の昔、豊臣秀吉が佐々成政を富山城に攻めんとて大軍を率ひて陣せしところなりと。此の山の北端に富山藩主前田氏歴代の墳墓の地あり。俗に長岡御廟といふ。古松老杉鬱々として晝猶暗し。富山市の西南二十町許、神通川に枕みて鶴阪神社あり。崇神天皇の時、大彥命が勸請せしといふ古社にして、往古より此の社にて行へる尻打祭は、近江筑摩の鍋冠祭などと共に日本五祭の一に數へられたる面白き儀式なりしが、惜い哉今は絶えたり。

富山市より出て、南方、飛騨國に入るの道路は西笹津楡原等を経て、船津に出づるを主路とし、之と相並びて神通川の西岸に沿ひ、八尾町を経て、婦負郡の山中に入り、白木峠を越ゆるを副路と爲す。八尾町は、郡中南部の一邑にして、人口七千五百を有し、稍繁華の趣を呈せり。此地は製糸の業盛にして、製糸所多く、生糸蠶種紙柿等を産す。また八尾町と富山市との別路に當り、長澤村に、文武天皇の勅願所として其の勢力一時北國を歴したる各願

上瀧町

寺あり。八尾町の東南に當れる山地は概稱してこれを野積谷と言ひ、往昔より國主守護等の支配を受くることなく、直ちに朝廷の管轄に屬し、居民は歲毎に、糸綿蠶等の類を貢となして、道中傳馬等の驛符を賜るを例とせり。これを以て居民は今日猶其の種の職業に従事し、産物多し。八尾町の西一里餘に、山田温泉あり。鹽類泉にして山田川の沿岸なる第三紀層中より湧出し、其の浴客の多きこと、縣下第一なりといふ。飛騨街道の本路をたどれば、富山市の南三里、合田村に温泉あり。其の設備山田温泉に及ばざれども、また一浴するに堪へたり。笹津は富山平野より飛騨高原に入らんとする間に位し、驛外數歩、神通川の濼々として流るゝを見、稍繁華の邑を成せり。これより楡原を経て、飛騨の國境に至る、僅かに一里餘に過ぎず。

富山市より東南に岐る、一路は即ち立山登拜路にして、先づ第四紀新層の平野の間を行くこと三里半にして上瀧町に至る。町は常願寺川の飛騨山脈の山地を出て、富山平野に落ちんとする一地點に位し、飛騨山脈の空翠の既に衣袖に滿つるを覺ゆ。登拜者はこれより常願寺川の溪谷を溯りて立山に向ふ



なり。

立山は本地方に於ける著名なる高山にして、加賀の白山と共に其の名を齊うす。其の連峯は本邦に於て最も峻峻なる飛驒山脈の一部を爲し、峻嶺群峯附近に續出して、其の山容の偉大なる、多く他に其の比を見ず。最高の處は二千九百三十六米を有し、淨土山雄山大汝山別山等より成り、劔ヶ峯の高峯更に其北に連り、山上には盛夏と雖も猶白雪を残す所あり。立山連嶺の東部には、黒部川の一大峡谷を隔て、鹿島大嶽鹿島鎗ヶ嶽の連峯巍々として天に聳え、白馬嶽に連るを見るべく、之を天下の偉觀と稱するも、誰か其の溢美を嗤ふものあらんや。されば昔より之を神靈視し、山上に社殿を營み、毎年夏期登攀するもの亦少なしとせず。遠近より來れる白衣の行者亦陸續として踵を接す。

立山に登るものは上瀧町に於て常願寺川を渡り行くこと數丁にして岩峠イロツツあり。立山神社の攝社を鎮座し大なる一の華表あり。雄山神社の扁額は先づ人をして山氣の身に迫るかことくなるを覺えしむ。これより三里餘、絶えず

常願寺川の岸に沿ひ、左に布倉山の突兀たる姿を望み進めば、千垣に至りて、龜谷川の東南より來りて會するに逢ふ。蘆峠アヲツツ寺は已に之れより遠からざる所にあり。この地は俗に麓の宮と稱し、攝社の一なり。登山者は多くは此處に宿泊して、神祓を行ひ、案内者を雇うを常とす。昔時の寺坊は今旅店となれるを以て、其の建築の宏壯なるもの多し。蘆峠寺を發して、猶溪流に沿うこと一里、稱名川を渡れば、小屋あり。茶菓を賣る。これを過れば材木阪あり。奇岩錯出風景頗る奇なり。此の阪は比較的急峻にして垂直の高さ五百米ばかりなり。これより路は馬背のごとき山嶺の間を行く。此の間は密樹日を蔽ひて、殊に立山杉の大木森々たる一大奇觀なり。猶行くと二里餘にして、前に幅員二三里に亘れる廣潤なる平野の展開せらるゝを認む。これ所謂彌陀ヶ原にして、到る處珍奇なる高山性の草花に富み、冷氣肌に迫りて、身の既に遠く俗界を離れたるを覺ゆ。此地海拔二千米に及ぶといふ。此平を進むと一里半餘にして、追分の岐路に至る。右すれば立山温泉に至るべく、眞直に進めば天狗平を経て直ちに室堂に至るべく、室堂までは一里餘に過ぎず。



室堂は巨大なる木材を構へて造れる大なる宿舍にして優に百餘名を宿せしむるを得べし。周圍は岩塊を以てこれを圍めり。此の室の神官は夏時特に蘆峴等より出張するを例とす。而して登山者は此の堂内に一夜を過すことを得べし。有名なる地獄谷は堂の北八町にあり。路の左右に翠ヶ池御厨池あり。水色藍の如し。此の附近噴汽孔多く迷信者の所謂立山地獄なるものにして、地上の裂罅より水蒸汽亞硫酸瓦斯硫化水素瓦斯を盛に噴出し、硫汽盛に鼻を撲ちて、地下には沸々として一種厭ふべき沸騰の聲を聞く。而して此等の硫汽洞には湯屋地獄鍛冶屋地獄團子屋地獄染物屋地獄等の名あり。旅客一度足を此地に入れんか、其の原因は火山作用にあるを知ると雖も、猶一種恐怖の念に打たるゝを禁ずる能はざるものあり。

室堂より東南に向ひ次で東に轉すれば雄山の絶巔に至る。路最も峻峻にして、岩石磊塊、殆ど歩を着し難し。此間約半里にして頂上に至れば、雄山神社の本社あり。木造の小祠にして周圍に石を繞らし、中に手力雄命大己貴命を祀る。登山者は五の越にて草鞋を脱し、徒跣にしてこれに賽するを式とす。

一拜して去り、更に山頂に立ちて願望すれば、天下の大觀は實に一眸の中に集まり、其眺望の濶大にして雄偉なる、殆ど人をして忘我の境に遊ばしむ。(第四圖甲)見よ北は白馬嶺大蓮華小蓮華の高嶺雲漢を摩して聳え、南は飛驒山脈蜿蜒として遠く連り、殊に槍ヶ嶽の尖頭は高く群峯の上に抽立し、其の南には遙かに乗鞍御嶽の高嶺を望み、駒ヶ岳の崖巖を仰ぎ、東は信濃の戸隠より越後の妙高燒山に及び、東南には立科山より信甲の境なる八ヶ岳を見、天際遙かに東海の富岳を認む。且飛驒の山地は指願の中にありて、その眺矚の快、蓋し他に見る能はざるものあり。淨土山の山巔にも一小祠あり。雄山より絶巔を傳ひて北に向へば。大汝山は別山と相連り、崎嶇凹凸殆ど足を着くべからず。別山の山巔にもまた一小祠あり。劔の峯は別山と相對して北方に聳え、溪間には千古溶けざるの白雪を藏す。

絶巔の遊覽を了れば、歸路は別山より雪上を歩し、地獄谷の傍に下り、室堂に至るべし。室堂より下りて、追分に至り、それより南に入れば、一里餘にして立山温泉に至るべし。此の間の下り阪は極めて峻急にして殆ど壁立せ



黒部川の峡谷

り。温泉(第三十七圖甲)は常願寺川の水源輝石富士岩の裂罅より湧出し、浴舎陋穢夏時の雑沓名状すべからず。これより常願寺川の谷に沿ひて下る路あり。四里にして蘆暉寺に至る。此の路は佐々成政が會てひそかに信州に出てたりといふ佐良越なるものにして、立山温泉より東に一里半、大頭嶽の北面に佐良嶺あり。此を越ゆるを以て其の名を得たるものなりとの俚傳あり。かくて此の峠を越えて淨土山北麓を下り、更に一昇一降して西黒部嶺に至る。此の嶺を越えて下れば、黒部川の峡谷は南より北に延び、一條の奔流雪を噴きて流る。これ即ち十里の間人跡の至らざる地を流るるを以て有名なる黒部川の峡流なり。この川には針金を兩崖に結び旅客は之に吊せる板に乗り漸く對岸に渡るなり。(第五圖乙)針木澤と種する密樹叢生せる暗黒なる間を過ぎて、二里にして針木嶺に至る。登路頗る險なり。この嶺上は信濃と越中との境なり。これより高瀬川の峡谷に出て、信濃國安曇郡の大町に出づるに、里程六里餘なり。道路は頗る險にして導者なくしては至るべからず。此の道路は立山登攀の裏口と稱する者にして、途中山水の奇景少からざるも、十數里の間、溪山深奥

東岩瀬町

なれば、この道路を越ゆるものは案内者に數日の糧を負はしめて、山中に露宿するの覺悟を要す。更に富山市に戻り、これより神通川に沿へる街道を北に進めば二里半にして海濱に至る。神通川の河口右岸に東岩瀬町あり。富山灣頭の港市にして、沿岸航行汽船の發着所なり。町の附近里許の沙汀は沙白く松青く風光の明媚なるを以て有名なり。

上市町

富山市より北陸街道を東に行くこと一里許にして新庄町あり。これより東方三里にして上新川郡中部の名邑上市町に達す。町は上市川の西南岸に位し、近郷物貨集落の中心地を爲せるを以て商工の業稍と盛なり。其の東南二里を隔てたる山地に、立川寺あり。曹洞宗の巨刹にして、應安年中大徹禪師の立山權現の靈示によりて開きたる伽藍なりとして名高し。毎年孟蘭盆に際し、禪師の墓畔の松に燈明を點することあり。又其の山間大岩村に日石寺あり。境内の景幽邃なり。不動堂の傍には一瀑布ありて、夏時遊客絶えず。

新庄町より北陸街道は東北に向ひ、金泉寺より常願寺川の流に沿ひ、遂に



水橋町

海岸の一名邑水橋町に達す。常願寺川に架したる常願寺橋は長さ百九十間を有し、縣下に於ける名橋の一なり。これを夾んで町を東水橋西水橋の二に分ち、合せて人口八千二百餘を有せり。

滑川町

町の海に瀕せる處は、純然たる漁村を爲し、陋巷魚腥の氣鼻を襲ふ。沿海を往復する汽船の發着所あり。水橋町より上市川を渡れば、滑川町は長く海岸に連りて發達し、人口一万餘餘を有し、半漁半商の一邑を成せり。

魚津町

かくて猶海岸に沿ひ、行くこと一里半にして、早月川の東南より來りて海に入るに逢ふ。川に長さ百四十八間を有する早月橋を架せり。これを渡れば魚津町あり。町は縣の東北地方に於ける名邑にして、人口一万四千餘を有せり。地に、下新川郡役所區裁判所中學校等あり。海陸の運輸頗る便にして、商工及び漁業甚だ盛なり。名産に漆器珊瑚蝦等あり。此の沿岸には毎年春夏の際、屋氣樓を現し、旅客往々にして其の奇觀に接することあり。伏木直江津間を往來する汽船は日々この地に寄港するを例とす。

これより東北の海岸は、北陸道中有名なる漁網地にして、鯛鮪鰯鳥賊等の

産額甚だ多し。

三日市町

國道はこれより稍、海岸を離れ、片貝川の灌漑する平野を過ぎ、二里半にして三日市町に至る。三日市町は街道の一驛として發達したる小邑に過ぎざれども、地に木綿を産するを以て稍、人に知らる。北陸街道は此の地に至りて二路に岐れ、一は東して浦山村を經、黒部の峽流の平野に落ちんとする地點を横斷し、北折舟見杉森寺の諸小驛を過ぎて泊町に達し、一は東北して黒部川の下流に架せる櫻枝橋を渡り、入膳町を經て同じく泊町に至る。而して前者を北陸上街道といひ、後者を北陸下街道といふ。

愛本橋

上街道に、愛本橋の勝あり。橋は下立村と愛本村との間に架せるもの、黒部の峽流、此處に至りて漸く平野に落ち、附近の風景甚だ秀絶なり。又、その橋は構造の巧なるを以て聞ゆ。これより黒部川の上流の峽谷は、深奥にして数十里に達し、遠く立山の背後より飛驒に及べり。而して此の谷に添へる山路は崎嶇として、七八里に及び、黒薙川の黒部川に會湊する地點に、黒薙温泉あり。これより山は益、深く、笹平、甚平出平等の峽隘を過ぎ、二里餘にし



## 泊町

て鐘釣と稱する地に出づ。沿岸に温泉湧出し境は頗る幽邃を極め、殆ど仙境に入るの思ひあり。蓋し温泉にしてかくの如き深山幽谷に位し、且つ浴客多く風景に富めるは、他に多くその例を發見せざるべし。

●泊町は縣下の最東北に位せる一名邑にして、上下北陸街道の衝に當り、黒部川の灌漑する平野の集落地點なるを以て、商業活潑に家屋また整正なり。人口五千四百を有す。町の南東三里餘、小川の上流に小川温泉あり。山中の温泉なれど、浴舎の設備稍、完くして、浴客少からず。

之を要するに、富山以東の地は、高山峻嶺其の南東を劃り、その山中に水源を有する常願寺川早月川片見川黒部川小川等の諸川は皆な海岸地方に發達せる平野に向ひて流出せるを以て、一たび雨期に際すれば、激浪滔々として田野に漲り、咆吼怒號、巨岩大石を流し、その河幅の廣きものは殆ど數町に及ぶものあり。これ街道に巨大なる橋梁の多く、治水上困難なる地方として名高き所以なり。富山直江津間の鐵道の當然敷設せらるべくして、未だ敷設せられざるも、又これが爲なるべし。



欠

MISSING



飛山

五智國分

として著名なり。又、此地は寶曆年間地震の爲め背後の山岳崩壊して全村これが爲に埋れたるところ、楠南溪の名立崩の一文を讀むものは、當時の状況の一斑を知らん。

名立川の上流に、飛山と稱する地あり。石油坑少なからず。又天然瓦斯の噴出する處ありて、庖厨用に供するものあり。

名立町を過れば、鳥首崎海中に突出せり。岬に添うて海岸をめぐり、有間川の流を渡り、長濱を經れば、往昔越後國府の所在地なる五智に達す。地は直江津を距る二十町、高田町を距ると二里餘にして、頸城平野を一眸の中に収め、西は山を負ひ、北は日本海に臨み、風景甚だ佳なり。之を以て近來別墅を此間に構ふるもの多く、旅店また尠なからず。夏時は海水浴場を開き、來り遊ぶもの多し。天平年間の遺址なる國分寺(第三十九圖甲)は村の南隅にありて、古は堂宇壯麗なりしも、今は三重塔、經藏、仁王門を存するのみ。仁王門に安置せる仁王の像は行基の作なりと稱す。境内閑雅にして、櫻樹楓樹に富み、賽客多し。境内に親鸞上人の遺蹟たる竹内御影堂あり。この寺の西方の山麓



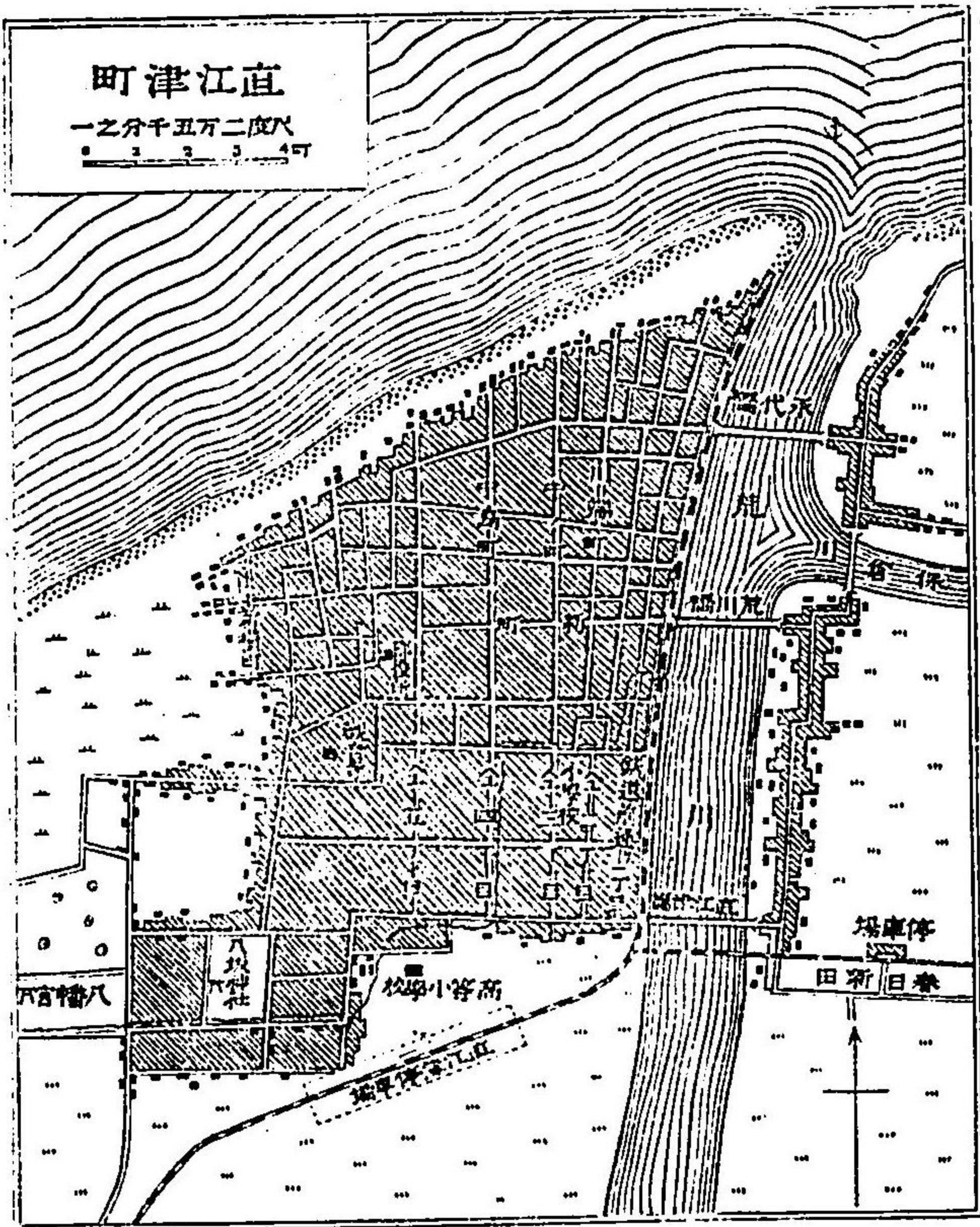
春日山

に、居多神社あり。縣社にして、片葉の蘆の奇觀あり。また、其附近に姥嶽明神・小丸山西本願寺別院等あり。虫生鑛泉は郷津灣の西海岸にあり、單純泉にして、常に多少の浴客あり。其海濱に二つ栗岩の奇景あり。

これより本街道を離れ、高田町に通ずる街道を南に傳へば、一里半にして、春日山に至る。此地は越後の英雄上杉謙信が城を構へし所にして、今猶其跡を存せり。信越鐵道の旅客が高田直江津間に於て西方に蜿蜒たる丘陵の中、其頂上平坦老松叢立堡壘の跡とも思はるるものを見るは即ち是なり。山に春日山神社あり、謙信を祀る。山麓にある林泉寺は曹洞宗の巨刹にして、寶徳元年長尾高景の創建にかかり、當時の遺蹟の一なり。昔は頗る壯觀を極めたりしも、弘仁四年池魚の災に罹りて、今は本堂庫裡鐘樓をとゞめたるに過ぎず。寶物には當年の文書多く、上杉謙信の自書贊一幅は最も珍重すべきものと稱せらる。遊客一たび此地に遊ばば、當年の壯圖を追想して、願望去るに忍びざるものあらん。

春日より東すれば一里餘にして、高田町に達すべし。されど北陸道をたど

直江津町



りて、先、直江津町を記さん。

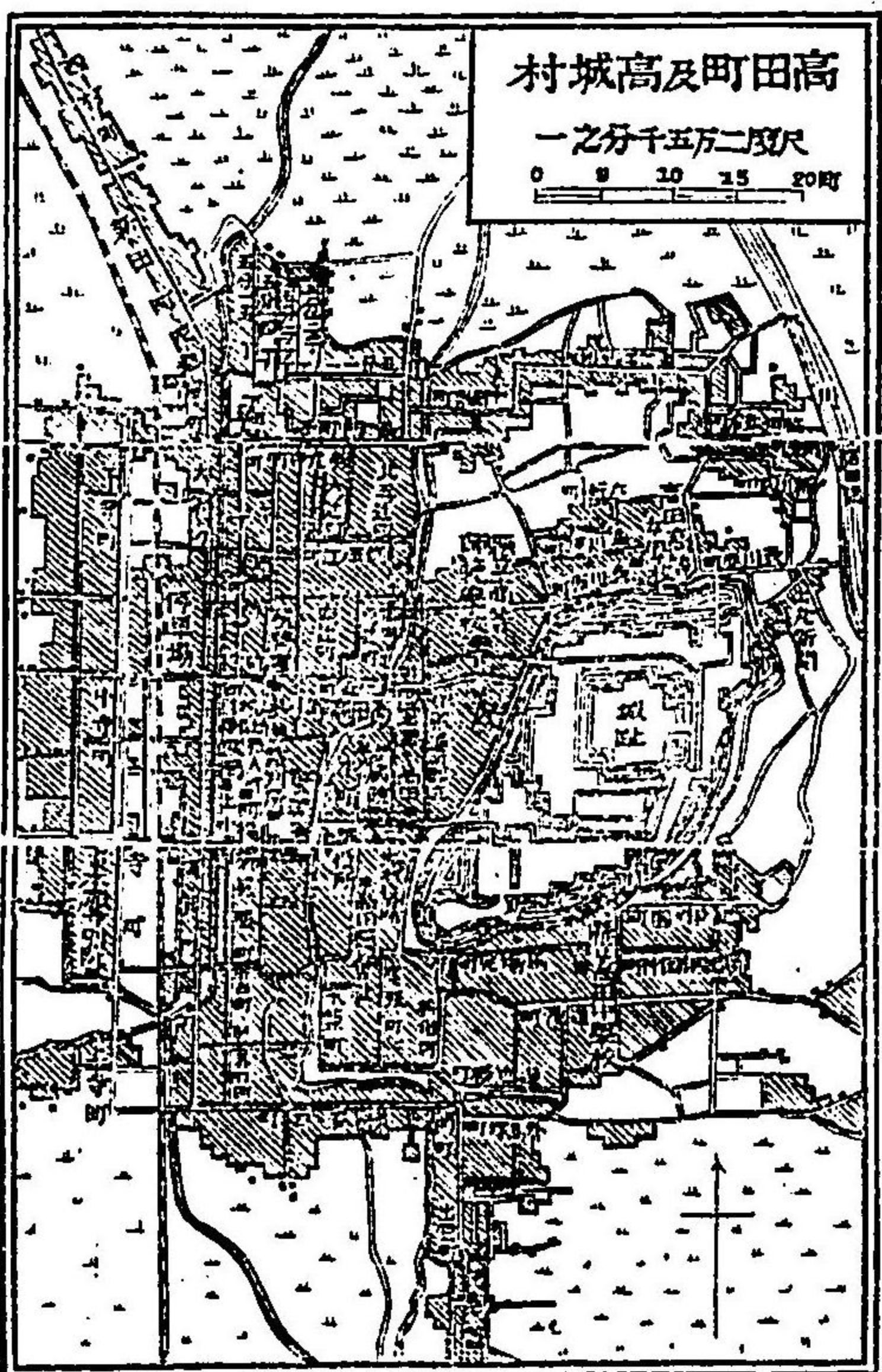
直江津町は日本海に面し、荒川の河口に位せる名邑なり。東西十二町、南北六町、戸數三千餘人口一万一千餘を有し、區裁判所支部長野大林區支部商業會議所等あり。其港は自然の形勢毫も良好ならず、其海岸は一帯砂濱にして別に防波堤棧橋等の設備なく風



波穩かなるの日に限り汽船は其沖合に寄港して、緩かに貨客の乗卸を爲すに過ぎず、唯小形の日本船は荒川に入り來りて碇泊するものあり。海上の交通に於ては、日本郵船會社の西廻汽船の他に、近海の定期航路に越中伏木港との間、朝夕二回汽船の往復あり、又佐渡に渡るべき定期の汽船あり。此地は頸城三郡の貨物の集散地のみならず、信濃地方に輸出する物資供給の要樞に當れるが爲め、漸次繁盛の度を増加し、陸運水運相伴ふて至大の發達を爲すに至りしなり。信越官設線の終端停車場は町の東南にありて、荒川の流に近く水上よりの荷揚卸所の設けありて、海陸の交通の便を謀れり。古の名古の繼橋はこの荒川に架したるものと稱し、其の位置は停車場と寄町との中間にありたりと傳ふれど、桑海の變、今は尋ねるに由なし。今、此川に荒川橋永代橋の二橋を架せり。又、其上流二里に應化橋あり。府中八幡は大字八幡にあり。往昔國府の府中にありたるより其名を得たり。社前に上杉謙信の自書せる神額あり。其他泉藏院觀音寺はこの附近の巨刹として有名なり。

高田町は直江津町の南二里に位し、荒川の西岸に沿へる一都會なり。頸城

三郡の中心を爲せるを以て、交通頻繁、人烟稠密なり。東西二十町、南北一里、町村制實施後市街を二分して、東を高城村と爲し、西を高田町と爲す。



合せて戸數五千六百餘、人口二万四千餘を有し、郡役所區裁判所稅務署中學校師範學校等あり。此地は維新前榊原氏の城邑にして、其古城址は高城村にあり。四方濠水をめぐらし、壘壁依然として、今猶大手門の遺址を存せり。市

街の中、吳服町上小町田端町等殊に殷昌にして、豪商巨賈軒をつらねたり。此地は北越地方中、有名なる降雪地にして、嚴冬の候は市街全く堆雪に埋れ、



「この下に高田町あり」との表標を立つる奇觀を呈するに至るは、既に人の知るところ也。従つて市街家屋の構造、純然越後式の標準を示し、信越線に乗じて信濃より此地に入るもの、先づ其市街の人道悉く庇を以て蔽はるゝを見て、奇異の感に撲たるゝならん。瑞泉寺は眞宗の巨刹にして、横春日町にあり。明治七年の火災に、其本堂は焼失したれど、經藏は數百年前の建築にして近國に稀なる構造なり。寺町にある淨興寺も亦眞宗の巨刹にして、一に稻田禪坊と稱し、堂宇宏壯、境内廣濶なり。其他字下寺に町の鎮守神にして郷社なる日枝神社あり。此地の名産としては、革細工、鑄粟飴等最も世に著はる。町を東南に距ること三里、高士村大字北方に岩の原葡萄園あり。川上善兵衛の箇人經營にかゝり、培栽反別二十餘町を有し、苗樹の種類三百五十餘種に及び、葡萄酒の醸造頗る多く、卅四年に於て一万三千餘圓に達せり。蓋し縣下に於ける著名の産業なり。

高田町より信州街道を南に進めば、信越の境に近く蟠れる妙高火山群次第に近く、信越線の汽車は半ば平野半ば溪山の間を走り、關山驛に至りて、翠

嵐白雲の搖曳するもの愈、深し。地に、關山温泉と稱するものあり。浴槽四箇あり。こは此村の西二里半なる湯河原より筥を用ゐて導き來りたるもの、温度は泉源にありては華氏の百二十度を有すれど、關山村の浴槽に於ては著しく其温度を減せり。泉源を燕温泉と稱す。妙高山の山間にありて幽邃を以て著はる。

赤倉温泉

赤倉温泉は信越線田口驛を西方に距ること一里半、妙高山の東麓、妙高村大字一本木新田にありて、浴舎十餘戸あり。泉質は鹽類泉にして、遠く山中より樋を以て導き、以て澡浴に供す。此地、背後に妙高山を帯び、前には裾野の彼方に小丘陵の起伏せると頸城平野の人烟とを隔て、米山の翠黛と日本海の浩蕩たるを望み、晴天には、旅店の欄干に凭りて佐渡の青螺を指點するを得るといふ。蓋し此附近に於ける屈指の温泉場たり。また、妙高山の東南麓、關川の上流に、苗名瀑あり。直下十五六丈、頗る壯觀なり。

高田町より東し、東頸城郡の中央を横斷し、安塚、松代等の諸邑を経て、薬師峠を踰え、中魚沼郡の名邑十日町に達する街道を十日町街道といふ。此街

十日町街道



松ノ山温泉

道は、頸城平野と中魚沼郡の信濃川沿岸地とを連絡する地方的道路に過ぎずして、丘陵起伏し、行客稀少なり。東頸城郡役所の所在地なる安塚村は、高田町の東方三里半に位し、人口幾かに一千餘を有するに過ぎず。東頸城の一郡は南北東の三面峯巒圍繞して、其餘脈郡中に蔓延し、平坦の地としては、中頸城平野に接する西方一帯の少許の地のみ。されど地味豊饒なるを以て人民多くは農業に従事せり。従つて此地方には記するに足るべき名勝古蹟少く、只郡の東方に松ノ山温泉あるのみ。松ノ山温泉は越後に於ける創設最も古き温泉にして、地の僻境に位せるにも拘らず、年々浴するもの一万以上に及ぶといふ。其地は安塚村の東南四里、松ノ山村字溪本にありて、村の中央に浴場を設け、溪間に湧出せる温泉を引き、以て人をしてこれに浴せしむ。泉質鹽類泉なり。

かくて再び直江津町に戻り、それより海岸に沿へる北陸街道をたどるとせんに、先づ鐵道の驛として春日新田あり。黒井にある停車場はインターナショナル石油會社の貨物専用にして、一般旅客の昇降を許さざるもの、其驛の

柿崎町

米山

傍に同社及び其油槽あり。南は保倉河岸より北海岸に至る間に、壯大なる製油所を設け、その規模の壯大なる、蓋し本邦屈指のものなり。これより漁家點々として松林の間に隠見する犀潟を過れば、潟町の一小驛なり。此附近、潟湖の遺址とも見るべき小湖多く、御手洗池旭池等あり。又、東北二十町を隔て、長峯の古城址あり。犀ヶ池と坂田池との中間なる丘陵上にあり。元和三年牧野右馬允の築く所にして、今猶殘渠を存す。丸山の桃園は風景頗る美にして、花時は遊客多し。

これより米山の海に盡くる處まで里程約三里、平滑なる沙濱にして、街道と鐵路とは相並んで青松白沙の間を走れり。而して此間に柿崎鉢崎の二驛あり。柿崎町は人口三千を有し、地に薪炭石材木材等を産し、柿崎材木合資會社あり。町に眞宗の名刹淨福寺あり。停車場の南方五町に柿崎古城址あり。馬正面の桃花も亦著名なり。鉢崎は米山の西麓に位し、人口千八百餘を有せり。地に、日本石油會社坑場東洋石油會社坑場越後國油會社等あり。

米山は此處に海中に突出して、北陸海岸中實に稀に見るの好風景を爲せり。



鉢崎より刈羽郡鯨波に至る間三里、此間を八崎と稱し往古は八箇の岬ありしを以てかく名づけしもの、道路は絶壁の上を通し、汽車の線路は其數十尋脚下なる沙汀を過ぐ。怒濤咫尺、ともすれば其餘沫車窓に及ぶを以て、處々に波除の設備あるを見る。青海川の小驛は其絶壁を縫へる道路の中にありて、前に日本海の波濤の浩蕩たるを控へ、後に米山の翠微の美しさを帯び、佐渡の青螺は呼へば響へんと欲し、風光の秀絶なる實に名状すべき言葉を知らず。殊に、停車場の傍なる懸崖絶壁の上に、至尊御北巡の時畏くも鳳輦を駐めさせ給ひし御駐蹕所あり。此處より打渡したる眺望は更に一層の秀麗と雄大とを加へたり。而してこの海岸の地を福浦と稱し、佐位名岩達摩岩狸々岩等の奇岩怪石海中に散在するを認む。就中佐位名岩の如きは、巨岩人立、其東南は巨大なる空洞を爲し、怒濤これに激して、壯觀を極む。桂山の頂には桂山古城址あり。建仁年中、國守佐々木盛綱の一族か二十年間此處に居城して、海邊の鎮衛を司りし遺址なりと傳ふ。眺望また甚だ佳なり。

米山は越後海岸に於ける一消火山にして、甚だ高からされども、其直に海

鯨波

岸に秀立せるを以て其名夙に高く、地方人士の崇拜また斜ならず、其絶頂に米山薬師あり。

かくて米山の險を過れば、汽車の線路は再び道路と會し、直ちに鯨波に至る。近年海水浴の設備ありて、夏時は浴客多し。北二十餘町に塔ヶ原の勝あり。一箇の磯山に過ぎずと雖も、青松亂立して、風致畫くがごとく、その絶端天狗ヶ鼻に至れば、よく遠近の山影島影を一眸の下に收めて、人をして思はず快哉を叫ばしむ。

柏崎町

柏崎町は刈羽郡中の一名邑にして、北陸道の要衝に當り、別に此地より國の内部、殊に信濃川の灌漑する豊饒なる地方に通ずる長岡街道を起し、鐵道線路また同方向に走れるを以て、物資の集散、行客の往來また從つて盛なり。東西二十五町、南北六町、人口一萬餘を有し、西に鵜川、東に鱒石川を控へたり。

町に接して日本石油會社の製油工場あり。同社の所有する各坑區より採集せる原油を集め、此處に此を精製し、燈油其他の鑛油をつくる。其規模壯大、



高濱町

本邦稀に見る所なり。町に刈羽郡役所區裁判所稅務署柏崎聯隊區司令部等の官衙中學校女學校等の學校あり。柏崎神社は町の鎮守にして、延暦年間創建の古祠なり。また、枇杷島村に天平年間の古社三島神社あり。町の西に番神ヶ鼻ありて、海中に突出し、其附近に海水浴場あり。夏時は浴客多し。

海岸なる北陸街道を傳へば、所謂越後の荒濱はこれより始まりて、沙丘よく發達し、道路は其間を通し、西風西北風常に沙を吹き、其の荒涼たるに實に言語に絶す。聞説く、道路は常にこれが爲めに埋却せられ、車馬を通ぜざること往々にしてありと。而してこの海岸には荒濱を過ぎて高濱町あり。人口二千を有する一小邑なれど、其地には有名なる觀音堂あり。堂に至るの坂路を觀音坂と稱し、海洋の眺望絶佳なり。又路傍に永正年間上杉顯定長尾爲景の戰爭に死したる將士を埋葬したる古塚あり。これより石地を經れば、尼瀨出雲崎の市街長く連りて、海岸に横れるを見るべし。尼瀨は曾て有名なる石油産地を以て知られ、殊に越後に於ける石油業の初期時代に於ては、此地はその中心となり、單に陸上のみならず海底にも亦鑽坑を穿ち、盛に石油を

出雲崎町

採汲したりしが、近時は其出油量大に減じ、又昔日の優盛なるを見る能はず。出雲崎町は、風沙また荒濱の如くならず、町は長く海岸に連れる純然たる漁業地にして、市街また魚蟹の氣に富む。人口七千あり。此地は往昔代官所の設けありて佐渡へわたるべき官船の發着せしところ、中ごろ少しく衰頹したれど、現今は石油事業勃興し、其繁盛更に昔日に倍するに至れり。此地より三島郡役所の所在地にして信濃川西岸の名邑なる與板町に至る道路あり。其里程約三里餘なり。

與板町

與板町は西、北陸街道と東長岡街道とを連絡する道路の要衝に當り、殊に信濃川の西岸に位するを以て、水陸運輸の便甚だ盛なり。戸數二千、人口七千餘を有し、街衢整正、商業活潑なり。此地は維新前井伊氏の城邑たりし地、今猶ほ其の城址を存せり。柏崎町より此地に達するの道路は丘陵起伏する間を縫ひて、其間に會地宮本關原鳥越脇野等の諸邑あり。關原は煙草の産地として聞ゆ。

寺泊町

出雲崎より海岸を辿ること二里餘にして寺泊町あり。人口三千餘を有する



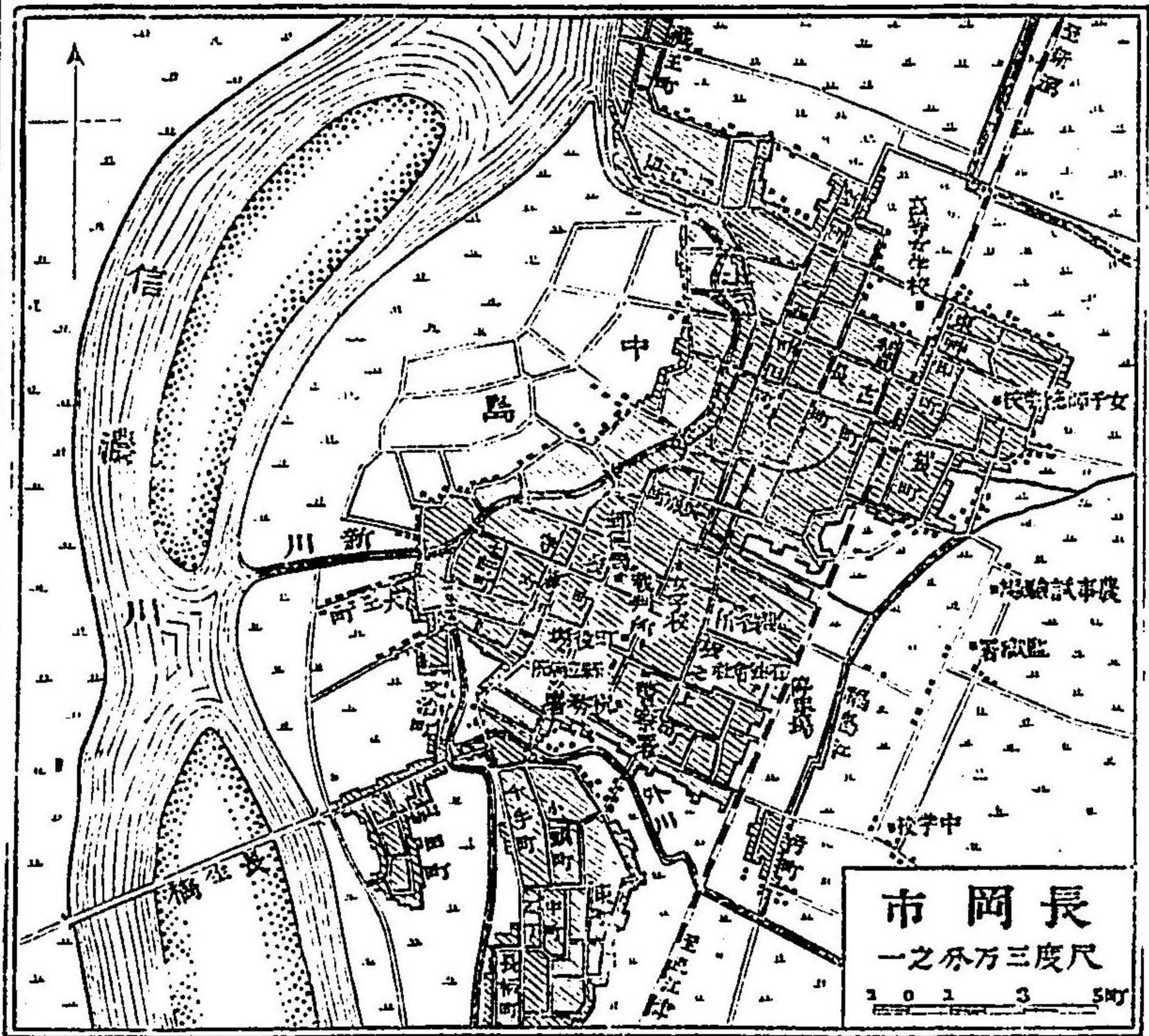
一名邑なり。越後の海岸中、佐波に至るに最も近きは此地にして、海上の距離十一里なり。同島に通ずる海底電線も亦此附近よりするものを主線と爲す。北には彌彦角田の二山翠色を凝し、東は丘陵長く連りてこれを劃り、市街は海岸に沿ふて長く東北に連る。風光秀麗にして、海岸に設けられたる海水浴場には夏時來り遊ぶもの多し。順徳帝が佐波に謫せられし時滞留したまひしといふ本間の館の故址今猶存せり。越後七不思議の一なる弘智法印の乾軀を收めたる堂宇は野積村西光寺の境内にあり。此附近の海岸は總稱して越の浦といひ、往昔は諸國商船の船着所として著名なりし地なり。町の北端には信濃川と日本海とを連絡する大川津の溝渠開鑿の計畫あり。

再び柏崎町に戻り、更に北陸鐵道の線路に添ひて西に幾多の小丘陵の間を過ぎ、安田北條の兩驛を経て、廣田峠に隧道を穿ち、やゝ下りて、澁海川を渡りて塚ノ山驛あり。これより北魚沼郡の小千谷に通ずる縣道あり。汽車は澁海川の西岸に沿うて北し、頃刻にして信濃川の灌漑する廣濶たる中央平野を展開す。來迎寺驛は南は魚沼三郡北は三島郡に通ずる貨物集散の一大要路

## 長岡市

に當り、旅客の來往日々繁雜を極む。これより汽車は正東を指し、信濃川の溶々たる巨流を渡りて、汽車はまた北に向ひ、宮内驛に至りて六日町より來れる前橋街道に合して、愈北し、遂ひに瓦葺粉壁美しく日に輝けける長岡市に入る。長岡市は北陸道中の一都會にして、地は信濃川平野の中樞に位し、西に信濃川を控へ、東に東山をめぐらし、陸運水運兩つながら甚だ便なり。此市は明治卅九年初めて、市制を布きし所、東西二十町、南北一里餘、戸數六千四百、人口三万五千餘を有し、市街殷盛、商況の活潑は却つて新潟市を凌駕するの勢あり。市の沿革を尋ねれば、上杉謙信の時代既に繁華なる市街を成し、今、王内村大字藏王村に残れる古城には、謙信の叔父長尾爲重これに主たりき。上杉氏會津に移るに及び、堀氏城を今の地に移し、徳川氏に及びて、牧野氏これが歴代の城主たり。維新の亂、長岡藩が會津藩に與して頑強に朝師に抗せしは、世人の皆な知れるところ、其豪氣不屈の士風は實に當時天下に喧傳せられたりき。而して維新以後一度衰頽に赴かんとせしも近來本市の附近より多量の石油を産するを以て却つて市況昔日に倍蓰するに至れ





り。越後の石油を談ずるもの長岡の名を説かざるなく、其東方東山（第二十七圖甲）に林立せる無数の井櫓は、いかに其坑區の富贍なるかを思はしめ、其採酌せる原油は鐵管によりて市の附近に運搬せられ、精製せられたるものと精製せられざるものとを問はず、或は信濃川の便によりて新潟の海路に運び、或は汽車に由りて各地方に送る等、各種の

規模壯大に、設備また甚だ盡せり。停車場に連れる夥多の油槽車のごときは、北越線の一奇觀たるを失はず。宜なり、此市が石油市の名を得たることや。國道は新潟より來りて、市の東北部より其の中央を縦貫し、其の繁華なる町に、表町、裏町等の目あり。停車場は市の東方にあり。郡役所區裁判所市役所縣立病院及稅務署等は市の中央部に散在せり。其他中學校女子師範學校高等女學校長岡圖書館等あり。且、六十九銀行長岡銀行第一銀行支店等の巨屋あり。石油を業とせる會社は其數甚だ多く、寶田石油古志石油越後石油日寶石油等の諸株式會社あり。又、長岡米穀石油取引所あり。米穀も亦此の越後中央平野の一大物産なるを以て、其取引石油と共に甚だ隆盛を極めたるなるべし。（第三十八圖甲）

市内に柳原神社千手觀音等あり。城址は町の兩方にありて、今纔かに壘壁を留めたるに過ぎず。此地に名菓越の雪あり。

長岡市の北十町王内村大字藏王に、金峯神社あり。縣社にして和銅年間古志郡椽尾楡原に勸請したるものを其後數十年にして今の地に移したるものな



押切驛

見附町

り。境内廣潤にして老木に富み、頗る幽邃なり。又、市の西方草生津町より信濃川に架したる長生橋は長さ九十餘米を有し、新潟の万代橋に次ぎて縣下第二橋の稱あり。これを渡れば三島郡に至る。

また市の東一里、栖吉村悠久山の頂に蒼柴神社あり。舊藩主牧野氏の祖廟なり。四邊開豁、芳草氈を布くが如く、樹色山光宛然一大公園たり。これを以て四時遊客多し。傍に招魂社あり。山の後に陶器を製するものあり。御山焼の名を以て聞ゆ。東山の山脈は最も油田に富める所にして、浦瀬・加津尾澤等あり。

長岡市を後にして北に向へば、中の島村に押切驛あり。小驛なれど、東北は見附町・椋尾町に連り、西北は今町・與板町に近きを以て旅客の昇降盛也。且此地は東山石油地に近接せるを以て、近時此間に油流鐵管を布設し、椿澤等の石油は絶えず此地に流送せられつゝあり。停車場一帯の平地は維新の亂に官賊兩軍の勝敗を決せし大激戦地なり。此の驛の次驛は見附驛にして、絹織物を以て有名なる見附町は停車場の東方二十町餘にあり。町は人口六千三百

椋尾町

餘を有し、商業頗る活潑なり。此附近は縣下に於ける製織の地として名高く、ことに四里餘を山中に隔て、椋尾町の一主産地を有せるが爲め、其の取引甚だ盛に、到る處機杼の音を聞かざるなし。此の見附町より産する節織の一種を見附結城と稱し、経緯共に清國の柞蠶糸を使用すといふ。(工業参照)

椋尾町は鐵道線路を東方に入ると四里許、刈谷田川の上流に位し、山間の一市邑たり。人口五千を有するに過ぎざれども、古來越後紬の産地として其名天下に聞え、従つて富商多し。此地の始めに白紬を製造せしは延寶年間今を距る二百三十年にして、寛政に至りて縞紬を創製し、明治に入りてより愈隆盛に、廿三年には組合組織を改正し、其後或は品評會を開き、或は委員を全國各地に派遣して機業の状況を視察せしむる等、専ら發達の方法を講ずるを怠らざりき。殊に染色講習所を設けて、堅牢なるアリザリン染法を講究せしは、最も名聲を揚ぐるの一階歩となれり。椋尾産業組合あり。地に上杉謙信の幼時文を學び武を練りたりといふ常安寺の巨刹あり。公園は老樹幽邃にして、中に秋葉三尺坊の堂宇あり。



三條町

再び見附驛に戻りて、猶北行すれば、線路の西方半里、街道に沿ひて今町の小邑あり。帶織驛は人口五千を有せり。これをも過ぎて、直ちに三條町に入る。

三條町は信濃川平野地方、新潟長岡に次ぐの都邑にして、五十嵐川の信濃川に會湊する地點に位し、人口一万六千餘を有す。地信濃川の一河港を爲し、舟楫の便甚だ盛に、其沿岸には帆檣常に林立せり。官衙には郡役所區裁判所、稅務署小林區署等なり。銀行會社また甚だ多く、三條銀行北越商業銀行等其魁なり。學校には中學校あり。市街は整正にして巨商老舗齋をつらね、商業活潑なり。町に東西本願寺別院あり。町を南に距る數町の處に高安寺阪と稱する小丘あり。こは維新の役、官軍長岡を陥れ更に此處に來りて賊兵と激戦せしところなりといふ。又、東北一里に、井久禮神社小伏神社なり。東南五十嵐川を溯ること三里、五十嵐神社あり。式内の古社として有名なり。また此の三條町に本成寺の巨刹あり。寺は北陸道に於ける日蓮宗の總本山にして、境内廣潤、めぐらすに老杉巨松を以て、幽邃極まりなし。堂宇は明治二十六

信濃川

年の火災に大半焼失し、鐘樓寶塔寶藏山門を留むるに過ぎざりしが、明治卅二年再び建築に従事し、今は全く落成して、却つて舊觀に勝るに至れり。

信濃川は長岡より稍西北し、不規則なる曲線を描きて三條町に來り、一支流を此處に岐ち、本流は稍東し、更に正北に流れて、新潟市に至りて海に注ぐ。新潟街道は三條町の北二十町に於て信濃川を渡り、その支流の東岸に沿ひて北に走れり。此間の名邑に、新飯田茨會根白根大野等の諸邑あり。三條町の北、信濃川本流の南岸、三貫地より岐れたる一路は絶えず信濃川本流の右岸に沿ひ、小須戸酒屋等の諸邑を経て以て新潟に至れり。而して北越鐵道の線路は更にその東一里餘を距てたる一路に添うて、蜿蜒として前二路と平行す。此間の名邑に、加茂新津龜田等あり。此の三條の道路の南北に走れる平野は縣下第一の米産地にして、地勢低濕なれども地味極めて豊腴、稲田穰々として殆と天と相連るを見るべし。されど此平野は信濃川と阿賀川との中間に位し、其兩川の距離最も近きは酒屋附近に於て三里に過ぎず、且この間小阿賀川ありて兩川を連絡したるを以て、一たび洪水に際すれば兩川互に



加茂町

相奔漲し、これより以下の村落は全く水に埋没せらるゝに至るなり。三條町より鐵道線路に添ひて進めば一ノ木戸驛あり。其南四町に一ノ木戸地藏尊、東南三十町に大崎の觀音堂あり、又東南一里許にして、如法寺村農家の庭中に火井あり。越後七不思議の一にして、石臼を孔口に置き、竹筒に火を傳へて以て遠きに致す。これ自然瓦斯の噴出にして、今日は敢て怪むに足らざれども、昔より越後奇怪の一として知られしものなり。

加茂町は南蒲原郡の東隅に位し、人口九千餘を有し、其繁華三條町に次ぐ。この地もと青海と稱せり。停車場は町の西端にあり。繁華なる街路は其中央を通し、市街整正、人烟稠密なり。此地は有名なる製織地にして、羽二重の良好なるものを産し、且つ加茂縞の名遠近に聞ゆ、町の中央を貫流する加茂川は其水清淺にして、最も布を晒すに適せり。(第三十九圖)また物産として加茂紙、葛籠等あり。此町にある青海川神社は有名なる縣社にして、延暦十二年京都より賀茂神社の一體を此處に奉遷したるもの、境内廣濶にして松杉繁茂し、堂宇また壯麗なり。加茂町の次驛なる羽生田驛は西一里に信濃川汽船の

小須戸町

發着所なる加茂新田を控へ、東、村松町に二里を隔てたるに過ぎざるを以て、小驛なれども旅客貨物の乗降頗る頻繁なり。地に延命地藏尊あり。

小須戸町は矢代田驛より西一里、信濃川の右岸にある一名邑にして、人口七千餘を有す。此地に産する小須戸縞は越後織物の一種として其名世に高し。これより信濃川を渡り、更に東行すること一里にして白根町に達すべし。此町にては五月の節句に際し巨風を飛揚せしむるの慣習あり。奇觀なるを以て行いて觀る者多し。白根町より中ノ口川(信濃川の一支)を渡れば二里餘にして、西蒲原郡の巻町に達する道路あり。

新津町

矢代田驛より北すれば、頃刻にして新津驛に至る。新津町は中蒲原郡の中央に位し、人口七千餘を有す。近時、石油業發達の爲め、市街繁盛を極め、商業活潑なり。郡役所、稅務署、區裁判所出張所等あり。石油會社の大なるものには日本石油會社出張所、新津石油會社等あり。町の公園とも稱すべきものは秋葉山にして、滿山唯是れ松樹、眺望また甚た佳なり。山上に秋葉神社あり。この山つゞき五町の地に、煮壺と稱する鑛油をたぐへたる池あり。地下より



龜田町

瓦斯の上騰するが爲め、沸々として恰も沸騰するが如き状を爲す。近傍に高坪鑛泉あり。此の新津驛は水原新發田村松五泉地方に岐る、各道路の衝に當れり。

新津驛より北すること二里餘、小阿賀川を渡りて龜田町あり。町は人口五千五百を有す。栗ノ木川は此地より鳥屋野瀉の北に接し、沼垂を経て信濃川に注ぐ。此地と新潟との間に汽船の往來あり。町は龜田綿と稱する越後織物の主産地にして、近年絹織物を産出し、龜田織物株式會社の設けあり。又内地向羽二重を多額に製織し、主として京都地方に輸出す。小阿賀川と信濃川との合流する地點に、酒屋と稱する一邑あり。又信濃川の下流、中ノ口川の相合する處に大野の一邑なり、共に信濃川沿岸の汽船の寄港地なり。

沼垂町

龜田驛より汽車は稍西北し、途中鳥野屋瀉の一端を右方に見る。鳥野屋瀉は、此附近の地形上自然に成りたる潟湖にして、周圍二里餘あり。鮎鰻等を産す。かくて之をも過れば、新潟市の門口とも稱すべき沼垂町の人家は直ちに展開せられ(第四十一圖甲)其東端信濃川に近く、北越鐵道の終端驛新潟驛を置き、

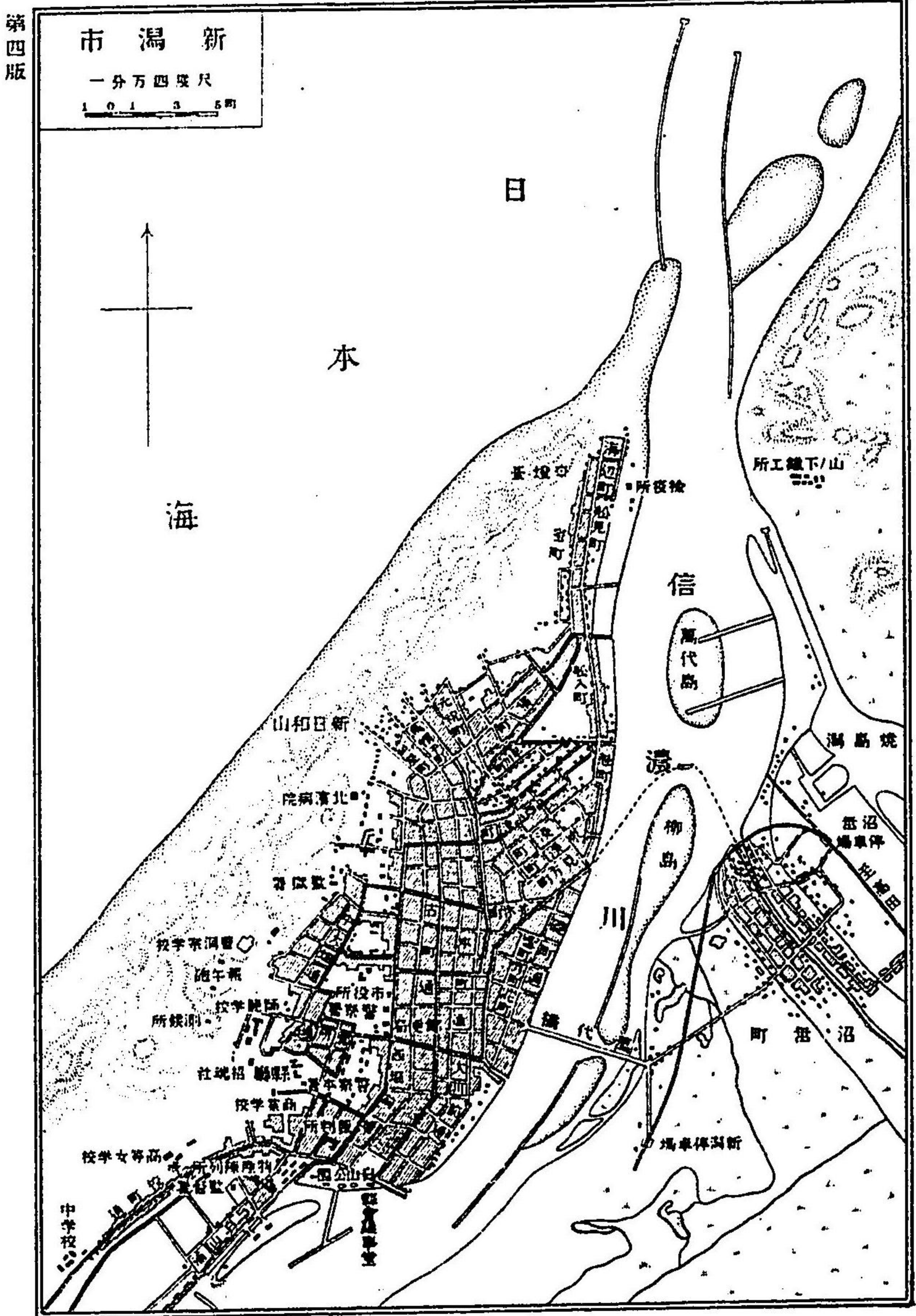
新潟市

虹霓に似たる万代橋は洋々たる大河を跨きて、直ちに新潟市の瓦葺粉壁に接す。沼垂町は人口一万二千を有し、舟楫の便に富み、旅客の來往荷物の集散多く、市街これか爲めに頗る隆昌なり。町に、蒲原神社法光院等より。

新潟市は縣下第一の都會にして、信濃川河口の西岸に位し、東は信濃川を隔て、中蒲原郡に界し、西北は砂山を隔て、全く日本海に瀕し、怒濤澎湃の響、地を動かして來る。市街は東西に短くして十二三町、南北に長くして、二十二三町、戸數一万餘、人口約五万を有す。此の地はもと土生田の里と稱し、一の沙洲たるに過ぎざりしが、明曆の頃より漁民隣村より移住し、萬曆盛を來すに至れり。されば此地は新發田長岡の如く封建時代の沿革を有すること少く、従つて武將武臣の事蹟あることなし。先づ北越鐵道線路の終端驛なる沼垂町にある新潟驛より歩を移せば、前には新潟市の瓦葺粉壁畫くがごとく、其の影を信濃川の水に倒まにし、虹霓のごとき萬代橋(第四十八圖乙)の風景は、人をして一種状すべからざる快感を覺えしむ。橋を渡り了れば、礎町



通南北に通し、これに隣りて雪町花町月町あり。これを過れば、大川前通本町通古町通の三路相並びて南北に通し、市の繁華の中心を爲すを見る。大川前通には材木問屋廻船問屋等多く、本町通には巨賈老舗窓を接す。其の他五番町六番町に、毎日朝市を開き、乾菜魚類より日常必要の器物等を販賣す。西堀通には真宗の巨刹多く、東堀通には荒物商骨董店多し。而して市の南部旭町學校町と稱する邊には官吏の居宅多く、市の北部は漁業及び船乗業者居住せり。新潟縣廳は東仲通一番町にあり。市役所郵便局は西堀通にあり。學校町の沙丘の上には尋常師範學校、測候所及び午砲所あり、師範學校に隣りて招魂社あり。維新の際王事に斃れし薩長土因薩藩の官兵を葬る。此沙丘は市の西部を擁するものにして、日本海岸に延亘せる大沙丘の末端たるものなり。沙丘の内側には、商業學校を始めとし、猶遙か南方には中學校、高等女學校あり。又沙丘の北部は日和山と稱し、高さ五六十尺、磴道南より通し、山上の眺望は頗る開豁にして、日本海の怒濤の彼方、遙かに佐渡島の翠螺を望み、白帆迷滅して眞に絶景たり。丘上林間三四の旗亭あり、以て酔を買う



第四版



に足る。猶公園としては市内に白山公園あり。地域廣潤にして林泉の美あり。園内に白山神社あり。

公園に接して新潟物産陳列所あり。宏大なる洋館にして、縣下のあらゆる物産を集め、一見本縣に於ける産業の趨勢を窺ふに足る。別に参考館を設け、内外物産の以て本縣實業家の参考に資すべきものを陳列せり。構内の一隅に天然瓦斯を噴出するところあり。鐵槽を以てこれを集む。猶市内重要なる諸官衙には裁判所監獄署土木出張所税關水産試験場等あり。

新潟は日本海岸の一商港たると共に、又越後平野を流る、信濃川の大河口を兼ねるが故に、船舶の來り集るもの尠なからず。其多數の川舟並に近海航路の小汽船若くは帆船等いづれも河の下流に瀕せる海邊町に碇泊するも、大汽船に至りては未だ進んで河口内に入る能はず。何れも港外に碇泊して貨客の上下を一にこれを解に待たざるを得ず。其日本海の一大商港たるに拘らず、其設備の不完全なる實に惜むべきなり。海邊町の西北沙丘の上に燈臺あり。又、信濃川に枕みて檢疫所あり。



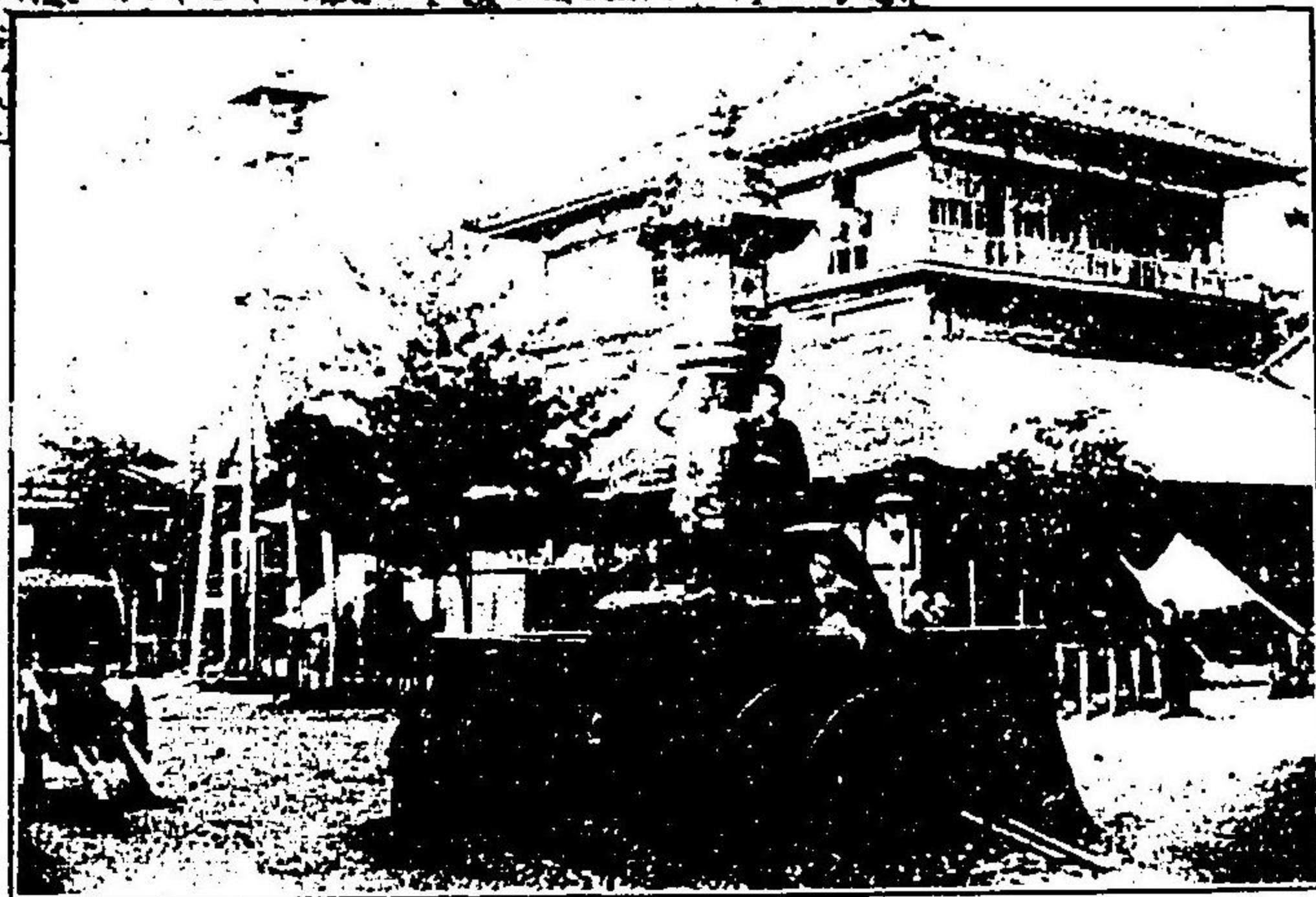
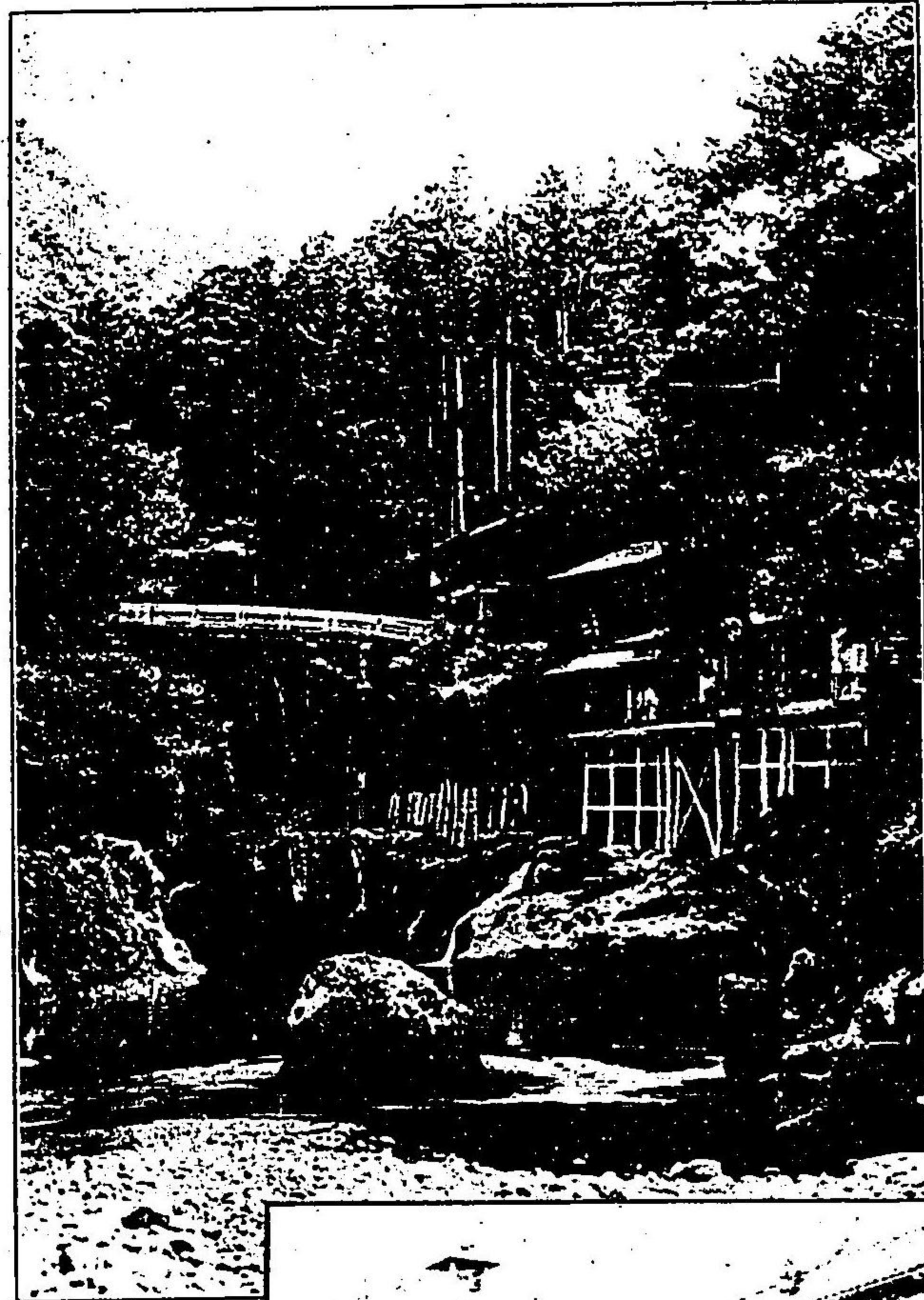
卷町

彌彦山

新潟市より西方海岸に沿ひ、西蒲原郡に入れば、三里にして内野町あり。これより一路は岐れて南に向ひ、二里にして曾根町、四里にして卷町あり。卷町は人口五千を有する名邑にして、底樋川の流に臨み、商業交通共に盛なり。地に郡役所地方裁判所出張所あり。此町より猶南すること三里餘にして吉田町あり。人口三千、木綿を産す。此町の東南二里に燕町あり。信濃川に面し、汽船の發着所なり。人口三千餘を有す。銅鐵器の産地として著名なり。吉田町より左折して西行すれば、彌彦町に至るべく、直行すれば地藏堂町に至るべし。

彌彦山は西蒲原郡の西南端なる海岸に峙立し、角田山の一峯と南北相駢列せり。山麓彌彦町より絶頂まで凡そ一里、彌彦町に有名なる古祠彌彦神社(第二十二圖乙)あり。石燈相通し、老杉日を蔽ひ、境、幽邃を極む。此社は延喜式内の神社にして、越後の一の宮と稱し、古來國人の尊崇至らざるところなきもの、今國幣中社たり。祭神は天照大神四世の孫にして越後國最初の主たる天香語山命即ち是なり。後世元明村上の諸帝これを尊崇すると深く、屢々堂廟

泉温中山賀加(甲)

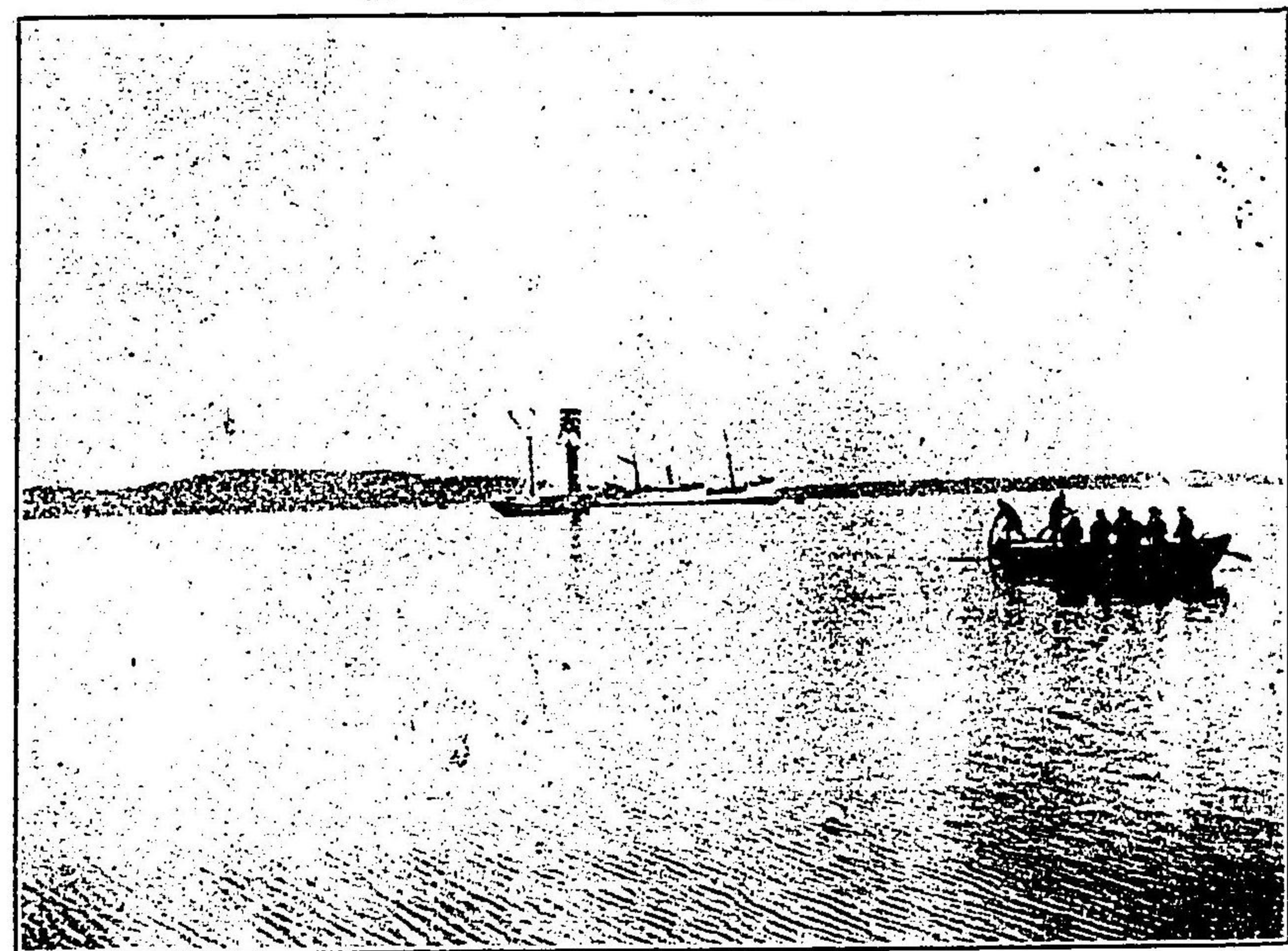


(第三十四圖)

泉温代山同(乙)



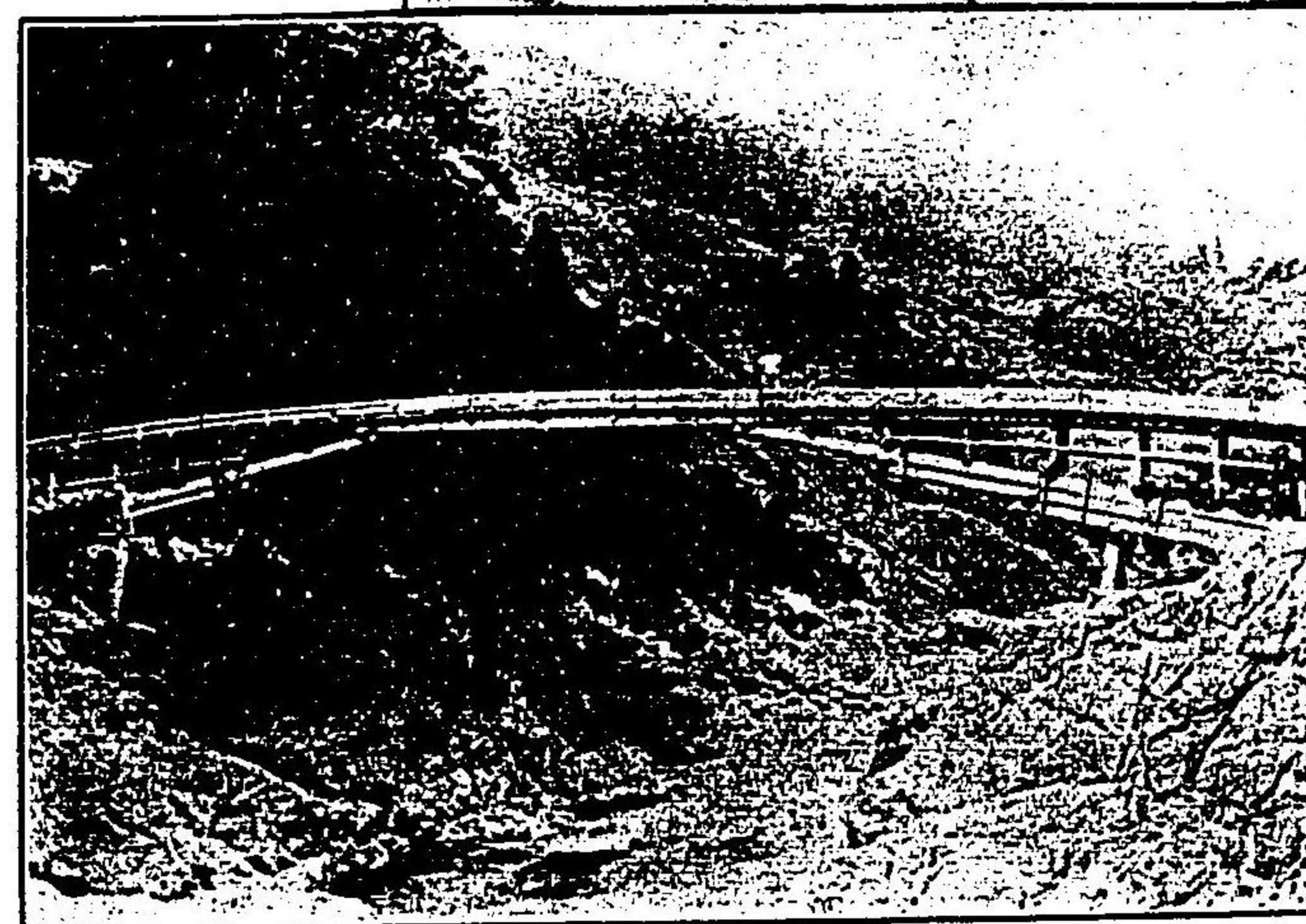
港 尾 七 登 能 (甲)



(第三十六圖)

岸 海 倉 和 同 (乙)

寺 谷 那 賀 加 (甲)



(第三十五圖)

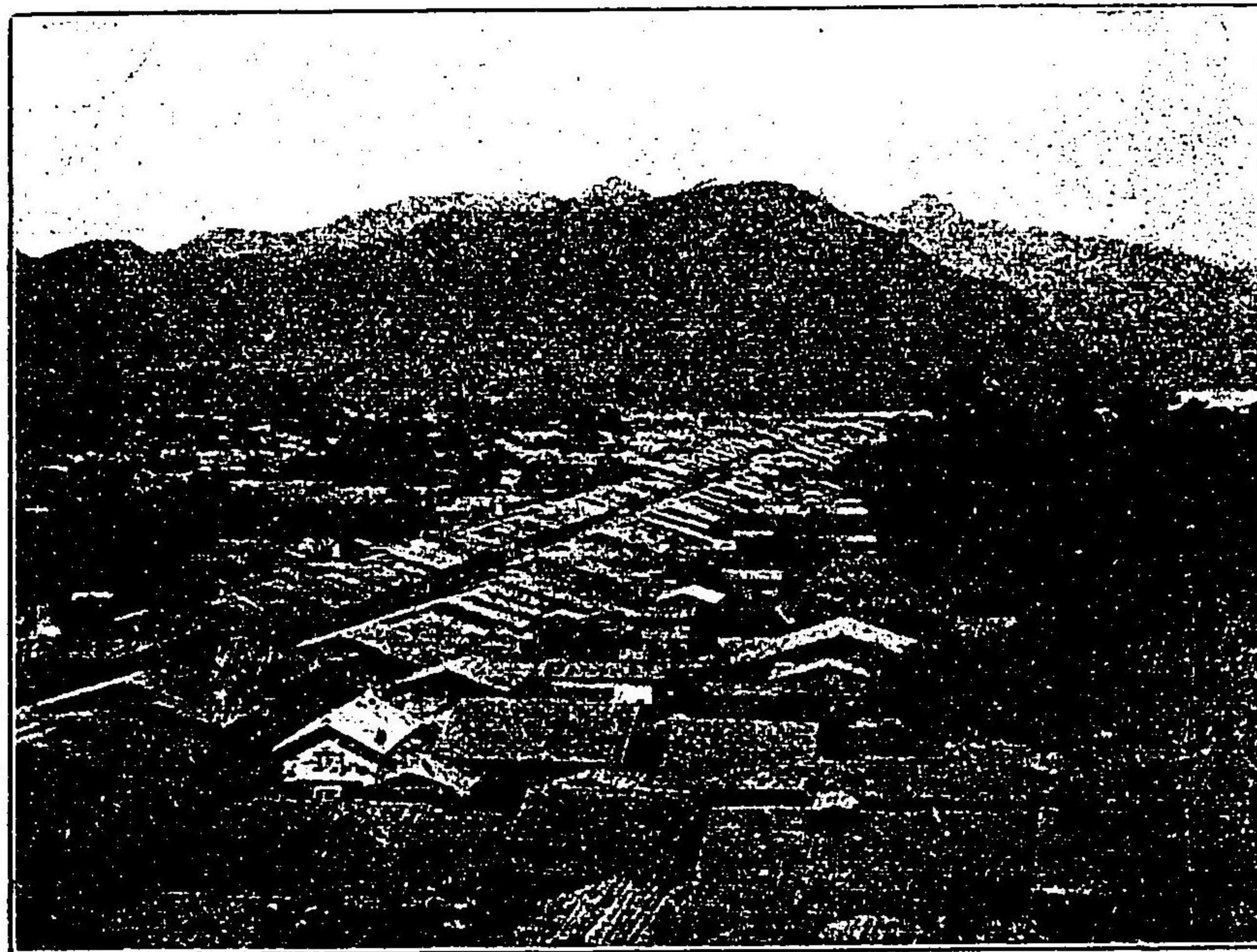
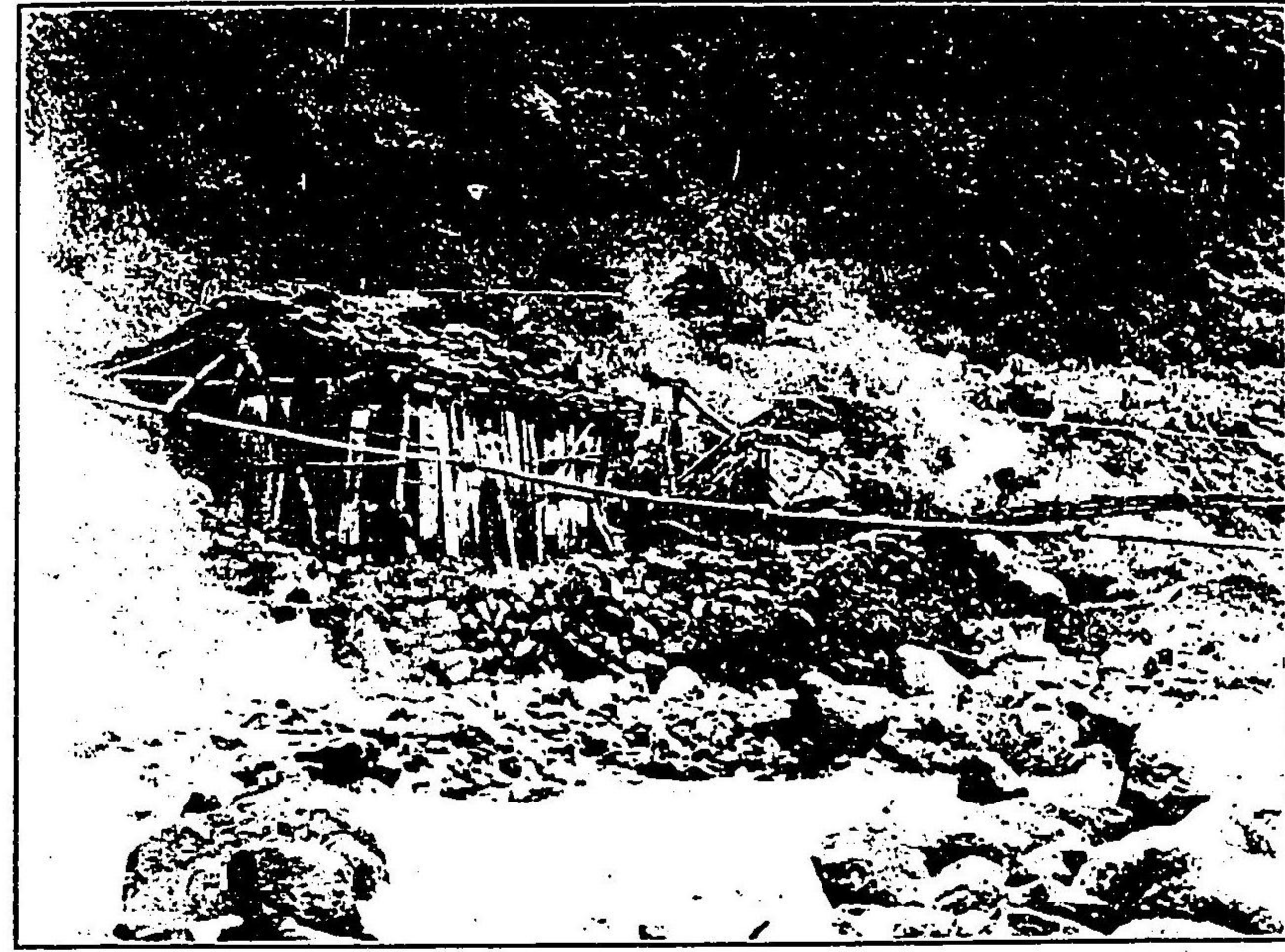
谷 溪 川 取 手 賀 加 (乙)



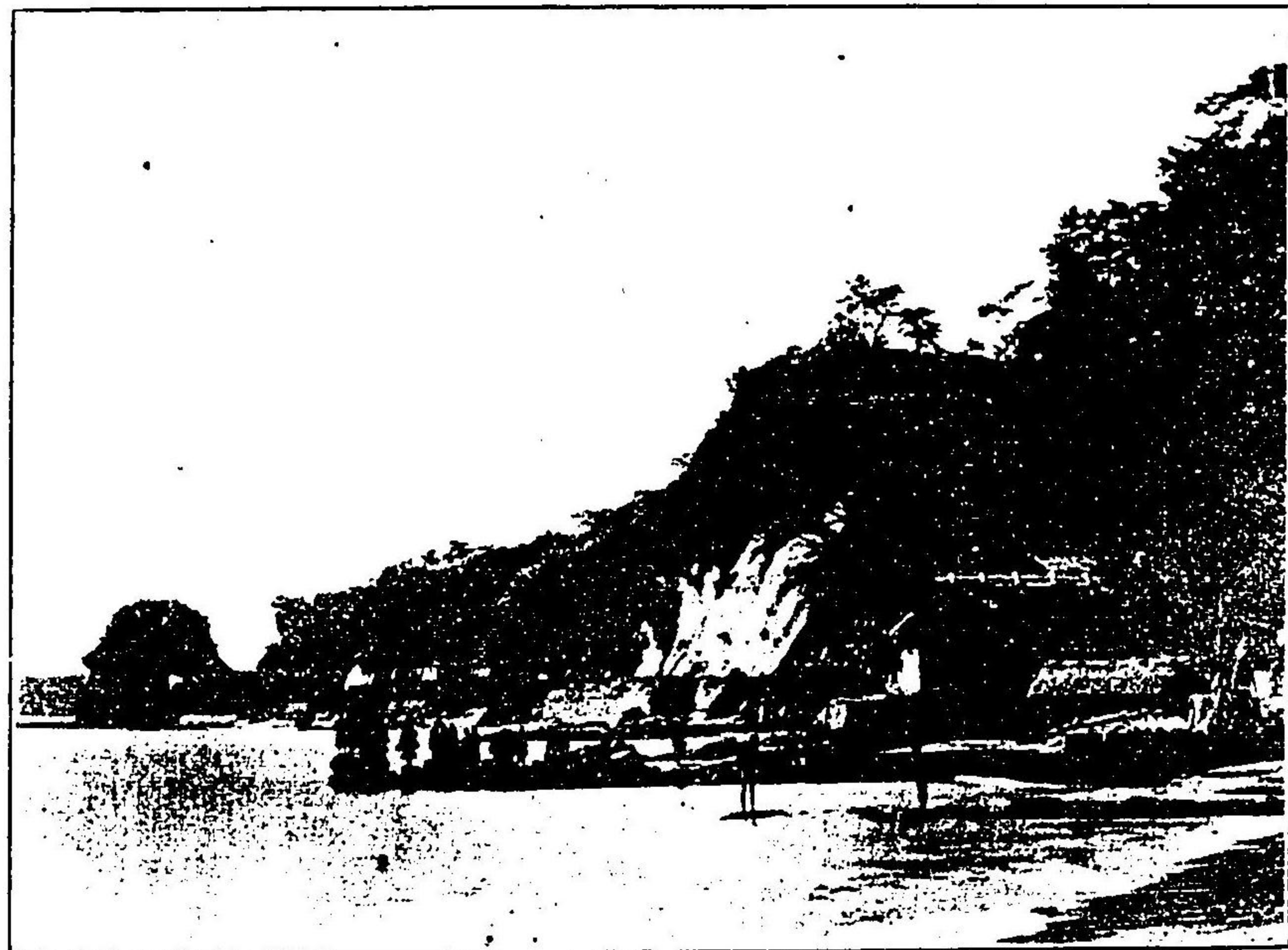
街市岡長後越(甲)



泉温山立中越(甲)



町上村後越(乙)



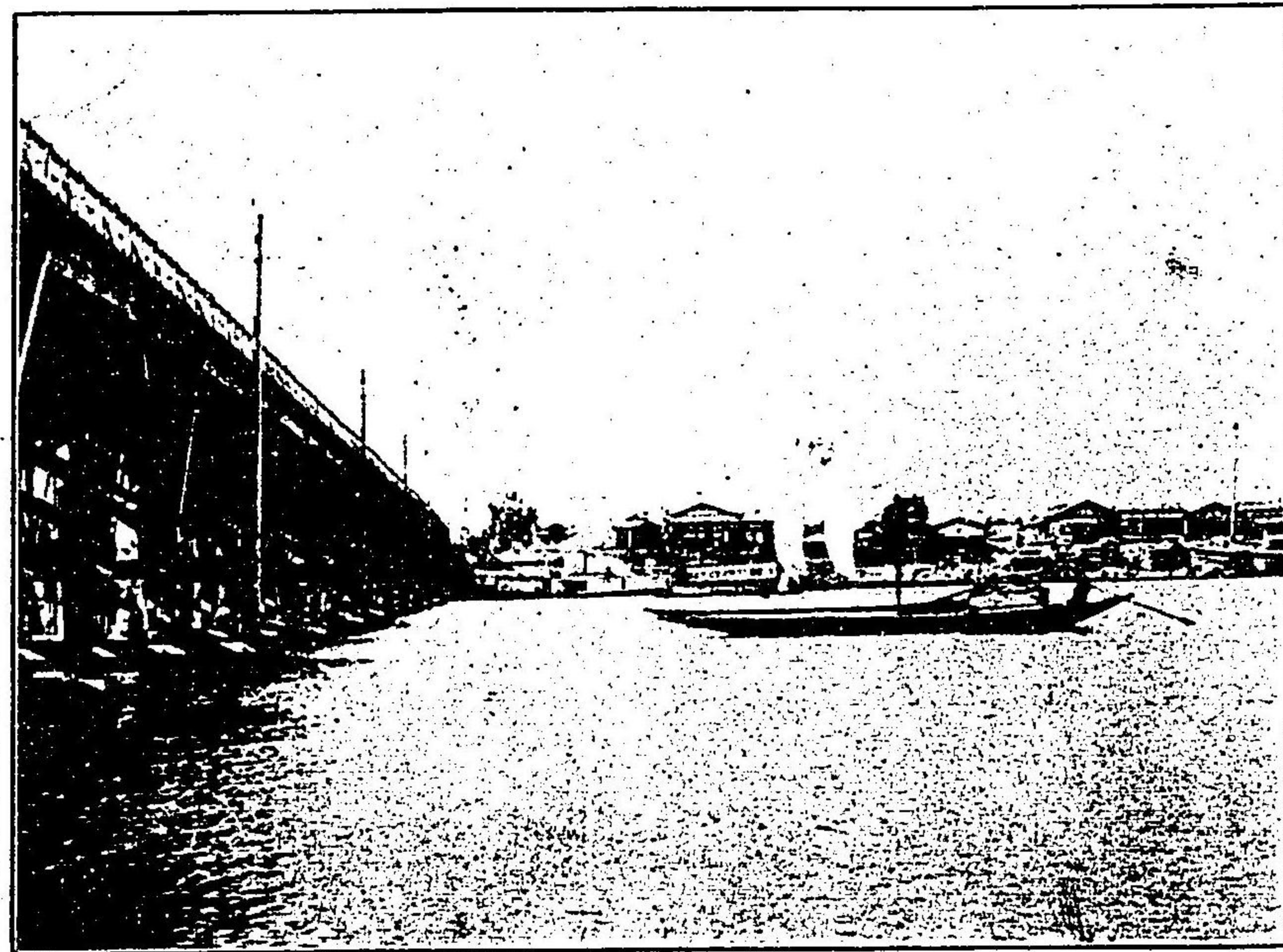
崎雄金浦灘見水中越(乙)

(第三十八圖)

(第三十七圖)



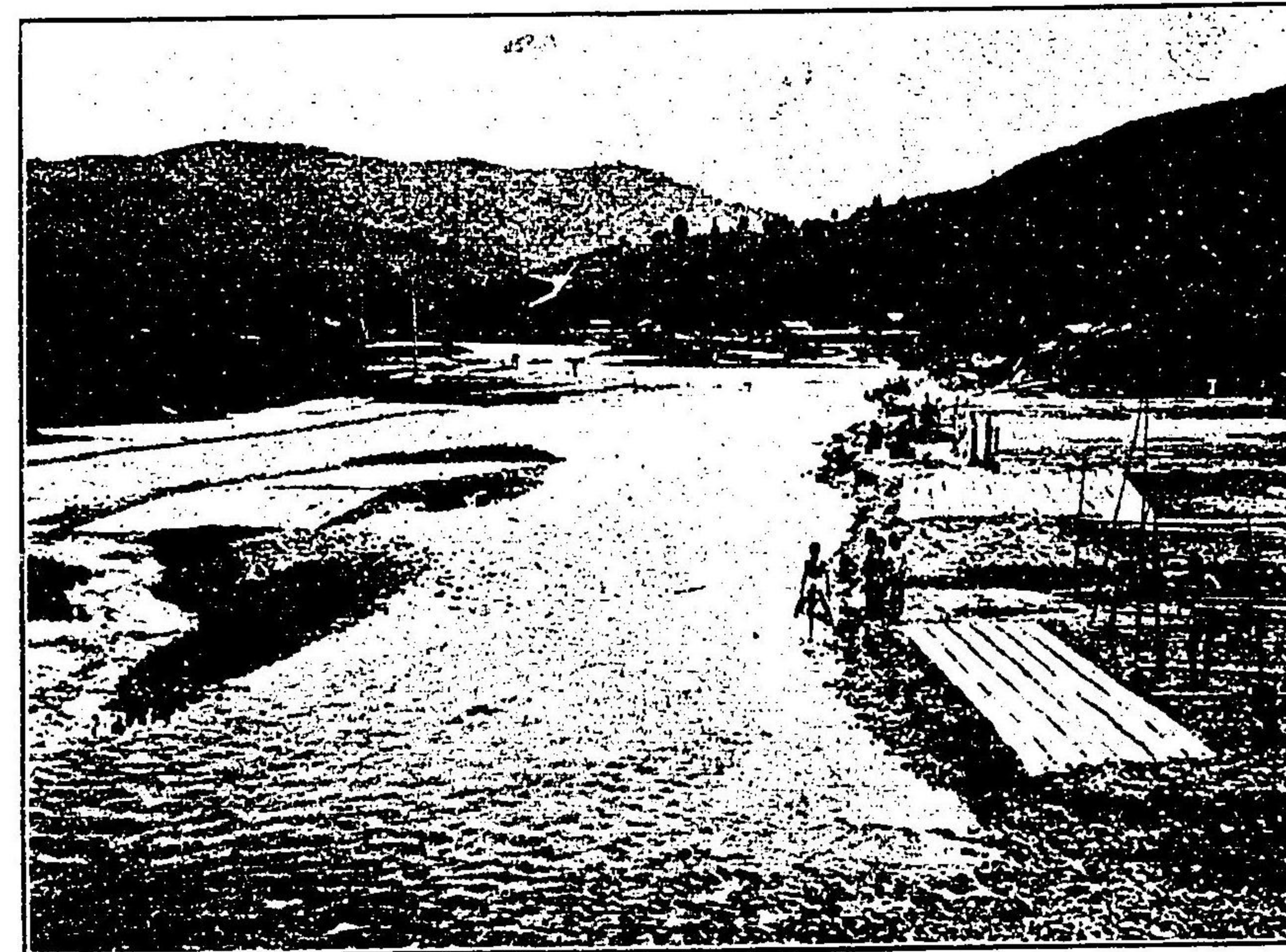
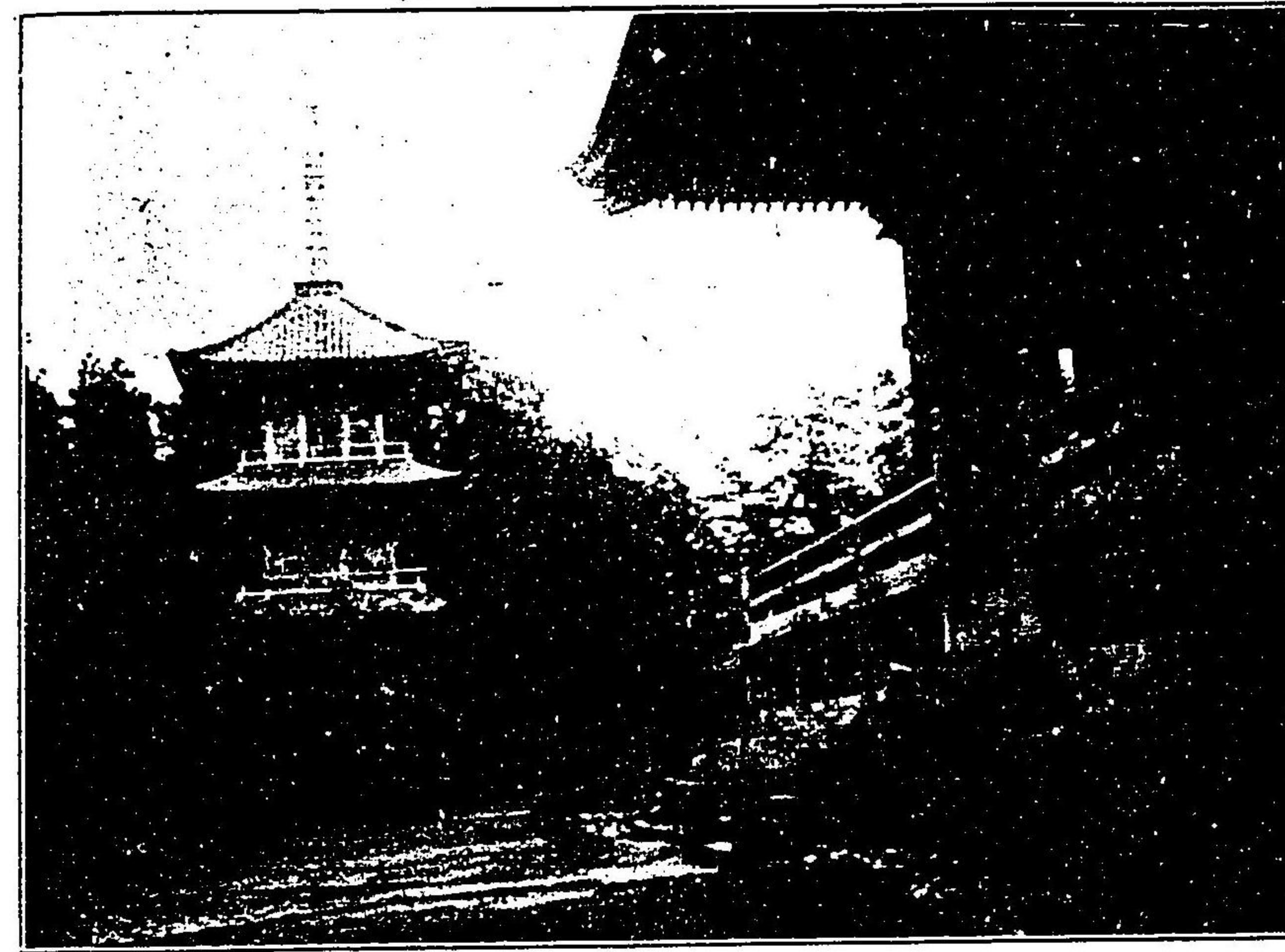
越後三條隨雲橋(甲)



越後新市場代橋(乙)

(第四十圖)

越後五智如來(甲)

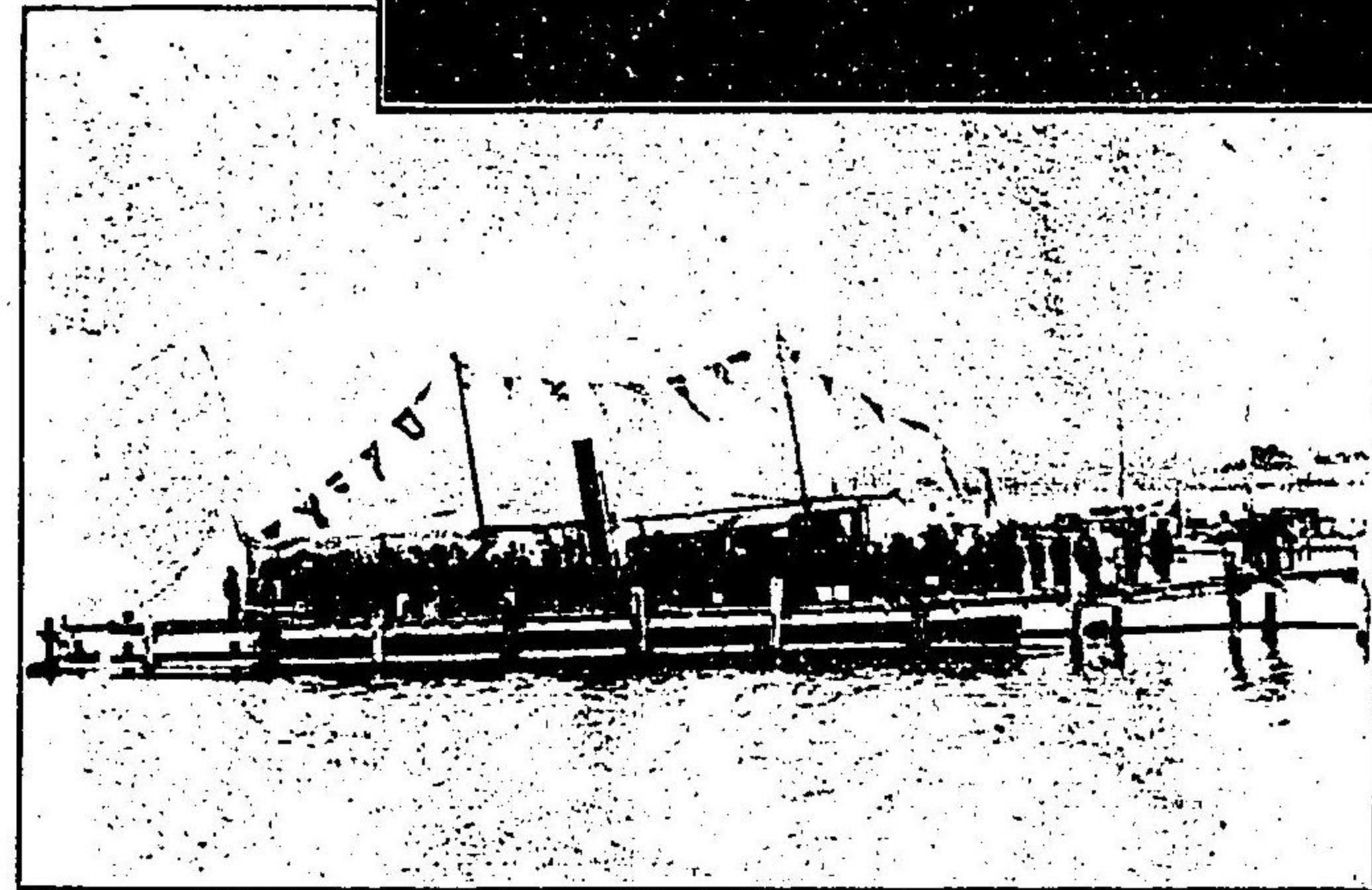
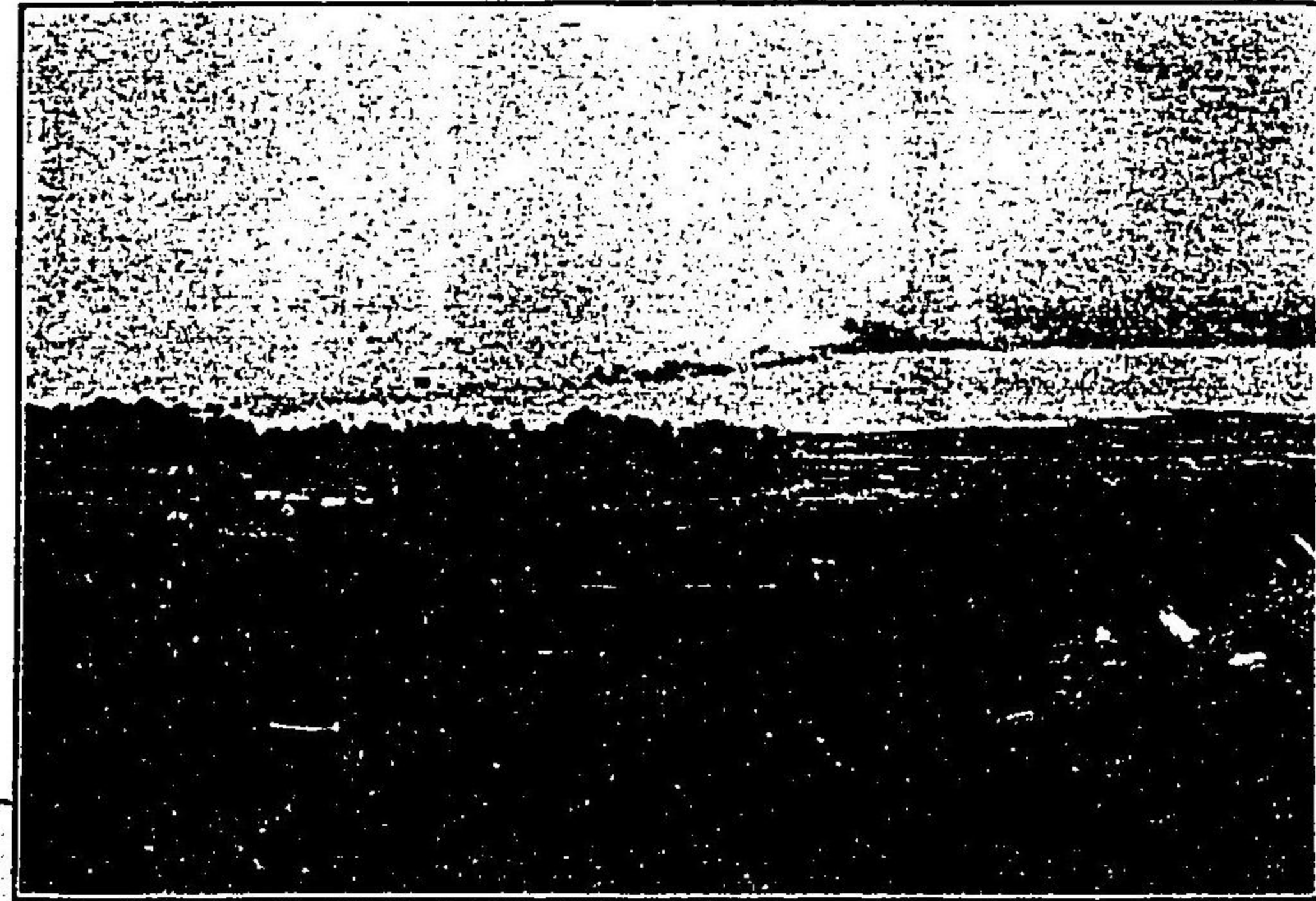


越後加茂布酒(乙)

(第三十九圖)



港 夷 渡 佐 (甲)



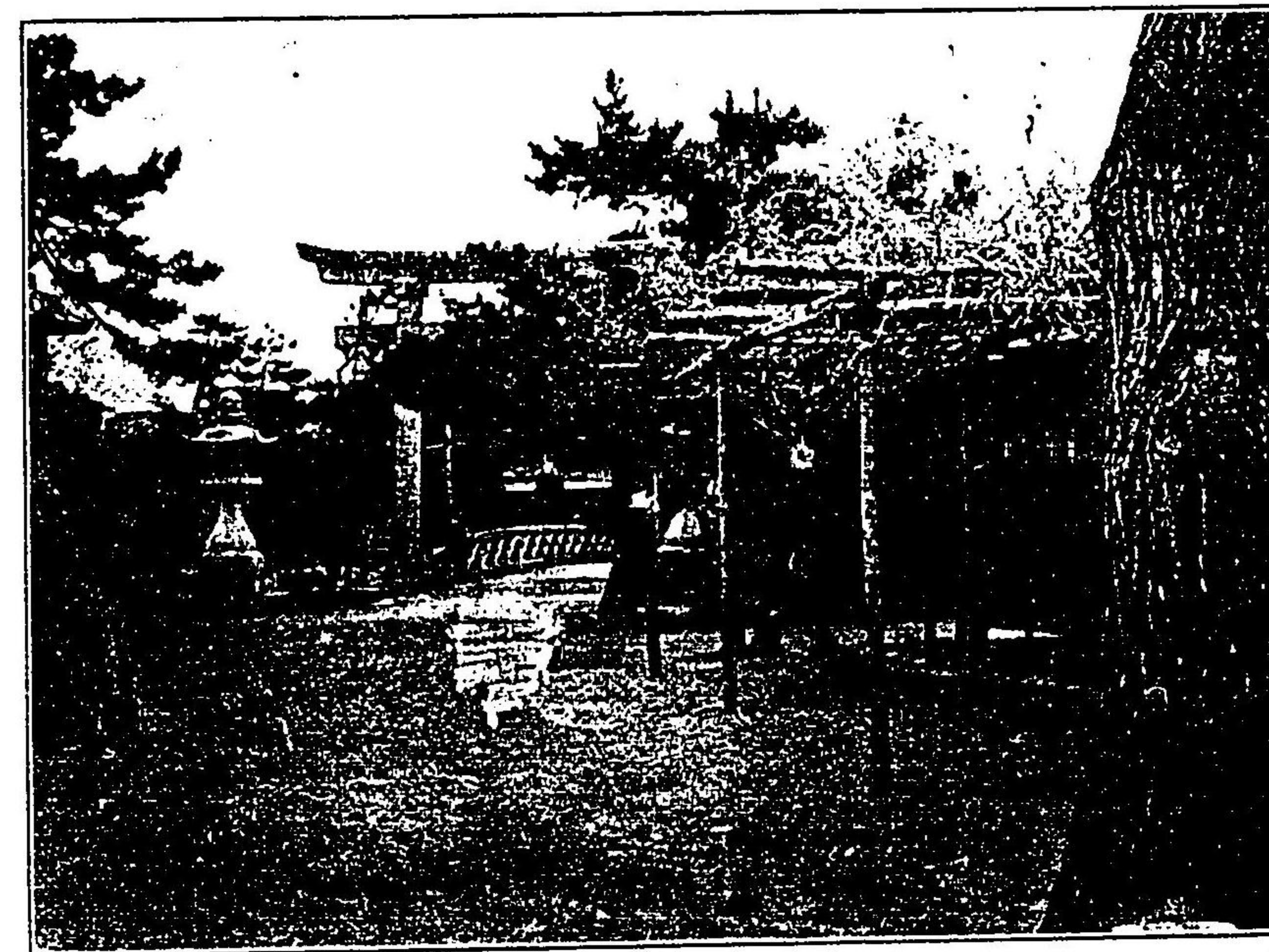
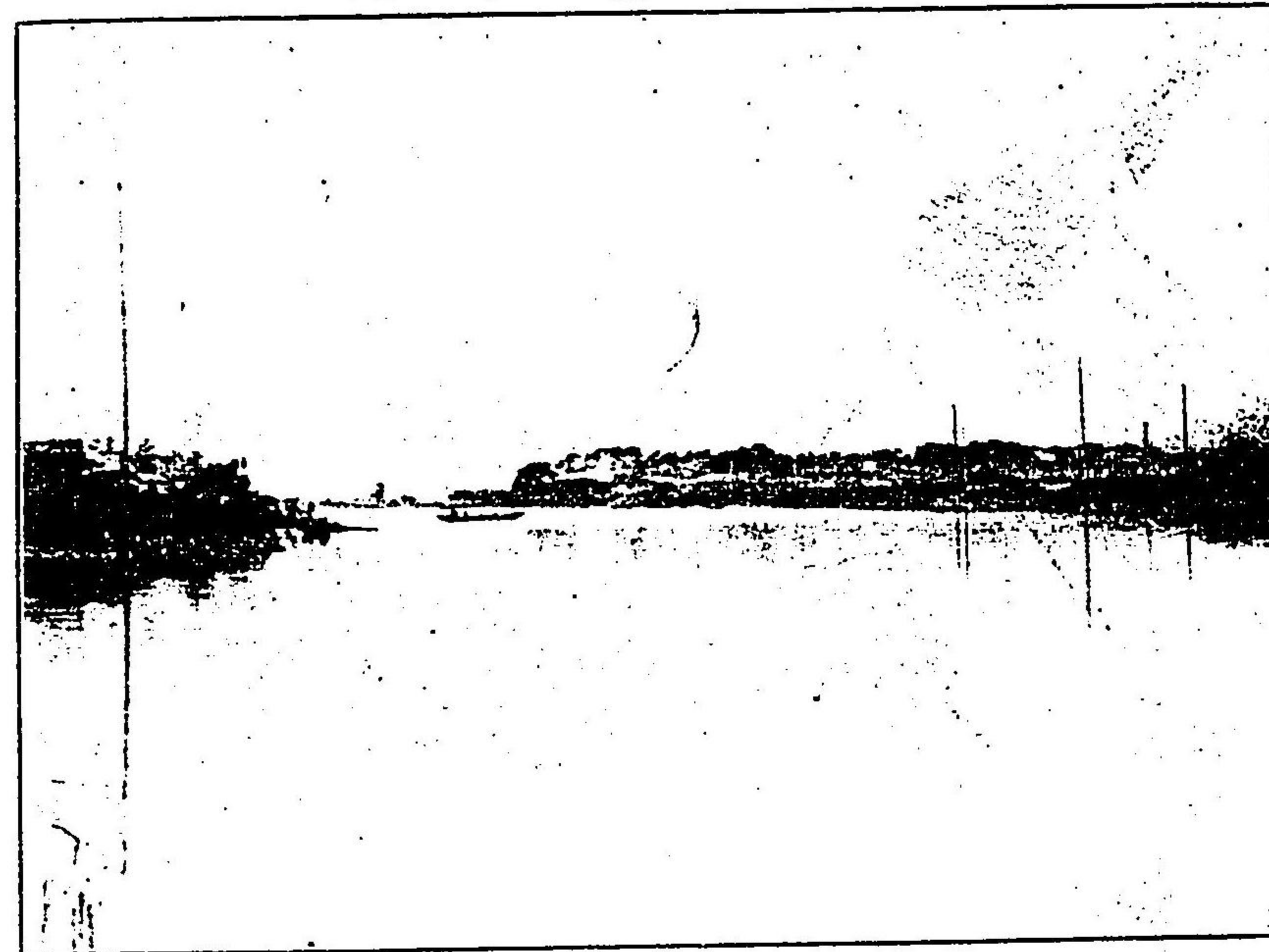
(乙) 同 夷 港 棧 橋



(第 四 十 二 圖)

港 木 小 同 (丙)

垂 沼 後 越 (甲)



(第 四 十 一 圖)

園 公 山 白 湯 新 (乙)



梅の植手御皇天德順渡佐(甲)



松れ隠の丸新阿野日村田竹渡佐(乙)

(第四十三圖)

を改造せしめ給へり。本殿拜殿等壯麗を極めたり。中の鳥居の傍に御手洗川あり。其水極めて清冽なり。正宮大明神と記したる大額は稱して小野道風の筆と傳ふ。寶物また頗る多し。此社の神事祭典は頗る古風にして其儀式見るに足るもの多しといふ。これより彌彦山頂に登れば、其登臨の美實に名狀すべからざるものありて、古志三島蒲原の平野は只是れ眼下に展開せられ、信濃川の溶々として南より北に赴くの光景は、恰も一幅の地圖を見るが如し。而して日本海の怒濤、佐渡島の青螺は西北に指點すべく、羽前岩代信濃の三國に堺せる高山峻嶺も亦皆來りて一眸の下に落つ。眞に縣下の大觀なり。山上の南端稍平なる處に彌彦の奥社あり、又小さき石を建てたる古墳二あり。之を繞らすに石柵を以てせり。山下の野積濱に洞窟あり。稱して天香語山命が始めて民に製鹽の法を教へしところとなし、男竈女竈なる鹽竈は其遺址なりといふ。此附近絶壁千仞、奇岩怪石に富み、風景絶佳なり。彌彦の山麓、日本海岸に沿ひ間瀬村あり。銅井に各種の沸石を産するを以て有名なり。かくて眼を轉じて、縣の南方魚沼三郡の地を觀望せんか、長岡市の南宮内



## 小千谷町

驛より汽車を下り、前橋街道を進めは二里半にして小千谷町あり。町は信濃川の西岸低き臺地上に位し、四面丘陵起伏せり。町は信濃川の河港の一にして、船舶來り集る。又水力電氣を利用して夜は電燈の光煌々たり。此地方は越後國中高田町附近と共に有名なる積雪地にして、冬期は全く堆雪の中に埋却せらるゝを例とす。町は人口七千を有し、郡役所區裁判所等あり。有名なる越後縮布の製産地なり。此附近は古來より縮布の産を以て聞えたるの地、小千谷町は殊に縞物製織の技の夙に開けたるを以てよく覇を唱ふることを得るに至れるなり。其元祖明石氏を祀れる堂は今猶斯業者の崇敬するところなり。(工業參照)町の北に彌彦神社あり。其中の一字は建築の奇古を以て勝り、本邦の建築史を飾れり。船岡山は町の名勝にして、其形船を倒にしたるが如く、信濃川は其裾を帶の如く流れ、眺望絶佳なり。上に維新の際王事に死したるものを祀る。北麓に觀音堂あり。

小千谷町より愈南すれば、三國山脈の餘派蜿蜒として南より北に通し、其向背に二大溪谷を開く。西なるは信濃川の溪谷にして、中魚沼郡の一郡を其

## 十日町

中に包み、其西南部は信濃の下高井郡と境し、東なるは魚沼川の溪谷にして、南魚沼郡を成し、其南部は上野國利根郡と相連る。即ち信州街道は西南走し、前橋街道は東南走せる也。小千谷町より先信州街道を迎れば、二里餘にして信濃川を渡る。其下流信濃川の魚沼川と相合する處山崎新田に於て、信濃川の急流を利用し、水力電氣を起し之を小千谷長岡等の市街に供給せり。斯て岩澤東下組中條新庄等を経て、十日町に至る。北越鐵道線路の來迎寺驛より八里餘なり。十日町は中魚沼郡の北部に位し、郡中の小都會にして、人口六千六百を有す。西は高田町に通し、東は三國街道に接続し、交通の衝に當れるを以て商業活潑なり。製織業は此町の主業にして、一樂風通縞縮壁燃上布紋羽二重等を産す。町に郡役所區裁判所出張所等あり。又染織學校の設ありて、盛に斯業の進歩を謀れり。有名なる七ツ釜の瀧(第十四圖甲)は此町を距ること南四里、隅倉俣村の南小松原山の半腹にあり。瀑は直下三十丈、數層に分れて級を爲し鏗然として深潭に落つ。この絶壁を形成せる岩石は富士岩にして、宛然材木をつかねたるが如く、天工爲めに人工の奇を奪ふ。里人此の絶



六日町

壁を名づけて堅御號横御號と言ふ。蓋し當時伊勢より御師の持ち來れる御稜箱に似たるが爲めなり。また一地方の奇觀たるを失はず。

十日町より信濃の國境まで約七里餘なり。信濃川を上下する川舟は十日町附近を以て其終點と爲す。

小千谷町より東に岐れたる前橋街道は蕨生川口を経て更に魚沼川の西岸に沿ひ、堀ノ内町に至る。此附近は魚沼川によりて成りたる狭小なる平地にして、小出島浦佐等の諸名邑あり。浦佐に有名なる眞言宗の古刹普光寺あり。俗に浦佐の毘沙門堂と稱す。六日町は浦佐より猶魚沼川の西岸に沿うて南すること四里の處にあり。郡中第一の名邑にして、人口二千五百を有し、郡役所區裁判所等あり。魚沼川を上下する川舟は多くは此町附近に至り止まる。この町より道路は二つに岐れ、南より少しく東に偏するを清水越街道と爲し、西南行するを三國街道と爲す。共に上野利根郡沼田町に通ずるもの、昔は關東地方の交通は必ず此地を経たるを以て、篋笠相望むと言ふがごとき光景を呈したれど、北越鐵道の開通せし以來全く荒廢して、行客甚だ稀なり。而し

村松町

て此の二路の中、三國街道猶多少の行客あり。此街道に添うて鹽澤の一邑あり。これより一山を隔て、中魚沼郡の溪谷に至るの道路あり。猶、魚沼川に添うて進めば、山嶺四合、溪流の音佩環を鳴らす如く、自づから別天地の趣を成せり。湯澤に小温泉あり。單純泉にして浴客尠なからず。これより二居驛を過ぎ、遂に三國峠に至る。

更に再び長岡市に還り、三條町に至り、其町を流れて信濃川に注げる五十嵐川の流域を記せんに、此の溪谷は南蒲原郡の半を占め、岩代國の國境に至るまで里程約十里あり。この溪谷には名邑の發達せるものなく、只、田屋に小温泉あるにとゞまる。されど此谷の西南端を縫へる一路は、所謂岩代に通せる八十里越にして、其最も奥に吉ヶ平の一村落あり。又大谷川の山門に秋小屋瀑大瀧等あり。

三條町より加茂に至り、羽生田驛より村松地方に入らんに、村松町は中蒲原郡の殆ど中央に位し、北越鐵道線路中、加茂町より五里、羽生田驛より三里、新津町より四里餘を隔てたり。人口七千九百餘を有し、區裁判所及び歩



五泉町

兵第三十聯隊の兵營を置けり。愛宕山は頂上に愛宕神社ありて眺望に富む。此山の松茸は香氣のすぐれたるを以て有名なり。又竹細工製筆生糸等を産す。南一里、瀧谷村に慈光寺あり。地の幽邃なるを以て聞ゆ。傍に不動瀧あり。村松町の北方二里餘に、五泉町あり。北線鐵道線新津町より二里を隔てたるに過ぎず。人口一萬餘を有す。此地の近來長足の發達を爲したるは、全く機業の盛なるに由れるものにして、五泉平の名は世人これを知らぬはなし。五泉平は仙臺平の袴地に更に多少の意匠を加へたるもの、其起源は約百年以前なるが、今日にては却て仙台平を凌駕するの趣あり。これが爲め商業活潑に、市街日に月に隆盛に赴く。其他絹織物綿織物生糸等を多額に産出す。五泉の東一里の處をか阿賀川は横流し、其對岸保田より岩代國に通ずる街道は川に沿ひて東に向ふ。これをたどれば、山嶺四合雲烟搖曳頗る仙境に入りたるが如し。川は屈曲して、遂に津川町に至る。此町は山間の一邑なれども、會津地方に通ずる要衝に當れるを以て、旅客の往來頗る盛なり。人口は三千餘を有し、東蒲原郡役所あり。溪山幽邃にして風景頗る佳なり。又、

津川町

水原町

此地より紫波川芝倉川の上流に溯り、大倉より岩代に出づるを六十里越と言ふ。町を距る東北里許川の北岸に草倉銅山あり。五泉町より北すれば三里半にして水原町あり。北越鐵道線路新津町を東に距ること三里なり。往時、越後府のありし所にして、往昔より發達せし都會なり。人口九千餘を有し、街衢整正人烟稠密なり。眞田織はこの地の特産物として著名なり。東一里、小島村なる梅護寺に八房の梅あり。越後七不思議の一なり。此附近に出湯温泉あり。

北陸街道は新潟市を出て、信濃川阿賀川の兩大河を渡り、平野の間を東走すること七里、遂に北蒲原郡の一都會新發田町に達す。町は北蒲原郡の殆ど中央に位し、東西二十七町南北二十五町、人口一萬二千を有せり。此地は元、溝口氏の城下にして、其城址は町の北新發田本村にあり。今は全く其城を壊ちて、僅かに濠渠と壘壁とを存し、其の地の一部を割きて第二師團第十六聯隊の營所を置けり。新潟街道より入れは道路は長く町の中央を通し、其の繁華なる處に、下町上町等あり。地に第十五旅團司令部郡役所裁判所中

新發田町

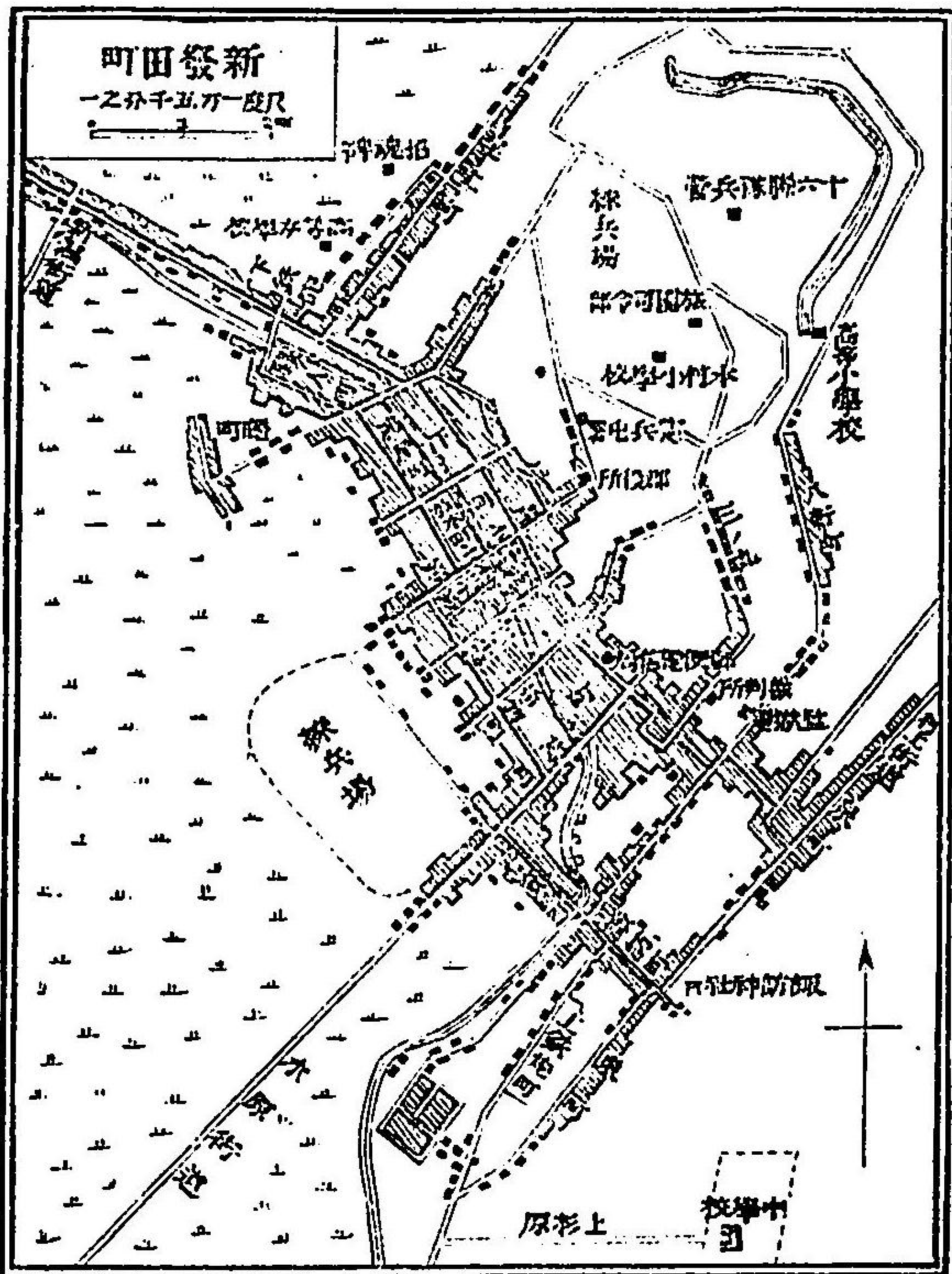


學校高等女學校等あり。練兵場は町の西部にあり。又町の北方に招魂碑あり、

東方に諏訪神社あり。

新發田町の東南に向ひ、北蒲原郡の山間に赤谷の鐵坑あり。製鐵所に於て其採掘を試みしも、今は暫く其業を中止せり。

新發田町を出て、東北に向へば、三日市町あり。これより愈北すれば、二里餘にして、



菅谷の不動あり。また、乙村に大日堂あり。本堂の右にある小堂及び六角堂千體佛堂觀音堂等は皆千年以前の建築にかゝると稱せらる。



欠

MISSING